南條範夫
兵庫独り旅



TOKYOBOOKS

南條範夫スリラー時代小説の代表傑作！

月影兵庫は直参の旗本次男坊に生れた。窮屈な宮仕えが大嫌いで屋敷を飛び出し素浪人となる。

十剣無統流を極め上段霞切りの秘技があり、至って女色を愛し、本来は朗らかな性格である。

「兵庫独り旅」は恋女房に死なれ無常を感ずるがゆえに中仙道の旅に出る……その宿場、宿場において起るさまざまな事件へ挑戦する月影兵庫が久方ぶりの明晰な推理と凄絶な死斗をくり展ぐのである。

テレビ放映中の「素浪人月影兵庫」は「上段霞切り」「片腕の男」「秘剣縦横」「兵庫独り旅」各篇の原作から構成したものである。

兵庫独り旅

目次

二百両嫌疑　五
傷だらけの宿駕　三四
高崎の怒り虫　六四
次郎太仇を討つ　九三
軽輩の恋　一二四
森の中の男　一五四
義兄の正体　一八五
火を噴く隻腕剣　二三

装幀　村上豊

二百両嫌疑

一

蕨の宿を出て、しばらく北へ行くと、いわゆるやき米坂になる。やき米というのは、今のおこしのようなもの、それを名物にして売っている店が、何軒か並んでいた。

やがて、右手に、こんもり茂った森が見えるのが、月の宮廿三狸堂。

刈屋三蔵は、その鳥居の傍の大きなけやきの根元に腰を下ろした。

疲れたという程でもないが、歩きつづけて、少々汗ばんだので、肌をくつろげて、樹蔭を渡ってくる涼風を入れようと思ったのである。

尤も、れっきとした武士の身、あまりだらしなく胸をはだける訳にはゆかない。第一、腹巻きには、大事な藩の公金二百両がはいっている。

そのせいか、江戸の外れ板橋を出てから、まだ三里とは来ていないのだが、神経は相当つかっていた。誰をみても、怪しい奴に思われるのだ。自分が懐中に二百両持っていることを、誰も彼もがちゃんと知っていて、そいつを狙っているような気がしてならない。

若くはあるし、腕に覚えもあるし、なに大丈夫だと自信は持っているものの、持ちつけない大金、それも自分のものではないものを持っているのだから、こちこちになっていたのも、無理はないだろう。

肌の汗を拭いつつ、自分の歩いてきた方を、何気なく眺めた三蔵の手が、動きを止めた。少し唇を突き出して、不審気になった顔つきが、まだどこやら子供っぽい程の若さだ。

二十一歳といいながら、酒も飲まず女遊び一つしたことのない男なのである。

同藩の中村佐兵衛の娘、千世と婚約がととのって、今後役目を終えて戻れば、間もなく一緒になることになっている。

江戸の藩邸にいた間も、ここ迄街道を歩いている間も、千世のくくれ上った可愛い顎や、ぽっちゃりした手の甲などを思い出してほんのちょっと放心状態になり、気がついて自分を叱りつけたことが何度もある。

千世は、決して美女ではない。三蔵がそれを、実際以上に美化して考えているのは、彼が凡そ女と

いうものに経験がなかったからに過ぎない。

その三蔵が、街道の方を眺めて、肌を拭う手をやめ、すっと立上ったのは、その方向から、若い娘が、杖をひきずり、笠を傾けつつ、息を切らせて走ってくるのを見たからであった。

正しく、何者かに追われているのだ。

笠を上げて、三蔵の立ちはだかった姿を見ると、娘は、よろけるようにからだをぶっつけてきた。

「もし、お武家さま、お願いでございます、お助け下さいまし」

と、縋りつかれた刹那、三蔵の頭にぴんと来たのは、

——二百両！

ということであった。

甚だ色気のない話だが、三蔵にしてみれば、それが何よりの関心事であったし、すがりついた娘の手が、危く腹巻きの上に触れそうになったせいでもある。

——男女を問わず、美醜を問わず、道中で傍によってくる奴は凡て、怪しいと思え。

江戸を発つ時、上役がそう言って教えてくれた。

——ふん、おれは引っかからないぞ。

と、精々冷静を装って、女の手をそっと突き放し、

「お娘御、如何なされた」

と、自分では落着き払って言った積りだったが、残念ながら、語尾が少々震えていた。

若い娘の手に触ったのは、生れて始めてであったし、その娘がまた、飛切りの別嬪だったからである。

千世などとは、まるで比較にならない。

色が抜けるように白く、血の色が薄く皮膚の上から透いて見える。黒い大きな瞳は、恐怖と不安とで濡れ輝いていた。顔からくるのか、きっちり締めた襟元からくるのか、物凄く良い匂いが鼻先をくすぐる。

娘は、まだ苦しそうに息を弾ませながら、後を振り向いた。

「――あの男が――」

と言われて、三蔵が、その方に視線を走らせた。

けやきの大木の両側に並ぶ街道の、遥か彼方に、大柄の浪人風の男が、歩いてくるのが見えた。

相当、足が速いらしい。ぐんぐん近づいてくる。

「あの男が、何かしたのですか」

三蔵は、娘が手を離したので、ほっとし、同時に、少々惜しいような気もしていた。

「はい、蕨の宿で、休んでおりました時、話しかけて参りまして、しつっこくつきまといます。やき米坂で、あの男が買物をしております間に、逃げて参りましたが、何だか怖くて、怖くて――」

――何だ、そんなことか。

と、三蔵は、拍子抜けがした。

――こんな美しい娘が独りで歩いていれば、男は誰だって話しかけたくなる。自分だって、そうだ。尤も、自分にはその勇気がないから、頭の中で考えるだけだろう。

「別に、乱暴なことをしようとしたのではないのですね」

「はい、でも――」

「どうかしたのですか」

「あの、私、お金を沢山持っています。二百両ばかり――」

腹の辺りを撫でるようにした。

なるほど、気がついてみれば、細っそりしたからだにしては、腰の辺りが少し膨らんでいるようだ。

「ですから、心配で――申訳ありませぬ、はしたないことを致しまして」

――二百両。

三蔵は、吃驚した。こんな小娘が、自分と同じだけ持っているのだ。男の自分さえ、心配なのだから、娘が心配するのは、当然である。

「あの、大宮までででも、御同道頂けませんでしょうか」

娘が、近づいてくる大男の方を、気遣わし気に眺めて言う。

「よろしい、私の側について来られるがよい」

義を見てせざるは勇なきなり――とまで考えた訳ではない。同じ二百両という金額が、妙に親近感を覚えさせたのだ。

三蔵は、両肩を張って、娘を庇うようにして歩き出した。

大男の浪人者が、すぐ背後に迫ってくるのが分る。

――何か言うか、何かし出かすか。

三蔵は、緊張し切っていた。いざといえば、刀を抜く気にさえなっていた。

浪人者が、追いついてきた。

二人と、並んだ。

娘が、びくりと肩をすくめて、三蔵により添う。

三蔵の両方の眼頭が、張り裂けそうになった時、浪人者の大きな肩が、二人を全く無視して、前方に動いていった。

二

「浪人者なぞ、やっぱり、ちゃんとしたお武家さまには、手が出ないのでございますね、本当に、有難うございました」

浪人者の姿が、かなり先に行ってしまってから、娘が、三蔵に頭を下げて言った。

「いや、なに――」

三蔵は曖昧に答えた。

浪人者と一悶着起こるかと、気を張りつめていたのだが、それが呆気なく無事に過ぎてしまうと、別の緊張が、今や彼を囚えていたのだ。

若い、しかも素晴しい美女と、肩を並べて歩いているということだけで、三蔵は、からだ中の骨がぼきぼきと音を立てそうに固くなっていた。

何か話さなければいけないと思いながら、何を話してよいか分らないのである。たった今、知り合った許り。共通点といっては、二百両の金だけだ。まさか、それを話題にする訳にはゆかない。

「あなたは、何と言われる」
やっとの思いで、そう言ってみた。
「八重――と申しまする」
「私は、刈屋三蔵だ」
聞かれた訳ではないが、対手が名乗った以上、言わなければ悪いと思った。
「どちらの御家中でいらっしゃいますか」
「高崎藩だ」
「あ、松平右京亮さまの――」
「そうだ」
「嬉しい」
「えっ」
「私、本庄まで参ります、ずっと御伴をして、よろしうございましょう」
「それは――差支えないが」
「刈屋さま、始終、この街道を往き来なさいますか」
「いや、今度、江戸へ行ったのが始めてです」

と答えた三蔵は、八重が腹巻きの辺を両手で少し揺り上げるようにしているのを認めた。二百両は八百匁位ある、重たいのだろう。

——何故、こんな小娘が、二百両もの大金を持って、独り旅をするのだろう。

三蔵は、疑問を起こした。しかし、それを口には出さない。他人の私事に余計な差出口をするのは、武士の身にあるまじき事だと教えられているからである。

浦和の宿にはいった。

「私は、大宮泊りの予定なのだが、あなたは、まだ歩けますか」

三蔵が八重の足許を見ながら言った。泥に汚れた白い足袋に、草鞋の紐が喰い込んでいるのが、痛痛しく可憐に思われた。

何でもない事でも、対手が若い美しい女だと、ひどく痛ましく思われる年頃なのだ。

「大丈夫でございます、こう見えても、旅には慣れております」

「ほう」

——何故だ。

と問い返えそうとして又、遠慮した。

本陣の前を過ぎると、左手に四角い石柱が建っている。表には「御免毎月二七市場足杭」横には

「天正十八年七月」と彫られてある。古いものだ。二七の日なら、賑やかな市が立ったところであろう。

「穀物や木綿ものをひさぐ商人たちが、遠く小田原辺りからも来るそうでございます」

八重が説明してくれる。

武家の娘と違って、妙に礼儀正しい固苦しい処はない。大丈夫な人と見込んだのか、かなり雄弁に、次から次へと話してくれるので、三蔵は、大助かりだ。

八重の小さな唇が動いて、涼し気な声が出てくるのを横眼でちらちら眺め、音楽でも聞いているような良い気持になっている。

大宮の宿にはいった。町並十二町五十六間、戸数三百二十軒。

「私は、西小床という宿に泊ることになっているのだが」

「私も、その旅籠に泊めて下さいまし」

二人連れ立って土間にはいって来たのを見て、宿の者が、

「いらっしゃいまし、お早いお着きで——お二人さんでいらっしゃいますね」

と、唄うように言う。三蔵が慌てて、

「いや、連れは連れだが、部屋は別々に頼む」

番頭が、にやッと笑った。

「へい、へい、よろしうございます。お隣り同士のお部屋をおとり致します」

部屋を別にとって、一風呂浴びて戻ってきた三蔵が、食膳につこうとしていると、八重が顔色を変えて、走り込んできた。

「刈屋さま、怖い」

「え、どうしたのです」

「先刻の浪人者が——今、お湯から上ってこちらへ来る途中、廊下でちらっと見かけました」

四、五軒しかない宿屋なのだ。同じ方向に行くものが泊り合わせたとて不思議はない。

「心配せずともよい、私がついている」

「はい、あの、お食事、こちらでさせて頂いても、よろしうございましょうか」

必要以上に怖がっているのがおかしくもあったが、それだけ頼られていると思えば、悪い気はしない。

「そんなに怖ければ、床につくまで、ここで話して行かれるがよい」

食事が終ってからも、次々に話しかけてくる八重を見ている中に、三蔵は少し憂鬱になってきた。つい何時間か前までは、それなりに可愛く美しく思われていた許婚の千世が、ひどく田舎臭い不器

量な女に思われてきたのである。

——こんな美しい娘もいるのだ、この娘に比べれば、千世など。

と考えていると、八重が急に、

「ああ、もう四つの鐘が鳴りました。ついおしゃべりしていて申訳ありませぬ。明日もあること、お休みなさいませ」

つと立ち上って、隣室に消えてゆく八重の後姿に、三蔵が重苦しい声をかけた。

「何かあったら、いつでも声をかけて下さい」

八重が、振向いてにこっと頬笑んで、襖を閉め切った。

三蔵は、床についたが、容易に眠られない。隣が気になるのだ。

気にしたって、どうにもなるものではないのだが、やはり気になる。

いっそのこと、浪人者でも忍び込んできて、八重が助けを求めてくれればいいと思う。

自分が飛び出して行って、浪人者をしたたかにうちのめす。八重が、感謝の眼を輝かせて、なまめかしい寝衣一枚の姿で、自分にとりすがってくる。

そのはずみに、八重の柔かいからだを抱きしめて、それから——

あられもない空想に、三蔵の呼吸が少し弾ずんできた時、廊下に面した障子が、すうっと一尺余り

開かれた。

三

月の宮の前で、三蔵と八重とを追い越した浪人者は、宿の中庭に立っていた。何となく、眠りそびれたらしい。

大して広くもない庭を、ぶらぶらと歩き廻っていたが、突然、樹蔭に身を寄せた。

誰かが、軒下を伝って行くのを見たのだ。

痩せて、両肩の尖った男である。

ゆっくりと歩いているのを見ると、同じ泊り客で、同じように眠りそびれたものかも知れないと思った。

だが、その男は、軒下を離れて、月光の射す処に出ると、急に、矢の如く疾走し、裏木戸の方へ消えて行った。

——妙な奴。

浪人者が、すぐに、その後を追ったが、その影を見失って、腕組みをしながら、前のところに戻ってきた時、

「きゃあっ」

と、屋内で、非鳴が聞こえた。

帳場の方から、宿の者が走ってきた。

少し離れた処に泊っていた旅客の何人かも、愕いて、集ってきた。

娘は廊下に立って、がたがたと震えていた。

「どうなされましたぞ、御客人」

と言う亭主の言葉には答えず、少し障子の開かれた部屋の中を、慄える手で指す。

覗き込んだ亭主が、

——うわあっ、

と叫んだ。

高崎藩士刈屋三蔵が、心臓を、ただ一つきに刺し殺ろされていたのである。

忽ち、宿中が、上を下への大騒動になる。

報せによって、代官所から、役人がやってきた。

犯人はよほどの手練の男なのだろう。寝ている処とはいえ、悲鳴も挙げさせずに、一刀で心臓を貫いたのだ。胴巻きの金はなくなっていた。それが二百両あったとは、誰も知らなかったが、金が失く

なっている以上、物盗りが目的の奴が、殺ったに違いない。

八重の申立ては、次の如くであった。

「隣の部屋で、妙な叫き声がしましたので、はっと眼がさめ、刈屋さま、刈屋さまと二度程声をかけました。御返事がないので、夢にでもうなされていらっしゃるのかと思い、そのまま眠ろうとしましたが、そこの障子が開く音がして、肩の広い大きな男の影が障子を横切って消えてゆきましたので、不審に思って廊下に出てみましたら、障子の開いた処から、刈屋様の死んでいらしたのが見えたのでございます」

「その、逃げて行った大男というのは、どんな様子であったか、もう少し詳しく覚えておらぬか」

「そこの廊下の角を曲がるのをちらっと見ただけで、それも怖くて、よくは覚えておりませぬ。でも、髪の形など、どうやらお武家のように思われました」

陳述にぴったり適合する容疑者は、正しく、同宿の浪人者である。

その浪人者は、あたしが寝所にゆく時、まだ庭をうろついていたのを見たと立証した女中がいた。

浪人者が、きびしく訊問されたのは、当然である。

「姓名を承わろう」

「姓は月影、名は兵庫」

「何れにか御仕官か」
「いや」
「御住所は」
「ただ今、おるところ」
「生れを聞いているのだ、江戸の方か」
「左様」
「御両親は」
「言いたくない」
「有態に申立てぬと、疑いは濃くなる」
「勝手に疑ったらいいだろう」
「なにッ」
「おれは、両肩の尖った痩せた男が、裏木戸へ逃げてゆくのを見た。あの男が犯人だと思う。早く手配をした方がよいな」
「娘の申立てでは、肩巾の広い大きな男だったという、痩せた肩の尖った男というのは、殊更に反対を申立てているのではないか」

「好きなように考えるがよい」
「一応、代官所へ同道して貰いたい」
「どこへでも行こう。しかし、おれのしった事ではない。ばかな奴だ、まごまごしてる中に、犯人は、逃げてしまうぞ」
「貴公の指図は受けん、早く役所へ来さっしゃい」
代官所で、暁方まで取調べられた。
三十両近い金を持っているのを見て、一人の役人が不審を持った。
「これは、貴公のものか」
「そうだ」
「浪人の身で、こんな大金を持っているのは、妙だな」
「浪人が金を持っていて悪いことはないだろう、第一、三十両位の金を大金などと言うのが、おかしいな」
一々、癪に触わるようなことを言うので、役人も少々意地になって追究していると、他の役人が袖を引いて、傍に呼んだ。
「実は、あの殺された刈屋という男の所持品を調べてみたら、高崎藩の江戸留守居役から、国許の勘

定奉行に宛てて、刈屋に二百両持たせてやるという書状が出てきた」

「というと、殺ろされた刈屋は、二百両持っていた訳だな」

「そうだ、ところが、あの月影という浪人者は、どう調べても、三十両しか持っていない」

「うーむ、どこかへ匿くしたのかも知れんな」

「しかし、それを突きとめねば、彼奴を有罪にする証拠がない」

「少し、手きびしい拷問にかけてみるか」

「いや、それは穏やかでない、それより、彼奴を一応放免して、後を尾けさせてみたらどうだろう」

四

時の権力者松平伊豆守の甥。二千石をとる直参の旗本月影吉左衛門の次男坊に生れた兵庫だが、窮屈な宮仕えは真っ平と、いくらもあった養子の口を断って、屋敷を飛び出した。

惚れた女の桔梗というのと一緒になって、十剣無統流の道場を開いたが、桔梗が流産して、間もなく儚くなってしまうと、いささか無常を感じたものか、道場を畳んで、漂然として、旅に出た。

剣は強いが、女には固い、というような謹厳な男ではない。至って女色を愛する、本来は朗らかな性格である。その為、桔梗の生きていた頃も、屢々角を生やさせたが、本人一向に平気であった。

持って生れた性癖は、恋女房に死なれて、少し無常を感じた位では、容易に癒りはしないが、差当りは積極的に浮気する程の気はない。

蕨の宿で、珍らしいほどの別嬪の娘を見つけたが、

——ほう、美しいな。

と思っただけで、見過した。

ところが、その娘の証言で、殺人強盗の嫌疑を受け、一晩中調べられたのだから、少しは腐りそうなものだが、どうやら無事に放免されると、のうのうとした顔付きで、宿に戻ってきた。

気味悪がっている宿の者に、支払いを済ませると、

「亭主、飛んだ掛り合いで気の毒であったな」

と、まるで他人事のように言った。

「昨夜の娘——八重とかいうのは、如何致した」

「今朝方、お発ちになりましたが、お気の毒に、お役人衆に色々責め問われて、ひどくおびえておられました」

「可哀そうにな」

と言いすてて、宿を出た。

別に急ぐ気配には見えなかったが、加茂、諏訪の両社を右手に見て、上尾の宿についた頃、先を行く、八重の姿を認めた。

すたすたと追いすがって、肩を並べた。

ふいと、横を見た八重が、

——あっ。

と、声を呑んだ。

「なかなか、脚が早いな」

兵庫が、大きな顔を明るく笑わせて言う。

「あの——お武家様、代官所の方は」

と、うろたえ気味に聞くのに、

「お前の証言のお蔭で、ひどい目に遭ったぞ」

「あれ、私は、そんな——」

「分っている。悪気があったのではない。慌てた時には、痩せた男が大男に見えたりするものだ。気にするな」

「はい、御迷惑をおかけして済みませぬ」

「殺ろされた男は大分金を持っていたそうだが、私の方も三百両持っていた」
十倍に水増して、けろりとしている。
「三百両！」
「うむ、幸いにそれを私に頼んだ日本橋の呉服問屋の書状があったので、疑いは晴れた。私は、問屋の用人棒なのだ」
「まあ、でも、お疑いが晴れて、ようございました。私もそれで申訳が立ちます」
「なに、お前に悪いところはない。私が、いかにも浪人者らしいしおれた服装をしていたのが、いけなかったのだ」
「そんなことはございませぬ。お武家様は御立派でございます」
「然し三百両持っているとは見えまい」
「まあ」
と、八重が上眼づかいに睨んだ。娘にしては、ひどく色っぽい眼つきである。
「私など、そんな大金を持ったら、とても怖くて、独り歩きは出来ませぬ」
刈屋には、二百両持っていると言ったのに、そんなことを言ったのは、まだ対手に心を許していないからだろう。

「そんなものかな」

と、軽く聞き流した兵庫が、

「ところで、お前、若い娘の身空で、しかも、その器量で独り旅では、大金など持っていなくても危いぞ」

「御冗談を――」

「いや、おれのような狼が、すぐに喰いついてくる」

「構いませぬ」

「ほう、どうしてだ」

「どうせ、私は、本庄につけば、狼の餌食になる身でございます」

「妙な話だな」

「恥を申さねば分りませぬが、江戸で太物屋をしております私の父は身持ちが悪く、飲む、打つ、買うの放埒、その上商売の手違いから、郷里本庄の角屋伝兵衛という物持ちに、三十両借用致しました。それが返えせぬ時は、私が伝兵衛の妻になる約束、その約束に従って、私は本庄に参るのでございます。伝兵衛はもう七十に近い色好みの老人、その妻になると決ったこの身でございます。どんな事があっても、大したことではございませぬ」

「それはまた、理不尽な話だ、金の代りに生身の娘をよこせとは、怪しからぬ」
「何事も宿命でございましょう、もう、諦めております」
俯向いた娘の睫毛が長く、微かにしばたいているのを、笠の下に覗き込んで、兵庫が、眉をひそめた。
「諦めることはない」
「えっ」
「私が、話をつけてやろう。私も呉服問屋の用人棒だ、太物の取引きについては、多少存じておる。三十両の支払い、方法によっては待てぬこともあるまい。たとえば半金でも内金に入れて、後を月なしにして返えしてゆくという話合いのつかぬこともあるまい」
「はい、でも、その十五両も、調達する目当てがありませぬ」
「まあよい、それは私に委せてくれ」
と言ったところをみると兵庫、この娘と一緒に本庄へ行く気になったらしい。
話しつつ歩く道は、捗がいって、間もなく桶川の宿につく。
米麦の集散地として知られているだけに、穀物蔵が、いくつも立ち並んでいる。参覲交代の諸大名が、みなこの宿で一泊してゆくので、本陣もなかなか立派な建物である。

「今夜は、鴻の巣泊りにしたいが、まだ歩けるかな」
「大丈夫でございます。お武家さまのお話を伺って、すっかり元気が出ました」
一里三十町歩いて、鴻の巣。
七十三軒の旅籠屋、十二軒の遊女屋、この近辺の遊びどころである。
鴻神社の筋向いにある中村屋という宿の前に、二人が、足をとめた。

五

部屋は別々にと、要求したのだが、亭主が気を利かしたつもりで、最近建て増した奥の離れの二間続きに、二人を通した。
一風呂浴びて、盃を重ねると、兵庫はすぐに酔が廻った。
傍で酌をしていた八重が、
「良い色におなりになりました」
と、大きく瞳を開いて、打ち仰ぐ。
「うむ、昨夜一晩中、石頭の役人どもに訊問されて、一睡もしていないので、少々疲れている。酒が、ばかによく利く」

「本当に、私のつまらぬ一言のために、お気の毒なことでございました」
「そんなことはない。が、とに角、もう寝よう、眠くてならぬ。お前も、疲れただろう、早く寝るがよい」
と、あっさり言われて、八重は少々不足らしい顔をしたが、
「では、次の間でやすませて頂きます」
と、座を立ってゆく。
兵庫が、床について小半刻。
間の襖が、そっと開いて、八重がはいってきた。枕許に膝をついて、兵庫の肩をちょっと突いて、
「もし」
「どうした、八重」
「裏手の方で妙な物音が致します、気味が悪くて、眠れませぬ」
「なに、物音？」
耳を澄ませたが、何も聞こえない。
眼の前に、少し膝を崩した八重の、寝衣一枚の姿、白い脛が、薄暗い行燈の影に、ほのかに見えている。

娘の意図は、明瞭である。

ここまで据膳を据えられて、見逃がすような兵庫ではない。

「怖ければ、ここでやすむがよい」

と、八重の細腰を抱いて、夜具の中に引き入れた。素敵な匂いがする。

震えながらも抱きついてくるのを、じっと抱きしめると、小柄に見えたのに似ず、むっちりとしたからだつき、腰の大きくくびれた絶品である。

「いいのか、八重」

兵庫が、柄になく念を押した。

「はい、どうせ伝兵衛にもてあそばれるものと覚悟していた身でございます。なろうことなら、あなたさまのような、頼もしいお武家さまに――」

と、八重が消え入りそうな声で囁いた時には、兵庫は早くも、その下紐を解いてしまっていた。

桔梗が死んでから、久し振りの、愉絶極まる瞬間を、堪能するまで味わいつくして、兵庫はぐったりと眠りに落ちた。

同じく死んだようにぐったりとなって添い伏していた八重が、しばらくすると、そっとからだを起こした。

肩の尖った痩せた男が、庭の闇の中から、姿を見せた。

「素浪人らしいが――」

と、呟く対手に、

「ふ、三百両」

「えっ」

「早く――」

うなずいた男が、八重に導かれて、兵庫の臥している座敷にはいった。

正体なく眠っている兵庫の顔を、しばらく眺めていたが、ゆっくりと腰の刃を抜き放ち、その心臓をめがけて、真一文字に突き下ろす。

だが、兵庫のからだが、さっと、横転し、男の脚をすくったのが、一瞬早かった。

――ちっ、失敗った。

と、男が、素早くからだを起こした時には、兵庫は既に、すっくりと立っていた。越前守助広をわし掴みにしている。

「三百両に、釣られたか」

兵庫が、にこっと笑った。

「生憎、本当は、三十両しか持っておらぬ。命を乗てるほどの金ではないな」
「畜生！」
さっと斬りつけてくるのを、右に開いて躱した兵庫が、
「斬られたいのか」
と、助広の柄に手をかける。
「喜十郎、何をまごまごしているんだい、早く殺っちまわないか」
敷居の上に立っていた八重が、打って変った伝法な声で叱咤した。
「おう、姐御」
と、喜十郎が、太刀先鋭く横に薙いできた刹那、兵庫の右手が大きく弧を描いて、得意の上段霞切り。
びゅっと音がして、血飛沫が、壁に飛んだが、その同じ壁に向って、胴体を離れた喜十郎の首が、水平のままびしゃりと叩きつけられた。
——あっ！
身を翻えして逃げようとする八重の襟首をひっ掴えて、引戻した兵庫が、
「こんな事ではないかと思うてはいたが、よもや、お前の方が姐御だとは思わなかったな。この悪党

に、使われている可哀そうな女と思うていたのだが」
「えい、畜生、殺せ、殺せ」
「殺してもよい奴だが、つい先程、一緒に寝た女、さすがに斬りたくはない」
「殺せ、殺せ」
八重が自棄になって、わめいている時、どやどやと、庭先から走り込んできたものがある。
役人の一団である。
部屋に一足踏み込んで、
——これは！
と愕いて、互に顔を見合せる。
「大宮の小役人共か、刈屋殺しの犯人は、それそこに首と胴と別々になっている。胴の方を探ってみれば、刈屋の奪られた金が見つかるだろう。この女は、手引きをした奴だ、どうしてやろうかと処分に困っていたところ、お主たちが来てくれたのは有難い。引き渡してやるから、適当に処分してくれ」
「これは愕いた。実は、われわれは、あなたを追って——」
「分っておる。追っつけ来るだろうと思っていたのだが、早くこの死体を片附けて女を連れていって

くれ」

「しかし、色々と――」

「えい、訊問は明日にしてくれ、眠たくてたまらぬのだ」

死体の取片附けと、八重の引立てに大騒ぎしている役人や宿の者を尻目に、兵庫は、血の臭いの籠もる部屋の真中で、すやすやと鼾を立てはじめた。

傷だらけの宿駅

一

熊谷の宿に近い荒川堤、川に面して茸ぶきの茶屋に「みかりや」と屋号を記した旗が立っている。名物は、ゆずの中身をとって、中に米粉やみそに味つけして入れた柚餅子。

床几に腰を下ろして、その柚餅子をつまみながら、茶を啜っていた兵庫が、亭主に尋ねた。

「熊谷寺――というのは、近いのかな」

蓬生山熊谷寺は、いうまでもなく、鎌倉時代に熊谷次郎直実が、一の谷の合戦で平敦盛を打ちとっ

てから世の無常を感じて出家して蓬生坊を名乗ってから創建したと伝えられているものだ。

「へえ、宿におはいりになって、本陣の前を少しお出になりますと右手に見えまする。広大なものでございますから、すぐに分かりまするわい。境内には蓬生坊さまのお墓や、敦盛さまの供養塔などがござりまする」

何度も聞かれていると見えて、口べたなおやじにしては、よどみなく答えた。

「ここへおく」

代価を盆の上において、兵庫は立ち上った。土堤道を、荒川に沿って、西へ行く。

堤に腰を下ろして、画帖に筆を動かしている若い男があった。

絵師でないことは、髪の形でも、腰の二本差しでも、はっきりしている。

——珍らしく、風流な男だな。

自分では描かなかったが、一通り絵を見る眼はもっていた兵庫は、静かにその背後に寄っていって、画帖を覗き込んだ。

しばらくみていて、

——うーむ

と呻った。

――これは素晴らしい。この若さで、しかも本職の画工とも思われぬのに。

驚嘆の呻り声を、もう一度洩らした時、その若い武士が、ふっと顔を上げた。

二人の視線が会った時、兵庫が言った。

「失礼致した。あまりお見事なので、つい見とれて――ぶしつけの点お許し戴きたい」

対手は、澄んだ美しい瞳を笑わせて、

「つたない業を――お賞め頂いて恐縮です。どうも、なかなか上手く描けません」

「いや、失礼ながら、本職の絵師と雖もあなたほどの技を持っているものは、少ないでしょう」

兵庫の感心ぶりが、何の誇張もお世辞もないものだったことは、すぐ対手にも通じたらしい。対手も素直に悦びの色をみせた。

画帖と筆を納めて立上ろうとする。

「これは――私がお邪魔をしてしまったのではないかな」

「いやそんなことはありません。今日はこの位にしておきます」

見れば旅姿ではない。

「ああ、この土地にお住まいですか」

「いえ、私は、三河の、田原藩のものです。この先の深谷に近い瓶尻村に支配地がありますので、滞

用でやってきました。明日は一先ず、江戸の藩邸に戻ります」

「ほう、こんな方に、田原藩の支配地があったのですか」

「ええ、熊谷までは忍藩領ですが、少し外れると、天領（幕府直轄地）や旗本の知行地、諸藩の飛地、社寺の領地が入り乱れて、殆んど四分五裂の状態です」

「ほう、それでは、御支配地も大変でしょうな」

二人は、熊谷の宿に向って、土堤の上を歩きながら話した。

対手は、確かに兵庫より若い。恐らく二十歳を一つか二つ越した程度であろう。そのくせ、妙に落着いていて、品位があって、言うことも老成している。兵庫も、自然に、些か改まった口調になっていた。

「熊谷はさほどでもありませんが、その先の深谷という宿が、どうもいけないのです。町の商家の三割以上がはたごやで、どの家にもいかがわしい飯盛女を三人から五人ぐらいおいていますし、遊廓もあります。その為近辺の町や村の若い者が、金を握るとすぐ深谷にやってくる。そして賭博をやったり、女遊びをしたりして、すっかりなくしてしまうのですね。私の行ってきた瓶尻村でも、そんなことで家産を喪ってしまった無分別な若者が、かなりおりました」

「深谷というのは、上杉氏の居城のあった処でしょう。古い城下町はどうしても、そういったものに

なり勝ちですね」

「それにこの頃は、女や金をめぐって、若い連中が刃物三昧に及ぶことも多く、婦女子のかどわかしなども、半ば公然と行われている様子、全く驚いたものです」

宿駅にはいった。

高札場のある札の辻の近くに、本陣がある。これは海内第一といわれている有名な本陣で、四十六部屋、三百六十畳に及んだという。

「ここにお泊りですか」

「いや、飛んでもない。小藩微禄の士、もっと、ささやかな処に泊っております」

対手の男が、そう言ってから、

「熊谷寺にいらっしゃるのでしょう。それなら、もうすぐそこです」

と、かんの良いところをみせ、

「では、ここで失礼します」

と、軽く上体をかがめた。

「や、御雑作をかけました。御迷惑でなければ、御姓名を聞かせて下さい。私は、一介の浪人もの、月影兵庫というものです」

「申しおくれました。田原藩士渡辺登というものです」

若い男は、横路へ去っていった。

——若いが、どうやら優れた才能をもった男らしい。

兵庫は、その後姿を見送って、何かもう少し話したいような気がした。

勿論、その青年が、後年、崋山の名で蘭学者として画工として、田原藩の年寄格として、才名を天下に馳せるに至るであろうなどとは、夢想もできなかったが、少くとも自分とは全く種類の違う、しかも互いに相牽くもののある人間として、不思議な親近感を感じたのである。

熊谷寺に参詣してから、宿を外れた。

左手に、秩父路が別れている。

五尺位の石標に、

——ちちぶ道、志まぶへ十一り。

と彫られている。

中仙道の次の宿、深谷までは二里二十七町、大丈夫、少しおそくなっても、今夕中にはつけると、兵庫は、大して急ぎもせず玉井村の方へ向った。

二

玉井村に着いた時には、たそがれに近かった。

村の中程に川が流れている。窪川と言う。

かなり大きい川だ。満水の時は、人足が旅客を肩にのせて渡たすので、川越場もある。今は、大した水ではない。せいぜい膝位のものだろうと思われた。

兵庫は、素足になり、袴をからげて、渡ろうとした時、

「旦那」

と、人足らしいのが、声をかけた。

「お渡し、しましょう」

「いや、よい」

「危えぜ、旦那、浅そうに見えても流れは早いんだ。足をとられると、ひっくりかえって、流されて、土左衛門になる。十二文に負けておく、乗りなせえ」

と、背を向けるのに、

「心配はいらぬ、一人で渡る」

と、兵庫がうるさそうに言い切った。

「へん、文なし侍め」

人足が呟いて、地に唾を吐いた。

兵庫が、にこっと笑った。

——成程、深谷に近づくと、人気が悪いな、呆れたものだ。

人足風情と、喧嘩する気はない。聞き流して、冷い水に足を入れた。

「へっ、しみったれめ」

人足が、今度は、やや大きい声で言った。

「どうせ、江戸で喰いつめて、逃げ出して来やがった、痩浪人だろう。十二文が惜しくて、この中仙道を、大きな面して歩くな」

他の声が、つづいた。

三、四人固まって、背後から悪口を浴びせかける。

こうまでしつっこく罵られては、いつもの兵庫なら、とっくに腹を立てて、何とか行動に出ている筈だが、又しても苦笑しただけで聞き流そうとしたのは、どうやら、あの渡辺登という青年武士と話し合っていた間に、奇妙な感化を受けて心がひどくのびやかになっていた為らしい。

人足たちは、それを意気地なしと見たのであろう。互いに眼顔で合図すると、乱暴に水を蹴立てて、兵庫の背後から川を渡り始めた。

「ほい、ほい、御免よ。のいてくれ、のいてくれ。邪魔だ、邪魔だ」

口々にわめきながら、兵庫の横を通り抜けざまに、力任せに、肩や、腕を、ぶっつけてゆく。

ひょいひょいと、巧みにかわした兵庫は、渡り終って、足を拭い、草鞋をつけた。

にやにやしながら、それを見ていた人足の群に近づいて、

「のいてくれ、邪魔だ」

「なにッ！」

「川の中では、お前たちの商売に免じて、私の方がゆずった。今度は、お前たちが譲る番だろう」

「なにッ、道は広いんだ。どこでも通ってゆきやがれ」

「川も広いのだ。どこでも通れた筈だ」

「べら棒め、おれたちは、あそこが通りたかったんだ」

「私も、そこを通りたいのだ。退け」

「こん畜生！」

腕力自慢らしい人足の一人が、真っ向から突きかかってくるのを、ひっ外して地べたに叩きのめし

た兵庫が、

「一旦は見逃してやるつもりだったが、道中旅人に、いつもこのような無法を言いかけると分ったものを、抛っておくわけにもゆくまい。こらしめの為に、少々、痛い思いをさせてやろう」

「何をッ」

「たたんじまえッ」

掛け声は、景気がよかったが、結果は甚だ振わなかった。

瞬く間に、四人とも、ひき蛙のようなぶざまな恰好で、地上に這いつくばった。それも、ただ這いつくばったのではない、それぞれ、腕や脛を、骨の折れるほど痛めつけられて、急には起き上れないらしい。

「二度と、ばかなことをするなよ」

言い捨てて振り向きもせずに、別府村から東方村へとやってきた。

この辺りに、一里塚がある。

街道の両側に、五間四方をとって、大きな榎が植えてある。

その榎の下まで来た時、兵庫は、足をとめた。後をふりむいて、

——呆れた阿呆共だな。

と、呟いた。

もう薄暗くなっている街道を、後の方から二十人位の男たちが、走ってくる。

「待てッ――やせ浪人！」

先頭にいる奴が叫んだ。

こちらは、勿論、逃げる積りはない。

追いついてきたのは、渡場人足、雲助、それに職業不明のあぶれ者たちだ。人足の中に兵庫に腕を折られた奴が混っていた。

「あの野郎だ」

そいつが、通の真ん中に突っ立っている兵庫を指して、叫んだ。

「やい、三一！」

真っ先に進んだのは、息杖を構えた雲助の一人だった。相当喧嘩慣れしている奴らしい。構えも板についていたが、構えるより早く、凄じい勢いで、殴りつけてくる。

「どっこいしょッ」

わざと対手の気勢を削ぐかのように、ゆっくりと兵庫がこれに応じた時には、その息杖を、ちゃんと奪い取っていた。

「おい、やっちまえ」

うわっと、一団が、飢えた野犬のように襲いかかってくる。

兵庫の手にした息杖が、右手の一人の胸先に伸びて、その半裸の逞しい肌に触れたか否かと思われたのに、対手は、ぐうっと呻って、何かを蹴上げるように足を撓ねて、仰向けに倒れた。

「飛燕砕き——どうだ、次は磔打ち」

息杖を軽く投げるように突き出して、次の奴の右眼をつぶす。

「舟手張りとゆくぞ」

第三の男が、頬桁を横薙ぎにされてよろめくと、間髪を容れず、次の男が、ふりかぶった棍棒を高くはねとばされていた。

「雲雀投げ——」

またたく間に五、六人を叩き伏せられて、恐怖が人足たちの間にさっと漲った時、兵庫がすかさず、その中に飛び込んだ。

「十字乱れ——八方乱れ打ち——千鳥突き——卍張り」

十人余りの男が、得物を飛ばされ、頭を割られ、鼻をつぶされ、脾腹をつかれ、脛の骨を叩き折られた。

残った五、六人が、言い合わしたように逃げ出す。

「十剣無統流杖術の型、一通りは見せて遣わしたな、有難く思えよ」

杖をぽんと抛り出して、兵庫は、歩き出していた。

三

——ばかげた目に会ったが、これで片がついただろう。

と、兵庫は考えながら、普済寺の前を過ぎた。実際は、片がついた処ではない。これが手始めだったのだ。

深谷の宿に入る手前の行人橋の近くに延命地蔵がある。

その前で、何やら騒ぎ立てている人声がした。近づいてみると、女駕籠が一挺、それを背後に庇うようにして、四十恰好の男が大手を拡げており、その前に、二十一、二歳の若い男が、恐ろしく興奮して怒鳴っている。

「返せ、畜生！　およしをどうするんだ、返せ、返してくれ」

四十男が、手を振って、

「無茶言っちゃいけない、源太、およしはいい処に話が決って嫁に行くのだ。可哀そうだが、お前の

ような水呑百姓が、いくら想いをかけたって、もうどうにも仕様がねえ。およしの親爺も、いや、本人も、納得しているのだ。さあさあ、もういい加減で諦めて帰りな」

「いやだ、およしを返えせ。およしが納得してるなんて嘘だ。もし本当なら殺してやる。畜生、およしを返えせ」

「分らねえ男だな。一体お前、親の許しもなしに若い娘をたぶらかしておいて、まだだにのように喰いついていようってのか」

「返えせ、返えせ、およしを返えせ、畜生、どうしても返えさねえか」

懐中から、匕首を出して、中年男に斬りつけてゆく。

「危ねえ、何をする。こら、源太」

「くそっ、こうなりゃ、およしも殺ろして、おれも死ぬのだ」

無茶苦茶に突きかかって行こうとした源太の背後から手が伸びて、その匕首をひょいと取り上げた。

「やい、何しやがるんでえ」

と、喚く源太の右手を背に捻じ上げた兵庫が、中年男に向って、

——早くゆけ、

と、顎で合図した。

「お武家様、済みません」

男はびょこりと頭を下げ、駕籠を急がして、早々に、宿の方へ消えてゆく。

「やい、離せ——離せってのに、畜生」

必死にもがく源太を押えていた兵庫は、駕籠が見えなくなってしまうと、手を緩めた。

「心得違いをするな」

「離してくれ」

「離せば、大人しくするか」

「誰が——およしを取り戻すんだ。余計な邪魔はしないでくれ」

「どんな事情があるか知らぬが、刃物をふり廻わすのはいけない。家に戻って、親御によく相談してみるがいい」

「おやじも糞もあるものか。みんな叩き殺ろしてやる」

——これは、手におえない気狂いだ、

と、兵庫は、呆れた。

「それでは離してやる訳にはゆかぬ」

「どうしようってんだ、おれを」
「役人の手にでも渡して、正気のつくまで監視して貰うより仕方があるまい。若いお前を人殺しにはしたくないからな」
「余計なことだ。抛っておいてくれ」
なおも、しきりにもがくのを引き立てて、行人橋を渡り、深谷宿の下町にはいった。
と——前方からきた二人の男が、
「お、源太だ」
と、走り寄って、
「お武家さん、そいつ、お手数をかけました。あっしらにお渡し頂きましょう」
「お前たちは、源太の何だ」
「別に何でもありやせんがね、源太にじたばた騒がれちゃ、うるせえので、そいつはあっしらが、適当に処分しまさあ」
「何だか分らぬものに引渡す訳にはゆかないな」
「へっ、じゃ、どうしようってんで」
「役人に引渡して、役人の手から親許に帰えして貰おう」

二人の男が、眼を見合せた。
「へえ、役人にね」
「そうだ」
「いいでしょう。あっしが役人を呼んでくる」
一人が、走り出していった。
後に残った男は、妙に気味の悪い笑いを浮かべて兵庫を見つめていたが、ふいっと視線を外らすと、通りかかった年頃の娘に、
「よう、姐ちゃん、めかし込んでどこへゆく」
と、慣れなれしそうに肩に手をかける。
「あれっ」
娘が、ふりはなして逃げようとするのを、
「いいじゃねえか、そう澄まさなくったって」
と、しつこくからかうのを見て、
「よせ」
と、兵庫が、注意した。

「よせっ、へえ、お武家さん、この娘の親類ですかね」
「若い娘にいたずらするな」
「親類でもなけりゃ、黙っておいておくんなさい。この町で、あっしらのする事に、文句をつけるとひどい目に遭いますぜ。ふふ、今に、役人がくれば分る」
「よせ」
娘を抱きすくめようとする男に近附いて、びしりと、手を打った。
「痛えっ」
と、三角眼に鋭い光を走らせて喰ってかかろうとした奴が、
「あっ——源太っ」
と、呶鳴った。
兵庫が不覚にも手を離した隙に、源太が一目散に逃げ出したのだ。
「源太、待て」
兵庫も一緒になって、後を追ったが、もう闇の落ちていたせいもあり、細い路地に詳しいらしい源太は、巧みに家並を縫って逃げてしまった。
「お侍さん、どうしてくれるんだ」

元の処へ帰ってきた時、三角眼の男が言った。
「逃げたものは、仕方があるまい」
「ふん、そんな言い草がありますかい」
「もともと、私が捕えなければ、どうにもならなかった筈ではないか」
と兵庫が答えた時、役人を連れて、前の男が戻ってきた。

四

「どうしたんだ、甚」
「おお、吉、この侍が、源太を逃がしちまったんだ」
「何も好き好んで逃がしたのではない」
三角眼の甚と呼ばれた男が、奉行所の役人に向って、
「お聞きなすったかね。このお侍、源太を逃がしたんだ」
「故意に逃がしたのではない」
兵庫が事情を説明したが、役人は、甚と吉との顔色ばかり窺っている。
「ともかく、奉行所まで来て頂きたい」

「お断りしよう」
「役人に反抗されるつもりなのか」
「理不尽な要求には従えぬ。御免」
さっさと歩き出す。
甚と吉とが、役人に何かつっかかっていたが、何とかなだめられた様子だ。
兵庫は、下町から中町、横町と進んでいった。町並十八町、六百余軒といわれたが、成程、噂の通り、旅宿が多い。
その殆んど凡てに、宿ひきというよりも、やり手婆のような男女が立っていて、うるさく声をかける。
ここらの抱え女に食欲を起こすほどの兵庫でもない。女のいない静かな宿に泊まるつもりで、一切耳に入れずに歩いてゆくと、毒々しい声が、うしろから追いかけた。
「へっ、すっかんぴんの浪人かい。毛脛でも抱いて寝るがいいや」
「町をつき抜けりゃ、城山の古狐が待っているとさ」
江戸ではさんざん女を泣かした兵庫も、まるで型なしの態である。
——それにしても、揃いも揃って口の悪い奴らばかり揃ったものだ、この宿は。

と、半ば呆れ半ば感心しながら、新田町にはいって、漸く、まともな宿を見つけた。

一風呂浴びて、夕餉をしたためていると、亭主が蒼くなって走ってきて、

「お武家様、御奉行所から御役人衆が見えております」

「左様か、会おう」

と立上る兵庫の袖を控えて、

「もし、お武家様、どういうことか存じませんが、役人衆の中に、甚兵衛と吉太が混っておりました。事を荒立てぬがようございまする。出来れば、いくらか包んで穏便にお済ませなさった方が――」

「いくらか包んで！」

兵庫は、唖然とした。

「はい、甚兵衛たちは、この宿で、角屋という女郎屋をやっております角屋三郎兵衛の身内。三郎兵衛は、宿第一の顔利きで、町会所の町役人をすっかり押えておることはいう迄もなく、お奉行所の役人衆にも、充分に鼻薬が利いております。喧嘩をなさっては御損でございます」

「心配するな」

表の土間へ出て行った兵庫が、

「何の御用か」

「不審の点がある故、明朝奉行所まで来て頂こう」
「何が不審なのか」
「それは、奉行所に於て――」
「よし、明朝、私の方から奉行所に参る。何なと、訊ねるがよい」
「しかと、お出頭下さるか」
「くどい」
左手にさげていた刀の柄を、丁と叩いた。
仲間同志でぼそぼそ何か話していたが、
「では、ともかく明日」
と言って、早々に引き揚げてゆく。
兵庫は、部屋に戻って、手紙を二本したため、亭主に飛脚に託するように言いつけて、床についた。
二時間ぐらい、とろとろと眠ったかと思う頃、俄破とはね起きた。
宿の外に、大勢の人数が走り廻っているのを耳にしたからである。
手早く身じまいをすると、雨戸を開いて、庭に降り、外の様子を覗った。

「逃がすな、右に廻われッ」
「素ばしこい野郎だ、畜生」
ばたばたと馳けてゆく足音が遠のいたと思われた頃、庭の隅を凝視していた兵庫が、
「おい、出て来い」
と、低い声で言った。
がさっと音を立てて逃げ出そうとするやつを、一躍して、むずと肩をひっ掴んで、ぐいと顔を月光に向けると、
「や、お主は、源太と言った奴だな」
「いてえッ、なんだ、また、おれの邪魔をしようてのか」
「ばか、騒ぐな」
「糞ッ、役人にでも何にでも渡しゃがれ。うぬ、七生まで祟ってやるぞ」
「落付けと言うに、役人にも誰にも引渡しはせぬ」
「えっ」
「どうやら、私が思い違いをしていたようだ。お前が女に狂った阿呆だと思っていた——ま、それに違いなかろうが、娘を連れ去った側の連中も一筋縄では行かぬ悪党らしい」

「そ、そうなんだ。あいつら、鬼みてえな奴らだ」

「奉行所の役人まで、丸めこんで良くないことを企らんでいるらしい。源太、次第によっては、お前の味方になってやってもよい。一通り事情を話してみろ」

「お、お武家さん、本当かい。お、おれは口惜しいんだ」

ぐったりと力を抜いて、泣き出した源太を、兵庫は自分の部屋に連れ込んで、なだめすかしながら、話を聞いた。

源太は、高柳村の水呑百姓源兵衛の長男である。村の小町娘と言われたおよしと、以前から人目をしのぶ仲になっていたが、およしの器量に目をつけた深谷宿の角屋三郎兵衛が、およしの両親に多少の金を貸し、それを口実に半ばおどして、およしを角屋に引取ることにした。源兵衛にいくらかやって、源太を説得させ、およしは深谷に嫁入りするから諦めろと言わせたのだが、源太が承知する筈はない。

角屋に連れてゆかれれば、女郎にされてしまうことは目に見えているのだ。

一本気の源太は、七首をのんで、娘の駕籠を追ったのだが、行人橋の近くで、兵庫に阻止された。夜陰に乗じて、角屋の裏口から忍び込もうとして、見つかり、角屋の若い連中に追いかけられていたのである。

五

「どうじゃ、良い加減で素直にいうことを聞いたらどうじゃな。お前のからだには、大枚の金子を支払ってある。どう騒いでも、誰も助けてはくれまいぞ」

でっぷり肥った六十男が、もうそろそろ我慢がならなくなった欲情に、濁った双の眼をぎらつかせて、およしの細腕をねじ上げた。

「いけません、堪忍して――」

からだが曲って、裾が乱れて、恥かしさと厭わしさとで、骨も縮む思いに、悲し気に眉をひそめて哀願する娘の若さが、伝右衛門の油切った肉体を、うずうずさせる。

織物問屋の主人、深谷一帯随一の分限者で、同時に名うての狒々爺である。

――今宵、新しい玉がはいった。

と耳にすると、胴巻からざらりと小判を投げ出して、

――おれが買った。

と、厭応なしに、およしを臥床に侍らせたのだ。

「聞きわけのない娘じゃな。手荒なことはしとうないが」

と言いながら、その歪んだ顔付きは、もう、手荒なことをする事に悦びを感じ出していた。いきなり、およしを仰向けさまに転がし、のしかかってゆこうとした時、がらっと、背後の襖が押し開かれ、

「なんだッ！」

と、振向こうとした顔を、力一杯ぶん殴られて、狸がひっくり返った様な恰好になる。

「およし――」

「あ、源太さん」

「逃げるのだ」

あっと立上ったが、果して逃げられるものか。恋しい男の無暴な行いが、嬉しくもあったが、怖くもあった。

「心配するな。この店の者は、月影の旦那が、表の方で釘付けにしている。今の中に、裏口からずらかるんだ」

「月影の旦那？」

「くわしい事は後で言う。早く衣裳をつけろ」

今まで見たこともない華美な色ものの長襦袢一枚になっているおよしの姿に、源太がまぶし気に眼をそらせながら、急き立てる。およしも、はっとそれに気がついて、紅くなった。

ちょうどその頃、角屋の店先では、源太の言った通り、月影の旦那が、店中の男たちを対手に、不敵な啖呵を切っていた。

「亭主を呼べ。角屋三郎兵衛と言うろくでなしを呼べッ」

と、故意に乱暴に言いつのる兵庫に、店の若い者が、

「気狂いめ」

と、ぶつかって行ったが、次の瞬間には二、三人、土間に叩きのめされていた。

「やるのう、若造、おれが対手をしよう」

浪人くずれと思われる酒やけのした山賊面の男が、ずいと前に出た。

抜き打ちに、すばっと斬りつけてきた腕は、相当なものである。

「心形刀流か、それだけ出来ながら、女郎屋の用人棒とは、気の毒な」

ひらりとかわした兵庫が、さっと対手を睨んで言ったが、まだ刀は抜いていない。

「抜け」

と、対手が、叫んだ。

兵庫は、ちらっと白い歯をみせて、

「抜いてもいい——が、その時は、お主の首が、胴を離れているぞ」

「うぬッ」

右八双から、兵庫の肩をめがけて叩き下ろした一刀が、空を斬って流れた次の瞬間、兵庫の右手が、殆んどそれと逆の方向に走った。

ひゅーっと、気味の悪い音がして、浪人者の首が、眼を大きく見開いたまま、斜にふっ飛んで、横にいた男の胴に、ばさっとぶつかって、地上に転がる。

「見たか——上段霞斬り」

兵庫が、さっと血刀を一ふりすると、つかつかと、進んだ。

その凄じい気魄に圧されて、自然に開かれた人の間を、店先から土足のまま、磨き込んだ廊下に上って、

「三郎兵衛——三郎兵衛はどこだ」

と、叫ぶ。広い階段の横から、大刀をひっさげて現れた大男が、

「どこの三一だ！」

と、しわがれ声で罵りながら兵庫を見ると、鞘を抜き棄てて、真っ向からぶつかってきた。これは剣技というものではない。喧嘩場で自得した捨身の闘法だ。

そいつに向って無雑作に一ふりくれた兵庫の剣が、肩を深く割く。

「あっ、親分を――」

と、土間にいた連中が喚いた処をみるとこいつが角屋三郎兵衛なのであろう。

その三郎兵衛が、肩先を押えて、子分たちに扶け起こされながら、

「あ――役人衆！」

と、怒鳴ったのは、その時、奉行所から馳せつけた一隊が店先になだれ込んできたのを認めたからである。

「おう、役人衆、よく来てくれた。そこの浪人者、ひっくくるなり、たたき斬るなりしてくれッ」

役人を乾分たちと同じように考えている男らしい口振りである。

――うるさい事になったな。

と、刃を持ち直した兵庫の前に、役人の頭目らしいのが進み出たが、くるりと振り向いて、兵庫を庇うように大手をひろげ、

「静まれ、騒ぐと用捨せぬぞ」

と、一喝した。

そして、兵庫の方に向きかわると、意外にも、許しを乞うような声で、

「月影殿、お願いでござる。御内分に、御内分に――およしという娘は、角屋に話して、親許に戻し

まする故、何卒、御内分に」

と、早口に囁いたのである。

意外な言葉に呆れて、兵庫は対手の顔をみつめたが、にこっと笑った。

「娘を返えして貰えば、何も文句はない」

刃の血を拭って、ぴたりと鞘に収めた。

「この場はお任せする。私に不審の件あるとか、明朝、間違いなく奉行所へ参る」

「そ、それには及びませぬ」

——妙な町だな、深谷というのは。

さすがの兵庫も、唖然とした。

奉行所では、角屋の意を受けて兵庫をいためつける気でいたのだが、たまたま兵庫が飛脚問屋に託した二通の手紙の一方が、伯父である老中松平信明に宛てたものであるのを役人の一人が見つけてきたので、奉行以下肝をつぶしたのだとは、兵庫も気がつかなかったのである。

畢山渡辺登は、後年その日記の中で、

——深谷宿遊女多く風儀乱れ、若き者賭博争闘を事とす。有司賄賂を貪り、衆庶恒心なし

と、記している。

高崎の怒り虫

一

高崎藩士藤井東兵衛は、家中の人々から「怒り虫」と呼ばれていた。と言って、別に憎まれたり、恐れられたりしていた訳ではない。むしろ、多くの人は、それを多少の愛情をもって、口にしていたのである。

東兵衛が何かにつけて、ぷんぷん怒り出すことは確かであったが、それはいつも彼の正義感にもとづいていたのだ。

普通の人なら苦笑して済ますようなことでも、彼は憤慨した。その憤慨の様子が、いささか子供っぽく、無邪気とさえ見えるので、朋輩たちは、

「おい、又、怒り虫がごねだしたぞ」

と、袖をひき合い、眼を見合わせたが、とに角、その言い分は理論的には正しいのだ。

——うるさい男だ。

と、譲歩してやると、東兵衛は、途端に上機嫌になって、対手を夕食に誘ったりした。

それを目当てに、わざと一応反対してすぐに譲歩する奴もいる。東兵衛の妻いとは、評判の美女だから、その家に招ばれて、夕食に一杯やるのは悪くないのである。

東兵衛が、そんな美女を妻にしたについても、今だに人々の間に一口噺になっている伝えがある。

三年前の某日、東兵衛が突然、御奏者番の磯部覚之進の宅に訪れてきた。

それまで大したつき合いはないし、名うての怒り虫が何の用件でやってきたものか不審に思ったが、覚之進はとに角、座敷へ招じ入れた。

「藤井氏、夜中何御用かな」

と言いながら、ふいと対手の顔をみた覚之進は、ぎくりとして、思わず床の間の刀掛けに手を伸ばしたと伝えられているが、それは少し大袈裟であろう。

しかし、東兵衛の表情が、ただならぬものであったことは間違いない。元来、大柄で、顔立ちも派手な方なのだが、その造作の大きい眼と鼻と口とが、こちこちに固くなって、そのくせ、うっかり指一本でも触れようものなら、ぐわっと爆発しそうに緊張し切っているのである。

「ど、どうされたのだ、藤井氏」

覚之進がいささか気味悪くなって質ねた時、東兵衛は、噛みつくように言った。

「いと殿を、拙者の妻に頂きたい」

ええっ、と言ったきり、覚之進はしばらく言葉が出なかった。緊張が一度にほぐれて、くっくっと笑い出したくなってくるのを、辛うじてこらえた。

「それは又、余りに急な話じゃが」

「いと殿を頂きたい」

東兵衛が、まるで二十年越しの貸金の催促でもするかのように断乎として繰り返えす。

「ま、ま、待たっしゃれ、藤井氏。他の話と違って、こんなことは、そう急いではならぬ」

「頂きたい」

要求が簡潔になるにつれて、声が大きくなったが、覚之進の方はもう愕かない。かえって段々余裕が出てきて、この生一本の青年が、やや滑稽な愛すべき存在に見えてきた。

「ま、聞かれい、藤井氏。わしはな、家内を先年喪くして、忰の進太と娘のいとと三人で暮らしてきた。進太は未だ子供だし、いとは母親代りになって随分と苦労してきておる。じゃから、せめて婚姻の対手は、わしが押しつけずに、本人の好いておる男に添わせてやりたいと思うておる」

なかなか物分りのよい事を言って、東兵衛の顔を眺めた覚之進が、急に頬をほころばして、

「そうじゃ、ここへいとを呼んで、本人の口からお答えさせよう」

「い、いと殿をここへ――いけません、それはいかん、それは困る」
東兵衛が、大きな顔をまっ赤にして叫んだ。
「何故じゃな、それが一番たしかではないかな」
「いけません、いけません、それは」
東兵衛は、腰を浮かした。
「拙者はこれにて失礼仕る。いと殿の御意向は、磯部殿からお聞き下され、後刻また――」
あとしざりに退ってゆく恰好を見て、覚之進が、わざと大声で、
「いと、いと――ちょっと参れ」
「磯部殿、それは――」
「まあよいではないか、藤井氏。座にお戻りなさい」
「いや、拙者は――」
大きな男がへどもどしながら、後しざりして行って、縁側まで出てしまった。
奥から出てきたいとが、
「あ、藤井さま、危い、庭にお落ちになります」
「あっ、いと殿――御免」

ぱっと躍り上った東兵衛が、脱兎の如く、磯部の家を飛び出して行った。

覚之進はその後で腹を抱えて笑ったが、いとに東兵衛の希望を話すと、げっと眼を剝いた。

いとが、即座に、藤井さまならば、嫁に参りとうございます、と答えたからである。

翌日、いとの承諾を報らされて、霞に包まれたように茫乎としている東兵衛に、いとが、釘を打った。

「東兵衛様は、怒りんぼだと承っておりますが、私にはお怒りにならないで下さい」

「うむ、怒らぬ」

「しかと約束して下さいますか」

「約束致す」

こんな約束がなかったとしても、恐らく東兵衛は、いとに向って怒りつけたりはしなかっただろう。凡そ呆れる位、ばかばかしくいとに惚れ込んでしまっていたからだ。

むろん、惚れてるだの、好きだなどと言う甘ったるい言葉は一言も述べなかったが、いとを見るその巨きな瞳を見ただけでも、誰にでもそれと分るほどであった。

いとに向っては、完全に憤怒を封殺していたが、外においては今迄通り依然として怒り虫であった。

いとには怒るどころか、いつも叱られた。
「あなた」
「何だ」
「昨日、またお城で、憤り出されたそうでございますね」
「うむ、あれは――」
「いいえ、理由は伺わなくてもようございます。もう少し朋輩の方に対して、御自分の感情を抑えるようになさらなければいけません」
「うむ」
「怒り虫などと言う綽名は、あまり御名誉ではございませぬ」
「うむ」
「大ていのことは、お腹に収めて、お顔に出さぬようになさいませ」
「うむ」
ぼんぼんというういとの顔を、東兵衛は照れ臭さそうに眺めている。何を言われているのか、充分に分っているか怪しいものだ。ただ、別嬪だなあ――と思いながら、見ているだけかも知れない。

二

いとに叱られて、少くも自分では出来るだけ怒らないように努力しているつもりでいた東兵衛が、前後を忘れて憤慨するに至った事件が勃発した。

家中の勘定方勤務の三輪善蔵と言う男が、自害したのである。

善蔵は、比較的東兵衛と親しかった。どちらも一種の正義漢だったからかも知れない。

自殺の理由は、全く不明であった。

善蔵は、両親も健在、妻との仲も良く、子供こそなかったが、何一つ不足を言わねばならぬような事はないのである。

だからこそ、東兵衛が憤慨したのだ。

——あの善蔵が、腹を切らねばならぬ理由がどこにある。あいつは、立派な奴だった。何故、自害したのだ、こんな莫迦なことがあるか。

葬儀の席でも、涙を流さんばかりにして怒った。

いくら怒っても対手がいるわけではない。憤慨は空に散ってゆくばかり。始めの中は合槌を打っていた朋輩たちも、次第に疲れて、言葉少なになった。

――どいつもこいつも、冷淡な奴らだ。あの善蔵が死んだと言うのに。

独りで三輪の家を出たが、そのまま家へ帰る気がしなかった。

家に戻れば、いとの前で怒った顔をしている訳にはゆかない。と言って、家に帰るまでにこのむしゃくしゃした憤りを抑圧してしまう自信もなかったのである。

連雀町の方へ、足が向いていた。

善蔵と、何度か飲みに行ったことのある「はるよし」と言う小料理屋の暖簾をくぐった。

「あ、藤井さま」

と走り出てきたきくと言う女が、

「三輪さまが――飛んだことに」

と、泣き顔になった。

善蔵と連立って来た時、いつも席に侍ってくれた女だが、そんなに素直に哀しみを見せられようとは思っていなかったので、東兵衛は、ちょっと吃驚した。

同時に、冷淡過ぎるように思われた同僚への反感が再び頭を抬げ、

「うむ、善蔵の奴、何故自害などしおったか、おれに一言も告げずに、くそッ、ばかやろうめ」

と、怒り虫を爆発させた。

奥まった小部屋に落着いた時、銚子を運んできたきくが、わっと泣き崩れた。
「どうしたのだ、きく」
「藤井さま、わたしは――」
泣きながらの告白を聞いて、東兵衛はむーむと呻った。
きくは善蔵といい仲になっていたのだ。
――あいつ、妻女といかにも睦じそうにしておったが、ちゃっかりと、きくも手に入れておったのか、怪しからん奴じゃ。
と思ったが、これには別に腹は立たなかった。何しろ対手は死んでしまっているのだ。それに、きくの洩らした一言は、そんなことを東兵衛の頭から吹き飛ばしてしまったのである。
「藤井さま、善蔵さまは本当に御自害なさったのでございますか、殺されたのではありませぬか」
「ばかな、何を言う、自害したのに間違いない」
叱りつけた東兵衛が、急に眼を鋭くして、
「きく、お前、何か知っておるな、善蔵が誰かに殺されるような危険でも冒していたのか」
「いえ、わたくし、何も――」
「ばかッ、匿すな。知っているだけのことを教えてくれ、おれはあいつの自害が、どうしても納得で

きないのだ」

しばらく躊躇していたきくが、話し出したことを綜合すると、この数ヵ月来、善蔵は、ひどく悩んでいた。藩の事情を全然知らないきくにはよく分らないが、何か上役から厳命されている仕事がある。それをすることは心にそまぬことなのだが、色々の義理があって、どうしても断れない——と言うようなことらしい。

「心に染まぬことでも、我慢してなされませ、已むを得ぬ場合があります」

きくが、自分の単純な経験からそう言ってみたが、善蔵はかぶりを振った。

「ただ気が進まぬと言うだけの事ではない。それは正しくないのだ。高崎藩の為にならないのだ」

「それならば、どんな義理があっても、お断りなさいませ」

「そう簡単にはゆかぬ、第一、わしが断れば、わしをないものにして、他の者にやらせるだろう」

善蔵が沈痛の声で答えた。

きくが、善蔵の死を殺害されたのではないかと疑ったのは、こうした問答を覚えていたからなのだ。

東兵衛は、頬の肉をぶるぶる震わせた。

「そうか、それで分った。そんなことでもなければ善蔵の奴が自殺する筈はないのだ。ようし、畜

生、あいつを自殺に追いやったからくりをあばいてくれるぞ」

憤然として、はるよしを出て行くと、前後の見境いもなく、家老の宇川甚十郎の処に走り込んだ。きくから聞いたことをそのまま洗いざらい述べて、

「勘定奉行に不正ありと考えまする。速かに、お取調べ方、願いまする」

と、勢込む。

宇川は、落着き払って聞いていたが、

「さようか、事実とすれば奇怪千万のこと。よろしい、わしが、しかるべく取調べてみよう、御苦労であった」

と、応揚にうなずいた。

——今にも勘定奉行が逆さにひっくり返される、そして善蔵の魂も、浮かばれるだろう。

東兵衛は張り切って、家老の処置を持っていた。

が——公けには何事も起らなかった。

しかし、蔭では何事か起っていたに違いない。その証拠は、意外な形で三日後に現れた。

はるよしの女、きくが、何者かに殺されたのである。

三

きくはその日、何人かに誘い出されたらしいが、発見された時には大心寺の裏手の草むらの中に仰向けになって殺されていた。脇腹を深くえぐった傷があった。

東兵衛は、きくの惨死を知ると、からだ中から火を噴くのではないかと思われるほど、激しい怒りを感じた。

直ちに宇川甚十郎に面褐して、

「御家老、きくが殺されました」

「きく？　何者じゃ、それは」

「過日申し上げました筈、三輪善蔵の情婦でございます」

「三輪の――ああ、さようか」

「これを何とお考えになりますか」

「何と考えると言うと、別に――そのようなふしだらな女ならば、色々と男出入りもあろう、その為に殺されたのではないか。何れ町奉行の方の取調べで分ることであろうが」

「きくは、不仕鮮な女ではありませぬ」

「ふん」
「きくが殺されましたのは、三輪の自殺致した理由を存じておった為でございましょう。御家老は、私が申上げましたことを何人かにお話しなされたでしょう」
「むろんじゃ、取調べの為には、その係りのものに話さねばならぬ」
「三輪を自殺に追いつめた奴らが、それを耳に入れ、きくが更に深いことを知っているのではないかと考えて、口を塞いだのではございませぬか」
「藤井」
「はっ」
「一体、何びとかが三輪を自害に追いつめたなどと言うのは、何を証拠に申すのか」
「それを、お取調べ頂きたいと――」
「取調べてみたが、勘定奉行には何の不審もない」
「では――」
「お前は、勘定奉行吉村造太郎が何か不正を行い、三輪を強圧していたと言う証拠を持っているのか」
「いや――それは」
「仮りにも勘定奉行の職にあるものに対して、そのようなことを申す以上、もう少し慎重に口を利く

がよい。ここの処はわし一人の胸に納めておいて遣わす。軽々しいことを口に致すでない」

いきり立っていた出鼻を、ぴしりと叩き折られた。

全く宇川の言う通りである。市井の小料理屋の女の言ったこと位で、勘定奉行を弾劾したとて、取り上げられる筈はないのだ。それも、はっきりした内容のあることならとに角、まるで雲を掴むようなことしか聞いていないのである。

自分の愚かさに腹が立って、家に戻ると、いとが、袖で刀を受けとりながら、

「あなた」

「何だ」

「何を怒っているのです」

「怒ってなど、おらん」

「いいえ、怒っています。嘘を言ってはいけません」

「怒って——おる」

「何故、怒っているのです」

「自分のばかに腹が立つのだ」

「どう言うことです、それは。お話し下さいまし」

「つまらぬことだ」
「お話し下さい！」
「うむ、話す。怒るな」
一部始終を話すのを聞いたいとが、
「吉村造太郎どのに不正があるかどうか、私には分りませぬ。でも、仮りにあったとしたら、御家老宇川さまにお取調べを願われてもむだでございましょう」
「何故だ」
「宇川様の御先代は、吉村家の本家から養子になられた方、又、造太郎どのの御妻女は宇川様の従兄弟に当る秋山兵衛どのの御息女、更に近く造太郎どのの長女さよどのが、宇川様の甥御に当られる関口俊一郎どのの処に嫁入らるる筈」
「うむ、よく存じておるな、こんぐらがっておって、一度位聞いたのでは分らん」
「何れにしても、御両家は容易ならぬ御親密の間柄です」
「そうか、御家老、それで庇っているのだな。うーむ、怪しからん、公事と私事とを混同しおって」
「私に怒っても、何もなりません」
「怒ってはおらん」

「どうなさるおつもりです」
「吉村どのに直接ぶつかって真否を質す」
「自分から、悪いことをしたと白状される方だとお思いになりますか」
「刀にかけても、白状さす」
「も少し、頭をお使いなさいませ」
「なにッ」
「怒ってはいけません」
「怒ってはおらん」
「勘定奉行所に、御存知の方があるでしょう。そこから筋を辿って、吉村どのの不正の動かぬ証拠を掴むより他に方法はございますまい」
「なるほど」
「私も、少し探ってみます」
「お前が――どのようにして」
「家中の方で御内諸が、妙に裕福な方が二、三あります。どこからそれだけの収入があるのやらと蔭口を利く人がありましたが、私は別に気にもかけておりませんでした。でも、吉村どのに何かあると

しますれば、多少それに係りがあるかも知れません。その二、三の方は、いずれも吉村どのと極めて親しい方々ばかりなのです」

「ふーむ、益々奇怪だ。ようし、こうなれば、ただ善蔵やきくの霊を慰めると言うだけではない。御家の為に、徹底的に吉村一派の行動を洗ってみるぞ、うーむ」

「そんなに怒ってはいけません、冷静になさらないと失敗します」

「怒ってはおらん」

東兵衛はいとの勧告に従って、下部倉平と言う朋友の処に行った。

いつもなら、例の調子で単刀直入に問題にぶつかってゆくのだが、いとに言い含められているから、それとなしに話を三輪善蔵のことから始め、

——いい奴だったのに、可哀そうに。

と下部を話に引き入れた。

善蔵が、上役の吉村に対して、何度か激しい意見を述べて、そのたびに手ひどく叱責されていたこと、しかし善蔵の父が在職中、吉村に何か深い恩義を受けているらしく、善蔵は結局、吉村には頭が上らなかったこと——などを探知することが出来た。

いとの方の収穫はもっと大きかった。多分、男より女の方がおしゃべりだからであろう。藩内の一

部では半ば公然と囁かれていたが、東兵衛は全然知らなかった事実を、すっかり聞き出してきたのである。

家老宇川、勘定奉行吉村、普請奉行戸田三郎兵衛らが、倉賀野河岸の改修工事や、城中の殿舎の普請に当って、工事を請け負った町人たちと結託して、莫大な私利を貪っていると言うのだ。

四

非番を利用して、東兵衛は、倉賀野へ行った。

倉賀野河岸工事について調べる為だ。

中町の「鳥川」と言う料亭で、吉村や戸田が何回か町人たちに饗応を受けたことをつきとめた。日が落ちてから、高崎城下まで一里十九町の道を戻ってきて、南町から秋町へかかろうとした。三十間ほど前をゆっくりと歩いている武士がある。

眉巾が広く、背が高く、東兵衛と大体同じ位の大柄な男だ。違うところは、東兵衛がむしゃくしゃして、足早に歩いているのに、その男は、ひどくのんびりと足を運んでいることだった。

小さな橋を渡って、連雀町にはいろうとした時、突如、その前方の男に、左右から切ってかかったものがある。

まるで、黒い大きなこうもりが、翼を拡げて襲いかかったように、東兵衛の視野の中でその影が躍った。

——あっ、卑怯な。

かっと憤激して、東兵衛は走った。

走りながら、刀の鯉口をひろげていた。

だが——東兵衛が、その場に走りついた時には、何事もなかったかのように、大柄の武士は突っ立っていた。走ってきた東兵衛を見て、夜目にも白い歯をちらっとみせ、

「ほう、まだ、いたのか」

と、落着いた声である。

「ば、ばかな、拙者は、貴殿が襲われているのをみて——」

「あ、さようか、これは失礼致した。御懸念なく——両名とも逃げ失せ申した」

二人の刺客が襲いかかった途端に、この男はひょいと身を沈め、両手の拳で、二人の胸を突き上げ、よろめいた弱腰を、ポンと蹴り上げた。二人とも、つんのめったような恰好になったが、男の顔を見上げると何やら捨ぜりふを残して、逃げ去っていったのだ。

東兵衛は、拍子抜けがした。

「何のお怪我も、ござらんか」
「一向に――」
「夜盗とも思われぬが、何か貴殿にお心当りがござるのか」
「ない」
「はて」
「人違いだ。奴ら、逃げ去る時、藤井ではない――と呟きおった」
「えっ」
東兵衛が愕いた。
「藤井と言うのは、私です」
「ふん、すると、あなたと間違えられた訳か、これは面白い。そう言えば、二人は、背恰好も同じ位、後からみれば間違えるかも知れんな」
――変な奴だな。
東兵衛は、対手を見直した。刺客に襲われたと言って面白がっている男は珍らしい。
「あんたが狙われたとすると、狙われる覚えがあるのですかな」
「ないこともありません」

――おれを殺そうとした奴は？

大体、見当がつかないこともない。この数日、吉村一派の不正をかなり深く突っ込んで調べてきているのだ。

――おれを殺そうとしたことは、奴らが自から自分の罪を認めているようなものだ。畜生、こうなれば、藤井東兵衛、命にかけても、お家の為に、吉村一派を叩きのめしてくれるぞ。

怒り虫の東兵衛が、憤然としたのだから、大柄の武士も、はっきりそれに気付いた。

「大分、気が立っておられるようだな」

「いや、別に、憤っては、おらん」

「怒らん方がいい、落着いて、命を狙った奴に対する手段を考えることだ」

二人、肩を並べて、歩き出していた。

「私は高崎藩士、藤井東兵衛と申す。私の為に、御迷惑をかけてすまぬ」

「私は、江戸の浪人、月影兵庫。別に迷惑ではない。御心配なく」

それっきり兵庫が何も聞いてくれないので、東兵衛の方が少し興奮をもて余した。

「これには色々と深い仔細がござる」

「さようか」

「奸賊が拙者の命を狙っているのです」
「さようか」
「善蔵を殺ろし、きくを殺ろし、更にまたこの私を――」
「もう二人まで殺されているのですか」
「そうなのです、彼奴ら、断じて、許さぬ」
東兵衛が昂然と胸を張って叫んだ時、前方から転がるように走ってきた男が、東兵衛に真正面からぶつかりそうになって、
「あ――旦那さま」
「勘介、どうしたのだ」
「お、奥さまが」
「なに、いとが、どうした」
「何者かに、さらわれて」
「いとが、さらわれたッ？　勘介、どこのどいつだ、いつのことだ、言え、言え」
勘介の首っ玉をつかまえて、力任せにゆすったが、勿論そんな処から答えが出る筈はない。勘介が苦し気に眼を白黒させただけである。

東兵衛は、頭を二つにたち切られて、正当の思考力を喪ってしまったもののように、勘介をしめ上げている。

「藤井氏、慌ててはいけない。落着いて、事情を聞きなさい」

兵庫が、その腕を押えて言った。

「落着いていられるか、これが——いとは、いと、どこへ行ったのだ」

「ばかッ、落着けッ。恥かしくはないのか、藤井氏」

大喝されて、東兵衛、さすがにはっと、己れを顧みる余裕が出た。

五

東兵衛に誘われるままに、兵庫は、その家にやってきた。

勘介の話によると、いとは東兵衛の帰りが遅いので、ちょっと門口までと言って出たが、間もなくその叫び声を聞いて、裏木戸にいた勘介が走り出てみると、三、四人の男がいとをひっさらって、走ってゆく。

必死になって追いかけたが、立止った一人に力一杯地上に叩きつけられ、漸く起上った時には、もういとの姿は見えなかったと言うのである。

東兵衛は、兵庫に落着け、落着けと言われながら、眼の前に赤い矢が無数に飛び交うようで、呼吸さえ苦しくなってきた。

いとが、荒くれ男たちに取り押えられて、もがき苦しんでいる姿が、あらわにされた円い乳房や、ふくよかな腿が、到頭、東兵衛の、忍耐を叩き破った。

眼を血走らせて、起ち上る。

「どうするのだ、藤井氏」

「吉村の屋敷へ、躍り込む」

「いと殿、必らずそこにいると思うのか」

「それは分らぬ、しかし、必らず彼奴が」

「恥をかくだけだ、よせ」

「このままではおれぬ、いとが――」

「慌てなくともよい、先方から何とか言うてくる」

「なに」

「いと殿を囮りに、お主を誘き出しにくるだろう」

――成程、そうか、よし、いつでも、どこにでも乗込んでいってやる。

東兵衛が、やむを得ず腰を落ちつけ、これまでのいきさつを簡単に話していると、果して、玄関に、書状を投げ込んでいったものがある、勘介が、すぐにそれを持ってきた。

——いとの身が心配ならば、即刻、月光庵に参れ、ただし、独りに限る。

「月光庵とは何かな」

「普請奉行の戸田三郎兵衛の別宅です」

「ふん、八万二千石の藩の普請奉行ぐらいで、別邸を持つとは贅沢なものだな」

「とに角、私は、行ってくる」

「命を喪うだけだな」

「構わぬ」

「どうだ、藤井氏、私に任せてみないか」

いきり立っている東兵衛を、どうなだめたものか、しばらくすると、兵庫は東兵衛と連れ立って、東町の外れにある月光庵へやってきた。

こんもりした樹立に囲まれた可なり立派な邸である。

何事か囁いておいて、兵庫は邸の中に入って案内を乞うた。

「藤井東兵衛代理の者、浪人月影兵庫」

と言うのを聞いて、取次に出た侍が、
「代理では駄目だ、本人に来いと言え」
「代理とはいえ、本人以上に大事な要件を持っておる、取次げ」
巨きな眼で睨みつけられて、気味の悪くなった取次が一旦引込んで行ったが、すぐに現われて、
「その右手の柴打戸をはいって、庭へ廻ってくれ」
庭に面した広間に、七、八人のものがいた。
「東兵衛代理とは、その方か」
「普請奉行、戸田三郎兵衛とは、その方か」
「無礼者！」
「ばかめ、おれは高崎藩から一粒の禄も受けておらぬ、庭に廻れとは、何事だ、無礼者」
一介の浪人者の分際で、恐ろしく横柄な奴だと、戸田は呆れると同時に憤然としたが、傍にいた四十恰好の喰えない面の男が、
「ま、待て、始めから喧嘩してしまっては話にならぬ。月影とか、わしは勘定奉行の吉村だ。藤井の代理として重大な要件で来たと言うが、どう言うことか、一応聞こう」
「ふん、お主が吉村か。成程、賄賂の好きそうな面をしておる。要件を話してやろう。愕くな、おれ

は自害した三輪善蔵の従弟だ。ここに善蔵が自害直前に残した遺書を持っておる」
「三輪が――遺書を！」
「そうだ、お主らが年来の積悪を悉く詳細に曝露した遺書だ」
吉村と戸田とが、視線を合わせ、凶悪な殺意を互いの眼の中に読みとった。
左右の侍たちに、合図しようとした瞬間、
「慌わてるな、この遺書を売りに来たのだ」
「うーむそうか、いくらで売る」
「金はいらぬ、他に所望がある。藤井の女房いとを返えしてくれ、おれの惚れている女だ、連れて逃げる」
「どこへ逃げる」
「大阪へ」
吉村と戸田とが、眼交せした。何としても善蔵の遺書は取り上げねばならぬ、吉村が、
「よし」
とうなずいて、傍の男に、指図した。
連れてこられたいとが、

「おお、いと殿、無事であったか、さ、私と一緒に来るのだ」

と、さも、悚し気に言う兵庫を見て、狐につままれたような顔をしたが、その兵庫の瞳が物凄く雄弁に動いているのを見て、何か理由があるものを感じて、いそいそと、その傍によってゆく。

「待て、先に、善蔵の遺書を貰おう」

「うむ、ここにある」

ぽんと縁側に書状を抛り出し、いとを連れて、柴折戸の方へ足早に立ち去ろうとする兵庫に向って、

「待てッ、くわせ者め」

「逃がすな、彼奴を」

五人の男が、ばらばらと庭にとび降りて、追ってきた。

書状の内容は、白紙だったのだ。

「いと殿、お逃げなさい、外に藤井氏が待っている」

いとを表の方に突きやっておいて、追ってきた五人の前に、泰然と突き立った。

「さあ、片附けるぞ」

と言って、にこっと笑う。

「ふ、不埒な奴、かたり者め」
「愕いたな、人の妻女を拐かした奴らからそんなことを言われようとは」
「うぬ、くたばれッ」
柏木と言う腕自慢の男が、抜打ちに斬りつけていった。
——びゅーッ
と、異様な音がして、夜気の中に血が飛んだ。いや血ばかりではない。生首が二間程空を飛んで地に墜ちたのだ。
兵庫の剣は、もとの上段に戻っていた。
「吉村！」
声と共に、大きなからだが跳躍し、次の瞬間吉村が突っ伏していた。
「戸田、きさまもだ」
と言う声より先に、逃げかけていた戸田が、肩から肋骨まで斬り下げられた。
庭に走り込んできた東兵衛が、
「月影氏、お蔭にていとは無事逃がしました、この上は、共々」
と言いかけて、七つの死体に気づき、

「これは怪しからん、月影氏、何故私にも一人位残しておかなかったのだ」
「怒るな、藤井氏――よく怒る男だな、全く」
兵庫が、おかしそうに笑って、血刀を拭った。

次郎太仇を討つ

一

上野の国碓氷郡の碓氷の関所は、横川の関所ともいわれている。安中城、板倉伊予守が預っていた。
番頭として安中藩の桑原安衛門、その下に番士、横目、定番、足軽、人見女が常駐して、「出女・入鉄砲」を厳重に検査する。
その足軽の中に、十六歳になる次郎太という少年がいた。
もともと関所の前に「峠屋」の看板を掲げていた茶屋の伜である。
関所の前の茶屋は、普通の茶店とは違う。関所を通過しようとする者は、まずここに行って関所

手形の下見をして貰う。差支えなしと見れば、茶店の主人か番頭が案内して関所の大門に連れてゆく。

その間に、関所の役人に対する心得を話して聞かせるのだ。

例えば、女改めをされる時は、人見女と呼ばれる検査係の女の袖に、一分銀をそっと投げ込めとかいうようなことである。

この峠屋の主人勘兵衛は五年前に、何者とも知れぬ者のために殺された。

ちょうど関所を預っていた安中藩の三原伝蔵の任期満ちて安中へ戻り、後任の桑原が到着する前日であったため、役人たちもその送迎に忙しく、充分に犯人を詮議する暇もなかったらしい。遂に犯人は分らず仕舞であった。

当時十一歳であった少年次郎太は、父の仇を討つことを決心した。

父の横死につづいて、店が人手に渡り、母親のとみと二人で軽井沢に移ったが、十五になると、無理に願って、関所の足軽にして貰った。

六尺棒を携えて、番所の前に立つ役目である。

父を殺した犯人が、必らずいつかは又、この関所を通るに違いない。その時、必らず仇を討ってやろうというのだ。

犯人が誰であるかは知らない。

しかし、犯人の顔は知っていた——いや、少くも、知っていると信じていた。

父が関所の裏手の林の中で斬殺されていると聞いた時、次郎太は母のとみと共に、その場に駈けつけた。

父の死骸にとりすがって、わあわあと泣いた。

役人たちがつきそって、勘兵衛の死体が運び去られてからも、永い間、地上に坐ったまま泣いていた。

騒ぎにとり紛れて、少年に気がつく者はいなかった。

小半刻も泣いている中に、泣きつかれて、樹の根元によりかかったまま、半ば眠りかけていたらしい。

犯人——と、彼が確信する人物の顔を見たのは、その時である。

明かに武士と思われるその男は、彼の眼の前数間のところを、すっと横切っていった。

その男が、月をふり仰いだ時、頭巾の下にきらっと光った、その眼つきと鼻梁とを、次郎太ははっきりと認めた。

恐怖のために、声は出なかった。

しかし、そいつが、自分の父を殺した奴だと、直感した。
時を経るに従って、その直感は、確信に変った。
——今でも、あいつの眼と鼻とさえ見れば、はっきり分る。
そう信じている。
願いがかなって、関所の足軽になってから、毎日関所を通過する多くの人々の中で、特に武家姿の者に、眸をこらした。
眼と、鼻と——。
どれも、彼の記憶の中にあるものとは、違っていた。
「無理な話だよ、次郎太。十一の子供の時、ちらっとみた眼と鼻だけを頼りに、どこの誰とも分らね え仇を探がそうなんてのは」
と、仲間の足軽たちが、笑った。
上役たちも、健気な心掛けだと一応は感心したものの、
「まるで、雲を掴むような話だな」
と、語り合った。
母親のとみでさえ、時たま会うと、

「次郎太、とうさんのことは、不運だったと思って諦めておくれ。いつ迄も足軽などしていても仕方がない。上町の伯父さんが後楯して下さるというから、ちゃんとしたお店にお勤めして、将来のことを考えておくれ」

と、繰返した。

「いやだ、おっかさん。おれはどうしても、お父っつぁんの仇を討つ」

「だって、誰とも分りゃしないじゃないか。関所をもう一度、通るかどうかも分りゃしない」

「いつか、きっと又、通る。それに、奴が関所を通りさえすれば、おれは必らず、奴を見つけてみせる」

次郎太は、異常に頑強であった。

器量好みで勘兵衛に貰われてきたとみは、既に三十の半ばを越していたが、まだ充分に美しい。兄が軽井沢でやっている宿屋で病弱の義姉に代って働いていたが、いいよる客も相当多いといわれていた。

再婚の気がないでもないらしい。

それにつけても、倅が足軽をしていては困るのだろう。

「何も関所の足軽などしていなくても、仇を探がすことはできるじゃないか」

とも言ってみたが、

「これが一番、間違いなく、仇を探がす道なんだ、おっかさん」

「でも——ねえ」

「おっかさんは、お父っつぁんを殺した奴が憎らしくないのかい」

と言われては、とみも口を噤む他はない。

次郎太は、足軽としては、最も忠実にその仕事をつとめた。年も若いし、悪遊びも知らないし、酒も飲めないのだ。

だが、時々、問題を起こした。

「何故、描者の顔を、そのように妙な眼付きで睨みつけるのだ。何かついているのか、無礼なッ」

と、憤慨する眼の鋭い武士がいると、

「こいつは、少し蔽睨みなんで——勘弁してやっておくんなさい」

同僚が、慌てて弁解してやった。

血相変えて追いかけていった対手が、振向いた顔を改めて見直して、

「済みませぬ。人違い致しました」

と、頭を下げたことも、何度かある。

「面倒ないざこざを起こしてはならぬ。充分気をつけてくれ。お前の孝心はよく分るが、役所に勤めている身であることを忘れるでない。もそっと、慎重になってもらわねば、いつかは、われわれ一同皆が迷惑するようなことになるぞ」

定番衆の石井好之助が、次郎太を呼んで忠告した。この男、次郎太に最も多く好意を持っていたからである。

二

関所は、明け六つに開いて、暮六つに閉じる。

次郎太が坂本の母に会いに行くのは、関所の門が閉じてから後である。一夜を母の許で明かすと、未明の中に起きて、門の開くまでに関所に戻った。

その日に限って、それが昼近くになったのは、何が悪かったのか、軽井沢の宿でひどく腹をこわし、夜びいて寝られず、立ち上ると足がふらふらしたからである。

もう一日休んでゆけと、母も伯父もすすめたが、強情をはって、ひょろひょろしながら戻ってくると、同僚に、

「どうした。次郎太、おふくろの乳でもしゃぶったのか。今日は滅法忙しかったんだ」

と、権突くを喰わされた。

「済まねえ。ひどく腹を下しちゃって」

と、素直に詫まって、

「何かあったのかい」

「うむ、安中の御城下から三原伝蔵さまが見えている」

「三原さまっていうと——前の御番頭か」

「そうだ。お上の御用で、大阪へ行くとかで今朝方おつきになったが、桑原様とは以前から別懇の御間柄とか、話がはずんで、まだござらっしゃる。今夜は軽井沢泊りとか、あまりゆっくりしていられないだろうに、お蔭で、桑原様が奥に引込んだきり、面番所に顔を出されんので、一向に仕事の捗がゆかない」

「お役目をおろそかにしてまで、話し込んでるってのは、おかしいな」

「そこだよ。桑原さまも、ここに五年以上になる。そろそろ御城下に戻りたいのだ。御家老に受けのよい三原さまに、それとなく頼み込んでいるのじゃないかな」

口さがない足軽たちの推測は、かなり的を射ていた。

桑原安衛門は、永い関所番頭の役にほとほと飽いて、城下へ戻りたくてたまらない。

三原伝蔵に向かって、しきりに関所勤めの味気なさをこぼしていたのである。

「貴公はたしか二年位だったと思うが、私はもう五年余りになる。城下の灯が恋しくてならぬよ」

「なに、ここにいたって、相当面白いことはある筈だ。坂本までは十丁余り、坂本までゆけばな。ふむ」

坂本には遊女屋があった。

——雨が降りゃこそ松井田泊まり、降らなきゃ越します坂本へ、ハイハイ。

と、馬子が唄ったように、旅人は関所越えの時間を計って、雨が降れば松井田泊り、降らなければ遊女屋を楽しみに坂本へ道を急いだものである。

「それはそうだが、身分柄、そうちょいちょい出掛ける訳にもゆかぬ。それに何といっても、坂本の女は泥くさい」

「坂本までゆかなくても、この横川にでもいい女はいる。わしがおった頃、峠屋という茶屋に別嬪の女房がいた——確か、亭主が、わしの城下へ戻る前日、殺されたとかいうことだったが」

「そうだ。それは聞いている。現にその亭主の仇が、仇を探がすのだといって、この関の足軽になっている」

「ほう——それは、感心なことだな。で、女房の方は？」

「軽井沢の玉屋次郎左衛門とかいう旅籠におるとか聞いた」
「亭主を殺した犯人は、まだ見つからないのか」
「うむ、伜の次郎太というのが、その男の顔を覚えているというのだが」
と、桑原は部下から聞いていたことを語って、
「どうも十か十一の子供の頃、ちらっと見ただけで、果してそれが犯人かどうか分らぬものを、頼りない話だが、本人は大真面目なのだ。可哀想にもなる」
「しかし、天晴れな心掛けではないか」
「うむ、それはそうだが」
と言った時、三原伝蔵が、ふっと気がついて、
「これは、久振りに会ったので、つい腰を据えて話し込んでしもうた。そろそろ出掛けるとしよう」
「まあ、何もないが、昼食でもして行ってくれ」
と引き止めた。その時、定番の一人が急いでやってきて、
「桑原様、ちょっと、お願い致します」
「何だ」
「只今、若衆に姿を変えました女が、見つかりましたので」

「女？」

女の西下は最も厳しく取り調べる。それが男装していたとあれば少々面倒だ。関所の「改次第」にも、

——前髪ある男子十三歳以下は、前を明け改めること。

となっている。若い娘が男装しているのを看破するため、衣服の前を開いて乳房を検査したのである。

桑原は直ちに面番所に出て行った。

女の正体を見つけられた若衆姿の娘が真っ紅になって俯向いている。連れは五十位の男だが、蒼白になって額の汗を拭っていた。

「不埒な奴、仔細を有体に申し述べい」

桑原が、いかめしい顔で怒鳴った。

男はぺこぺこ頭を下げて、

——娘の手形を失くしてしまったので、どうしようかと困り切っていた処、松井田の宿で、若衆姿になって通れと知恵をつけられ、悪いこととは知りながら、先を急ぐ身のこと、つい、その言葉に乗ってしまっただけ、決して怪しいものではありませぬ。

と言うのである。

安中城下、下の尻の呉服小売商、丸屋久兵衛と娘のいと、田中宿の実家に帰っているいとの母親が急病で——と、必死になって、弁解する。

「安中へお問い合わせ下さりませ。決して偽りではありませぬ」

娘にかえったいとが、涙ぐんで、

「お許し下さりませ、一刻も早く、かかさまに会いたくて」

と両手をついた。その時、

「桑原氏」

と、声をかけたのは、三原伝蔵である。

「その者、城下において、見知っておる。何とか穏便に計らって呉れまいか。他ならぬ母様の重病——なあ、桑原氏、私からお願いする」

関所から坂本の宿へは、上り十町ばかり。

その坂道をすたすたと上ってきた大柄の青年武士が、宿の外れの茶店に腰を下ろして、湯茶に喉を

うるおしていた。

ここからが、碓氷峠の最難所になる。

峠の標高は一、三三六メートル。竹の御番所から羽根石の立場まで廿四丁（二・六キロ）は、かなり険しい上り坂である。

しかし、青年武士は、そんなことは大して気にしていないらしい。むしろ、眼前に聳える山容に興味をそそられたらしく、うち仰いで、ゆっくりと茶をすすった。

茶代を置いて立ち上ると、亭主が、ちらっと見て、急に愛想が良くなって、

「お武家さま、これから峠越えでござえますか」

「うむ」

「軽井沢におつきになるのは、夜分になりましょう。お気をつけておいでなさりませ」

「なに、僅か三里足らずだ。一刻もあればゆける」

「まさか——山径でございます。いかにお武家さまが御達者でも、そうはゆきませぬ」

「そうかな、ははは」

気軽に笑って、さっさと歩き出した。

成程、広言しただけあって、恐ろしく足が早い。

羽根石まで難なく一気に上り切って、更に中山から子供山稲荷の前に出る。
この辺りから、峠の頂上、熊の社までは、又、かなりの上り坂になる。
その上り坂の中程までやってきた時、前方に、ひょろひょろと、よろめくようにして前を歩いている十五、六の少年の姿を見た。
つかつかと追いついて、その横顔を覗き込んだ青年武士が、
「どうしたのか。大分、苦しそうだな」
と声をかけたが、きっと振り向いた少年の顔をみて、やっと眉をひそめた。
手を伸ばして、ぐいとその肩を掴んで、
「おい、少し、休め」
と言う。
「お武家さま、放して下さい」
「少し、休め」
「放して下さい」
「落着くのだ」
「私は——どうもしてやしません。先を急ぐのです。放して下さい」

「ばかッ、そのからだで、無理をしてはいかん」
「どうもしてやしない。大丈夫です」
肩におかれた手をもぎ放して走り出そうとしたが、ふらっと片膝をついた。
「それみろ、少し休まなければだめだ」
むりやりに、道傍の石に腰をおしつけられてしまった。
「どうなさるんです。私は、急いでいるのです。行かせて下さい」
「ばかッ」
青年武士は、少年の両肩を、両手で押えて、その顔を真正面からじっと見据えた。
「斬られてしまうぞ、そのからだでは」
「えっ」
少年が、ぎょっとしたように、眼を大きく開いて見返した。
「お前——喧嘩をしかけに行くのだろう。対手を斬るつもりでいるらしいが——」
「ど、どうして、そんなことが」
「お前の眼つきを見れば分る」
「あっ」

「だが、そんなからだでは、一たまりもなく、対手に斬られてしまうぞ」
「だ、だいじょうぶです」
「だめだ。たとえ、からだがそんなでなくても、その眼つきではだめだ」
「どうしてです」
「対手を見ない中から、そんなに興奮して、眼つきまで上がっていては、どんな対手にでも勝目はない」
「そ、そうでしょうか」
少年が、急に、がっくりとうな垂れた。
「よせ、喧嘩など、つまらぬ。命を大切にしろ」
「喧嘩ではありません」
「では、何のために、人を傷つけようと思っているのだ」
「仇を討つのです、死んだおやじの」
「仇を討つ?」
今度は、青年武士の方が、驚いたらしい。人よりも巨きな眼を、更に大きくして、
「どういう次第なのだ。話してみるがよい。相談にのってやろう」

優しく言われて、張りつめていた気が、一度にゆるんだものか、少年の双の眸に涙が滲み出てきた。

「お武家様、お話致します。私は、次郎太と申します。横川の関所の足軽をしておるものでございますが」

次郎太が、苦しそうに呼吸しながら、父の横死以来のことを話した。

「今日、腹をこわして、関所の足軽小屋に横になって寝ておりましたところ、前を通るその男を見つけたのです。確かにあの男です。すぐ後を追ってきたのですけれど、足がふらついて早く歩けず、気が狂いそうでした」

青年武士は、首を振った。

「どうも無茶だな、お前は」

「どうしてです」

「その男の眼と鼻に見覚えがあるといっても、五年も六年も前の子供の頃の記憶だけではないか」

「でも、絶対に間違いありません」

「よし、かりにその男だとしても、それがお前の父親を殺したという証拠は何もないのだろう」

「でも、あいつに違いないので」

「剛情な奴だ。仮りにも人を仇呼ばわりする以上、もっとはっきりした証拠がなければいかん」
「でも――」
「それに、たとえ証拠があって、その男が仇と分っても、そのからだで、脇差一本で対手を必らず殺せると思っているのか」
「敵わぬまでも、やってみます」
「ばかなことを言うものではない」
「ばかでも構いません」
「いかん。まず第一に、その男が確かに犯人だという証拠を掴むのだ。それから、ゆっくり考えろ。どうせ京まで一本道、からださえよくなれば、いつでも追いつける」
「はい――」
段々にことをわけて言われてみれば、その通りなのだ。次郎太が、しょんぼりと肩をすぼめてしまったのを見て、対手は、軽くその肩を叩いて、言った。
「私が、力を借してやろう、気を落とすな」
「はい」
「私は、月影兵庫と言う。頼りにしてよい男だ。ははは」

四

軽井沢は、沓掛・追分と並んで浅間三宿の一つ。碓氷峠を控えて上り下りの旅人の足休めの宿場として、賑わっていた。

町並七町、戸数百三十余軒、宿屋が多く、しかも、その何れもが飯盛り女を置いて、旅情を慰めている。

中でも大きいのが、本陣の佐藤市右衛門宅と、白木屋茂左衛門及び玉屋次郎左衛門。

その白木屋に草鞋を脱いだのが、三原伝蔵とその若党利助。それに、丸屋久兵衛と娘のいとの一行である。

伝蔵は、番頭に導かれて、二階の上等の部屋に納まると、すぐ入浴して、酒を持ってこさせた。

何かひどく愉しいことでもあるらしい。独りでにやにやしていたが、

「若いのもいいが、年増もよい。どちらにするかな」

と独り言を呟いた。

——先ず手近かの若い方から、とするか。

心が決まったらしい。

手を叩いて、若党の利助を呼んだ。
「久兵衛親子は、どこにおる？」
「はい、階下の角の部屋らしうございますが」
「いとという娘をちょっと呼んでくれ。少し聞き質したいことがある」
「はい」
やがて、いとが久兵衛に附き添われて顔を出した。
「娘を呼んだのだ。お前は下っておれ」
と言われて、久兵衛が躊躇していると、
「何をしておる。関所ではああしてお前たちを庇ってやったが、娘の身上については一応充分に問い質してみねばならぬ。お前が入れ知恵してはならぬ。娘だけを残してゆけ」
「へい」
久兵衛が仕方なく階下に降りてゆく。
「いと、ここへ来い」
娘は、怖わ怖わ、傍に寄った。
「まず、酌を」

娘は、徳利をとり上げて、酒を盃に注ぐ。
その白い細い手を、ぐいと掴んだ。
「十四と申したな」
「はい」
「ふふ、もう一人前じゃ」
「は？」
「この美しい手をみても、男でないことは一目で知れる。つまらないことをしたものだ」
「はい、申し訳ありませぬ」
「関所の役人をたぶらかした罪が、どのようなものか存じておるか」
「はい」
「わしが気を利かせて見知りのものだと言ってやらなければ、お前も久兵衛も、今頃は、牢に入れられておる」
「はい、本当に、有難うございました」
「本当に有難いと思うか」
「はい、思いまする」

「ならば――」
いとの細いからだを、自分の膝の上に横倒しに引き寄せた。
「な――わしのいうことを聞くのだ」
「あ――いけません」
はねのけて起き上ろうとするのを、しっかと押えつけて、胸許に手を差し入れる。
「ふふ、可愛いい乳房だな」
「いけません、お許し下さいまし――とさまッ」
いきなり思い掛けない大声を出されて、伝蔵が少し慌てた。
「ばか、騒ぐでない」
と、手をゆるめた隙に、いとがはね起きて、廊下に走り出した。
「待て――勝手なことをすると、為にならぬぞ」
片袖をとらえたが、いとはそれを振り切って、
「助けて――」
「これッ、騒ぐなッ」
と、追いかけた伝蔵の眼の前に、大きな男の姿が立ちはだかった。

「見っともない。よせ」
「うぬは、何だ。退れッ」
「うぬこそ何だ。年端もゆかぬ小娘をとらえて、何とする」
「娘は、若衆に化けて関所をごまかそうとした奴だ。わしはそれを糺明していたのだ。余計な差出口はするな」
「ほう、これは面白い。役人が宿屋で酒をのみながら、罪状取り調べを致すとは始めて聞いた」
「なにッ」
「裾をはだけ、眼尻を下げて——糺明していたとは、よかったな」
「おのれ、うぬは何者だ」
「一介の浪人、月影兵庫と言う。うぬは何者だ。娘にいたずらをしようとするにせ役人か」
「無礼な、わしは安中藩の三原伝蔵だ」
「関所を預っているのは桑原某と聞いた」
「わしは、桑原の前任者だ」
「はて、益々おかしい。関所を偽った娘を取り調べるのなら、現任の桑原が関所においてなすべき筈。前任者のお主が、関所から三里も離れた軽井沢の宿につれ込んで取り調べるとは、どういう訳

だ」

「うるさい。素浪人、退がれ」

「退らぬ。おれと一緒に来い。うぬが本物の安中藩士か、にせ浪人か、この宿の役人衆の前で、しかと対決しよう」

「くそッ」

両の拳を、ふるふる震わせて憤然としたが、対手の言葉に乗れば、恥をさらすだけだと分っている。

伝蔵は、舌打ちした。

「不埒な痩浪人め」

「不埒でもないし、余り痩せてもおらぬつもりだが」

「許し難き奴だが、旅先のこと、見遁してやる」

「許して貰わんでもいいし、見遁して貰わんでもいい」

「こ、こ、こいつ」

「こ、こ、こいつ——が、どうした」

「か、勝手にせいッ」

散々愚弄されたが、どうにも己れが不利と見て、伝蔵が、捨ぜりふを残して、座敷にはいると、びしりと手荒く障子をしめた。

娘の声に飛んできた久兵衛は、いとを背に庇って、どうなることかと震えている。

「心配せずともよい。きゃつがまことの安中藩士ならば、これ以上醜態はさらすまい。さ、早く引きとって休むがよい」

兵庫が、わざと、部屋の中に聞こえるように大声で言った。

五

あぐらをかいて、自棄酒をあふっていた伝蔵が、やがて、立ち上った。

——畜生、つまらん邪魔がはいった。まあいい、あれはもともと附けたりだ。久し振りの年増の味でもみることにするか。

階下に降りると、ぶらりと外に出た。

宿の前の道を真すぐに五、六町歩いて、玉屋という看板をみつけると、何と思ったか、裏口に廻った。

そのすぐ後から、兵庫の大きな影がくっついてゆくのには気がつかないらしい。

玉屋の裏口から中にはいった伝蔵が、やがて、二人連れになって出てきた。
連れは、女である。
伝蔵が先に立って、町を外れた。
離れ山が、眼の前に黒く盛り上り、その向うに浅間山が見える。
人通りは全くない。
伝蔵が、女を、道を少し外れた木立の茂みに連れ込んだ。
「ずい分久しぶりだな」
「はい」
と、女の声は小さい。
「最後に別れたのも、こんな晩だったな」
「ええ」
「ちょうど、こんな樹の蔭だったな」
「それを、仰言らないで下さい」
「なぜだ。おれは、忘れられぬ」
「私は、忘れたいと思っております」

「忘れても、事実は消えぬ」
「私は、恐ろしい」
女が、両肩をすぼめた。
伝蔵が、それを抱いて、女の顔を、木立の間に洩れる月光の中に仰向けにした。
「相変らず、美しい」
「もう、おばあさんでございます」
「ふふ、前よりは一段と美しい。女は後家になると美しくなるというが、本当らしいな」
「もう、帰らなければ――」
「久し振りに会ったのだ。そんな情ないことを言うな」
「でも――」
「お前に会うのを楽しみにして来たのだ。な、いいだろう」
肩を抱いた両手を下げていって、女の腰に廻わし、仰向けに押し倒そうとした。
「三原さま、いけません」
「なぜいけない。そんなことをいえた義理ではないだろう」
「でも、良人勘兵衛が、あなたのためにあんなことになった以上、私は――」

「勘兵衛を斬ったのはおれだ。だが、それはお前のためだ。お前が勘兵衛を殺したようなものだ」
「あ――そんなことをおっしゃらないで」
「ふふ、今更、悔やんでも仕方がない。つまらぬことは忘れて、あの頃の愉しかったことを思い出せ。そして――な」
女のからだを、草の上に押し倒した時
「三原伝蔵」
と、落付いた声が、木蔭からおこった。
「何ものだッ」
まだ女を片手で押えたまま、伝蔵が、ぎょっとして、叫ぶ。
「先刻、会った筈」
さっと、姿を見せた兵庫に、
「あっ、うぬは」
「そうだ。先刻は小娘をとらえて淫らなことをしようとし、今度は年増の後家をとらえて汚がそうとする。よくよくの色気狂だな、おのれは」
伝蔵が、ぱっと立ち上った。

「うぬは、何の遺恨があって、おれをつけ廻わすのだ。他人の色事に口を出すな」
「ただの色事なら口は出さぬ。うぬのしたことは、天も人も許さぬことだ」
「なにッ」
「五年前、横川の峠屋の亭主勘兵衛を殺害したこと、うぬの口から、つい今し方、しかと聞いたぞ」
「あっ——おのれは、盗み聞きしおったか。そうと知っては」
「何とする」
「生かしておけぬ」
伝蔵のからだが、兵庫に向って激しくぶつかってゆき、脇差の刃が、月光を受けて、きらりと光った。
その光が、頭上の樹の枝を縫って、高く飛び、草の上に落ちた時、伝蔵の右手は、高々と背にねじ上げられていたのである。
伝蔵は、苦痛に顔を歪めて、もがいた。
「静かにしろ」
兵庫は、裾を直して立ち上った女に向かって言った。
「勘兵衛の後家とみ——だな」

女は黙ってうつむく。
「次郎太の母親とみ――だな」
女が、両手で顔を覆った。
「次郎太に似合わぬ母親だ。許し難き奴だが、事実を知ったら次郎太が悲しむであろう。お前には会わなかったことにしておく。早く、玉屋に戻れ」
「はい」
「次郎太に恥じるがよい。今後は、次郎太にふさわしい母親になれ」
「はい」
「行けッ」
「はい、済みませぬ」
とみが、拝むようにして頭を下げ、走り去ってゆく。
「外道、来い」
兵庫が、伝蔵を引っ立てた。
「ど、どうするのだ」
「黙ってついて来い」

そのまま、白木屋の裏口まで連れてくると、木戸口に立っていた次郎太が、素っ飛んできた。
「月影さま」
「次郎太、悦べ。この三原伝蔵こそ、正しくお前の父を殺した奴だ。こいつの口からそれを聞いた」
「えっ——やっぱり、そうでしたか」
「ついて来い」
宿を反対の側に外れて街道の杉並木。
「よいか、次郎太、つき離すぞ」
脇差を抜いて構えた次郎太の前に、兵庫が伝蔵をつき飛ばした。
次郎太がすかさず、その脇腹に、短刀をつき刺した。
とどめを刺すと同時に、次郎太が、ぐったりと地上に尻もちをつく。
「天晴れだ。見事に仇を討ったな」
と兵庫が、明るい大きな声で言った。伝蔵をつき飛ばした瞬間、抜打ちの一刀で、伝蔵の肩に、したたかな峰打ちを喰らわして、その抵抗力を奪っていたことは、勿論いうまでもない。

軽輩の恋

一

軽井沢の宿から、沓掛を経て追分へ。ここで道が二つに分れる。

分れ路の石標には、左側に「従是中仙道」右側に「従是北国街道」と彫られてある。

中仙道の方をすすむと、全く人家の見えない浅間山麓の淋しい道へつづく。

追分の町が、茶屋や遊女屋が軒をつらね、二階建てのはたごが賑わっていただけに、そこを離れて、すぐにこの淋しい街道にかかった旅人たちは、妙に心細くなって、追われるように足を急がせる。

だが、間もなく、岩村田の町が前方に見えてくるので、ホッとする。

岩村田は、内藤豊後守の陣屋のある処。

内藤は一万五千石、菊間詰の大名だ。

大名だからといって、誰も彼も、城を持っていた訳ではない。二百七十余の大名の内、百余家は城

を持たぬ大名で、陣屋に住んでいた。

江戸城内で、菊間詰となっている三十六家の譜代大名は凡て、この無城の陣屋住まいであり、柳間詰の外様七十余家の中でも四十三家は城を持っていない。

禄高は少ないし、城は持たぬ、というのであるから、東西を股にかけて歩き廻わる旅人たちの眼に、岩村田の内藤という大名は、大したものとは映らなかったであろう。

内藤の藩士たちにしてみれば、それが癪の種、彼等の肩を怒らせ、虚勢を張らせる原因になっていた。

だから、武芸もなかなか盛んだし、家中の気風も、大人しい方ではない。

藩士の中では下ッ端、五両三人扶持の細木半蔵というのが、機迅流という珍らしい流儀をよく使い、隣藩にまで名を知られていた。

しかし、それだけの事で、抜擢を受けるような御時世ではない。いくら腕が立っても、頭が切れても、軽輩は軽輩、一生目の出ることはないのである。

細木半蔵、頗る不満で、日頃から言動やや粗暴の傾向があったが、それがこの処、特に甚しくなってきたのには、それだけの理由がある。

半蔵がかねて思いを寄せていた同僚松崎修右衛門の妹きくが、小姓頭土屋時之助の嫁に決ったと聞

いたからだ。土屋は百石取り、豊後守の小藩では、かなり良い身分だ。

松崎やきくが、半蔵よりも時之助を選んだのは当然だが、普段から気の荒い半蔵をなだめるために、松崎はいった。

「半蔵、そりゃ、お主がきくの事を想っていてくれた事は、察しがつかなかった訳ではない。しかし、お主の方から格別に口に出していうてくれたことはなかったではないか」

「お、おれは極りが悪くて——いえなかったのだ」

「ばかな、おれとお主の仲ではないか、はっきりいって呉ればよかったのだ。お主から何も話はないし、たまたま土屋から話を持ち込まれてね。おれは身分違いだから厭だと、一応も二応も断った。きくも余り気が進んでいなかった。しかしなあ、横川様や、椎尾殿まで間にはいって口を利かれると、おれはお二方には色々お世話になっているし、お断り出来なかったのだ。悪く思うな」

「そうか、きくどのは——自ら進んで嫁がれる気ではないのだな」

「むろんだ。あいつは、恐らく、心の底では、お主が好きだったのだろう。お主がもっと早く口に出してくれなかったのがいけなかったのだ」

松崎が巧みに半蔵を慰撫したつもりでいったごまかしの言葉が、その後につづく大きな惨事の原因になったのである。

半蔵が、

「よし、それだけ聞けば、おれにも考えようがある」

と、ぎらっとくぼんだ両眼を光らせた時、松崎は思わずぎょっとしたが、それでも、まさか半蔵が、常識を外れた滅茶苦茶な行動をやり出すとは思いもよらなかった。

半蔵は、松崎の許を辞すると、直ちにその足で時之助の宅を訪れた。

時之助に向って、

——松崎きくとの婚儀をとりやめにして頂きたい。

と、申入れた。

「一体、何をいうのだ。無礼な。お前は松崎の何に当るのだ。どういう資格で、そんな事をいうのだ」

「私は、松崎きくを嫁にしたいと思っております。それだけです」

きっと時之助を睨んでいった半蔵の、凄く光る眸をみて、時之助は、

——こいつ、気が狂っているのではないかな。

と、感じた。

「ばかをいうな。きくは私の処に来る事にはっきり決ったのだ」

「存じて居ります。だから、それを取りやめにして頂きたいと申すのです」
「松崎で――さよう申すのか」
「いえ、松崎の知らぬこと、私がお願い致すのです」
「うぬは、正気か。当の松崎も知らぬというのに、婚姻を取消せとは、一体、どういうつもりか。余りにたわけた事を申すと、そのままには差し措かんぞ」
「土屋殿、脅かしに引き退る半蔵だと思うておられますか」
半蔵の構えが、一瞬にして変った。いつでも、脇差の鞘から、抜打ちの刃が電光の如く走る体勢だ。
半蔵の腕をよく知っているだけに、土屋はぎくりとして、言葉を和らげた。
「半蔵、何やら行き違いがあるらしい。私が松崎兄妹に直接事情を聞いてみる。その上で、お前ともう一度話合うてみよう」
「何れにしても、御再考頂ければ幸いです」
半蔵が帰ってゆくと、土屋は慌てて松崎を呼んで、この事情を話した。
「半蔵と、きくとの間に何か約束でもあったのではないか。実に無礼極まる申し入れだ。即座に打斬してくれようと存じたが、どのような事情があるかも知れぬと思うて、一先ず引きとらせたのだが」

と、土屋が憤慨して強がった。

「とんでもない事です。きくが何とて半蔵如きものと、約束など致しましょう。きゃつ、かねてきくの事を想うておりましたので、土屋様との話を聞いて、頭がおかしくなったのではありますまいか。とり合わずにおくよりほかございますまい」

松崎が、無責任な一時逃れの答えをした。

二

翌日、土屋の屋敷を訪れた半蔵は、門前払いを喰らった。

——昨日の話ならば再考の余地なし。

と、時之助の代りに玄関に現われた時之助の弟作二郎がいったのだ。

半蔵は、松崎から聞いていた、家中の横川、椎尾の両家を訪ねた。

どちらも半蔵とは身分違いの上士である。

——松崎の妹きくを、土屋時之助殿の嫁に世話されたと聞くが、きくは私が貰う積りです。至急、右の縁談解消の手続をとって頂きたい。

と、突然に申込まれて、横川も椎尾も、呆気にとられた。

松崎に連絡してみると、

——半蔵め、きくに恋慕して、気が変になっているのでしょう。

という答えだ。

——何だ、そうか。

と、二人とも苦笑したが、対手が名にし負う腕達者であり、気性の激しい男であるから、どうにも薄気味悪い。

土屋と三人、顔を会わせて、

「大丈夫かな、半蔵め、頭がおかしくなっているというが、何か乱暴なことを仕でかしはすまいか」

「よもや、とは思うが、昨日の眼付きなど、いかさま尋常ではなかった。お互いに気をつけた方がよい」

「いっそのこと、松崎との縁談を少し早めて、式を挙げてしまっては、どうだろう。きくが、土屋の妻女になってしまえば、いくら半蔵でも、もう仕方がないと諦めるだろう」

「そうだな、それがよい」

挙式は年が翌けてからという話だったのを、年内に、それも出来るだけ早く、ということで、手筈をすすめる。

半蔵が、血相変えて、松崎の処にやってきて、

「きく殿の婚儀、年内に取り行うと聞いたが、真実か」

「うむ、土屋の方でも成可く早くというし、横川、椎尾両家でも、いそがれるのでなあ、おれとしては心ならずも――」

「畜生！」

低く呻って、ぱっと身を翻えして去って行った半蔵の様子に、松崎は異様な不吉な予感を持ったが、それは適中した。

その日の夕刻、椎尾が、岩村田の宿駅の本通りを、亀屋という大きなはたご屋の前に差しかかった時、つり上った凄じい形相の半蔵に出会ったのである。

出会ったというよりも、半蔵が、待伏せしていたという方が本当であろう。

通りの中央には、幅八十センチ位の用水路が流れている。

この水路を挟んで、双方がすれ違った時、

「椎尾殿」

と呼ばれて、椎尾は已むなく立止まった。

「何だ、半蔵、妙な顔をして」

椎尾は、こと更、笑いかけるような声を出した。

半蔵は、にこりともせず、

「椎尾殿、過日、きくはこの半蔵が貰い受けると申上げた筈。それを承知の上、あくまで土屋に嫁がせようとしておられますな」

「ばかをいうてはいかん、お前が勝手にきくを貰う積りでいても、松崎にはその気はないのだ」

「あなた方が、松崎を強圧しているのだ。あなたが媒酌をするというので、松崎は断り切れなくなったのだ。椎尾殿、手を退いて下さい」

「半蔵、今更、そんな事が出来るか考えてみるがよい。ばかなっ」

「手を退いて下さい。椎尾殿」

「いい加減にしろ、気狂いめ」

椎尾も、道の真中で、軽輩の半蔵に声高にいいつめられたので、思わずかっとして、叫んでしまった。

「気狂い——といわれたな」

「おお、いうた。お前のいうことは、正しく狂人の言だ」

「おのれ、身分は低くとも、武士の端くれ、狂人と罵られては、このままには済まされぬ」

「済まされねば、何とする」
「こうして呉れる」
抜討ちに、すばっと、椎尾の肩に斬りつけた。
椎尾も心得はある方だ。だからこそ、半蔵に対しても、やや、強気に出たのだが、半蔵の腕は、遥かに優っていたに違いない。
半蔵の眼中に殺気が走ったのを認めて、椎尾は咄嗟に身を退いて、腰の物に手をかけたのだが、半蔵の抜討ちの方が一瞬早かった。
刃を二寸ほど引き抜いた儘、椎尾が、左肩を割られて前によろめいた。
「うぬッ、半蔵！」
辛うじて踏みとまって、刃を引き抜いて、
「くそッ！」
と、斬りつけたが、その踏み出した足が、用水路に落ちて、ぐらっと前にのめった時、
「くたばれッ！」
半蔵の第二撃が、その頭蓋の後頭部に叩きつけられた。
昏れ方、人通り多い町中の出来事だ。

「喧嘩だッ！」
「人殺しッ！」
「斬られたぞッ！」
「危いッ！」
忽ち、通り一帯が、大騒ぎになる。
半蔵は、用水路の水に、顔を半分突ッ込んで倒れている椎尾を、見下ろしていた。
血が、流れの水を赤く染めてゆく。
——斬ってしまった。
人を斬ったのは、勿論、初めてだ。
——脆いものだ。
と、せせら笑った。
取返えしのつかぬ事をしてしまったというような後悔の念が全くなかったのは、既に精神状態が常軌を逸してしまっていたからに違いない。
血刀を握ったまま、用水路に沿って、ふらふらと歩き出していた。
——わッ、危い、逃げろ。

遠巻きにしてみていた連中が、声を立てて走る。

その騒ぎが、どこか遠い処に起っているもののように、半蔵は、空間の一点に目を据えたまま、ふらふらと歩きつづけた。

誰かが、陣屋に報らせたのであろう。

目付の里村欽之丞が、七、八人の部下を従えて、走ってきた。

椎尾の死体と、その二、三十間先をふらふら歩いている半蔵とを見た。

「細木半蔵、待て、神妙にせい」

里村が背後に迫って、そう叫ぶと、半蔵は、ぶるっとからだを震わせて、振向いた。

三

「神妙にせい」

里村が、半蔵にいってきかすというよりも、自分自身に元気づけるように、再び叫んだのは、半蔵のふらりと突き立った姿に、いい表わし難い凄絶な殺気を感じたからである。

「それッ！」

里村が部下に声をかける。

二人が、左右から、半蔵に近づいた。
「どうするのだ」
半蔵が、地の底から出た様な声で、二人をかわるがわるみて、いった。
「神妙にせい」
二人は、及び腰で身構えたまま、叫ぶ。半蔵との間合いは一間ぐらいだ。それ以上は怖くて接近できない。
「このおれを、召捕るというのか」
半蔵の、ふらっと揺れるように立っていたからだが、柔軟な豹のように跳躍した。
左右の二人が、非鳴を挙げて倒れる。
「あっ——半蔵！」
里村が一、二間、後に飛び退った。
「半蔵、刀を捨ていッ」
と叫んだが、半蔵は血潮のしたたりおちる刃を下段に構えたまま、二歩、三歩と進んでくる。
こうなっては目付の身として、逃げる訳にはゆかない。
「手抗う気かッ」

刃を抜き放った刹那、小手を斬られて、
「うっ」
と右膝をつく。
「待てっ、半蔵」
といった声が、途中で消えた。
里村が、突伏したのを見て、残った部下は陣屋に向って走り去った。
二十余名が、馳せ戻ってきた時には、半蔵の姿は、既になかった。
「どの方向へ逃げたのだ。あいつは」
居合わせた人々に問うたが、皆、
——あちらへ。
と、塩名田の方向を指したばかり、恐ろしくて、半蔵の後に尾いていった者はいなかったのである。
二十余名の追跡隊は、小半刻も街道筋を追って、塩名田の宿まで走り、そこで宿の人々に訊ねてみたが、半蔵らしい者が現われた様子はなかった。
「佐久街道を、中込の方へでも逃げたのではないか」

佐久街道は、ここ岩村田で、中仙道と交叉しているのである。その可能性はあった。

しかし、もう夜に入って、今から追っても対手を見つけ得る可能性は少い。

翌日になって改めて、大々的に追跡隊を送ることに手筈が決められたが、その夜半に、何人も予想しなかった事件が起った。

土屋時之助の屋敷に、半蔵が侵入して、就寝中の土屋の枕を足で蹴飛ばしたのだ。

「あっ、半蔵。何をする」

慌てて跳ね起きた土屋に、半蔵が、床の間の刀掛けを顎で指した。

「土屋、刀を取れ」

土屋が、刀に飛びついた。

「庭に出ろ」

——作二郎は、何をしているのだ、気がついて、起きて来てくれれば。

自分より腕の出来る弟の助けを大声で呼びたかったが、それは、男の一分が許さない。

はだしで、庭に出て、

——わッ。

と、全身から、力の抜けるのを感じた。

作二郎が、月光のまっ只中に、俯向けに倒れているのを見たからである。
「は、半蔵――う、うぬは、さ、作二郎を、き、斬ったなッ」
「邪魔をしたからだ」
半蔵は、半顔に月光を受けて、高い顴骨が、銀色に鍍金した髑髏の如くに見える。
「抜けッ」
土屋は、がちがちと震えのくるからだで辛うじて、刃を抜き放った。
――斬られる。
と、感じていた。
斬ってかかる処か、対手の太刀を受けとめる一応の動作さえできる自信がなかった。
全身が、自分のからだではないように硬くなって、しかも、小刻みに震えているのだ。
「土屋――きくは、おれのものだ」
半蔵が、呟いた。
――そうだ、きくはお前のものだ。お前にやるから、さっさとその剣を引いて、姿を消してくれ。
土屋は、恐怖のどん底で、声にならぬ声でそう叫んだが、それが、声として出たのは、
「きくは――」

という一言だけだった。

「きくは――おれのものだ」

半蔵が、それを引きとって、もう一度、繰返えし、右の肩を大きく上げた。

土屋のからだが、何の抵抗もなく、前にぶっ倒れた。

暁方になって、時之助、作二郎兄弟の死体が発見されて、大騒ぎになった。

「半蔵は、まだ、岩村田にいるのだ」

「きゃつ、全く気が狂ったらしい、何をするか分らぬぞ」

岩村田の町中は、厳重に調べられたが、半蔵の姿は見つからない。

町の周辺にも、追求の手が伸びたが、その日の夕方まで、何の手掛りもなかった。

最も脅威を感じたのは、横川である。

椎尾がやられ、土屋が殺られたとすれば、当然次は、自分なのだ。

きくの兄、松崎修右衛門も、同じく恐怖の念を感じていた。自分のでたらめの弁解が原因でこんな事になったとは、勿論、誰にも白状していないし、半蔵もそれに気がついたとは思わないが、気の狂った半蔵が、きくを求めて、松崎の処を襲って来ないとはいえないのだ。

横川家と、松崎の長屋とは、厳重に固められた。

昏六つになると、町中に布告して、はやばやとどの店も閉じさせ、他出を禁じた。
終夜、警戒したが、半蔵は姿を現わさない。その翌日の夜も、おなじことだった。
三日の間、何事もなく過ぎると、
——半蔵め、諦めて、どこかへ高飛びしたのだ。
と、人々は結論した。
四日目、警戒体制が解かれた。
そして、その夜、横川が、殺られたのである。
半蔵は、どこに隠れていたものか、その夜半、忽然として、横川の屋敷に姿を現わしたのだ。
凡てが、土屋の場合と同じであった。
岩村田の町は、再び、大きな恐怖の下に、警戒体制にはいった。

四

町の中を、役人が殺気立った顔付きでうろうろしているのをみて、いつものようにのんびりとやってきた兵庫が、
——はてな、何かあるのかな。

と、小首をかしげた。

茶店に腰を下ろして、それとなく亭主に質ねてみると、

「なにね、お武家様。御陣屋のお侍が、上役を三人とか殺して逃げたとかいうので、大騒ぎなのでございますよ」

「まだつかまらないのだな」

「へえ、つかまらねえどころか、悪くすると、もっと殺されるかも知れません。何しろそのお侍さん、惚れた娘さんを上役にとられたとか何とかで、気が狂ってしまったらしいんで。今度はその娘さんを奪いに来やしないかって、心配しているんですがね」

「ふうむ、今時、そんなに一生懸命に女に惚れる奴があるとは意外だな」

のんきな事をいいながら、茶代を置いて、店を出た。

町を外れ、塚原村を通って、次の宿の塩名田までは一里十一町（五キロ余）、四半刻の中にやってきて、ふっと町の北側の杉山の上にある社をみつけた。

通りすがりの者に、あれは何という神社だと質ねると、

「へえ、駒形神社と申します。昔、源頼朝公が乗馬のまま拝礼もせずに乗打ちしたところ、落馬して大怪我をされたとか申伝えておりますが」

と、答えた。

頼朝がこんな処までやって来たというのは少々眉唾ものだとは思ったが、何でも見てやろうというのが、兵庫の癖だ。ぶらっと、その杉山の方へ上っていってみた。

社殿は頼朝時代からの建物とは思われない。それより少し下って、室町時代の流れ造りと見られるものだが、立派なものである。

拝礼を済ませ、社殿をぐるりと廻って、背後に出てみた。

神社の社殿の裏手には、よく洞穴などがあって、思い掛けない古びた神体などが飾られていることがあるからである。

この神社には、そんなものはなかった。裏手は、深い樹林に連っているだけだ。

その儘一廻りして、社殿の前に戻ろうとした兵庫が、急にぱっと一間ほど横に飛んだ。

きっと顔容をきびしくして、あたりを見廻したが、その視線が次第に下っていって、拝殿の縁の下に向って、停止した。

「何者だ、そこにおるのは」

油断なく身構えつつ、呼ぶ。

縁の下から、二十八、九の、頬骨の出張った色の悪い侍姿の男が、のそっと出て来た。

黙って、突立ったまま、兵庫を見ている。

双方、かなり長い間、睨み合っていたが、先に口を切ったのは、兵庫の方である。

「野盗の一味か、お前は」

対手は、眉をしかめた。

「そんなものに見えるか」

「神社の社殿の縁の下にひそんでおれば、乞食か宿無しとみてよかろう。そいつが、故無く殺気を逆らすとすれば、野盗の類と見るより他はあるまい」

「ところが、どちらでもない」

と、冷たい笑いを浮かべた対手が、

「お主——珍らしい流儀だな」

と、意外なことをいった。

「なに」

と、兵庫が、不審気な顔付きになる。

「いま、ぱっと飛び退って、構えたこなし、十剣無統流のやわらの型とみたが」

「ほう、お主、それを見分けたとは偉い。こんな片田舎に十剣無統流を知っている男がいるとは感心

だ」

兵庫は正直に感心した。江戸でもこれは、珍らしい流儀なのである。

「田舎だとて馬鹿にするな、おれは――」

「機迅流――とみた」

「それを見分けたとは感心だ、尤もこの辺りで、おれの機迅流を知らぬ奴はない」

「威張るな、おれはこの辺りの者ではない。それにお前の流儀を機迅流とはいったが、格別、優れているとはいわなかった筈だ」

「こいつ――おれの名を聞いて、愕くな」

「そんな大した男とは見えぬがな」

「内藤藩の細木半蔵だ」

「そうか、初めて聞いた名だが、覚えておいてやろう」

「岩村田の町は通らなかったのか」

「通ったが、どうした」

「おれの名を聞いただろう」

――あ、こいつだったのか。

と、兵庫が、思い当った。
「女のことで、何人かの上役を手にかけたというのは、お前か」
「そうだ」
「愚かな奴だ」
「黙れ」
「聞きたくなければ聞くな。だが、老婆心までにいっておいてやろう。二度と岩村田に近づくな、町中厳しく警戒しておる。行けば捕まるぞ。女のことは忘れてどこへでも落ちてゆけ」
「ふん、おれを捕える？　あの意気地なしの、間抜共にそんなことが出来るものか」
「まだ、岩村田で斬りたい奴があるのか」
「奴らが邪魔をしなければ、別に斬りたくはない」
「何の邪魔をするというのだ」
「ふん――何でもよい」
「娘を攫いにゆくつもりか。底の知れぬ阿呆だ」
「もう一度、いってみろ」
「何度でもいう、お前は阿呆だ。何人も故なく人を殺したような男を、若い娘が好きになれると思う

のか」

「殺ろす理由はあったのだ」

「自分だけにしか通用しない理由は、理由にならぬ」

といった兵庫が、突然、凄じい光を眸の中から迸らせ、半蔵をきっと睨み据えた。

「細木半蔵とか——このままこの地を立去ればよし、この上無益に人を傷けようというのならば、私が許さぬ。この場で叩き斬る！」

半蔵が、凹んだ眼をカッと開いて、兵庫を睨み返えした。

双方の眸が、二本の刃の如く鋭く交錯したが、次の一刹那、半蔵の表情がぐらっとゆらいで、

「おれの負だ、よしここを退散しよう」

無念そうに答えた。

五

松崎修右衛門の長屋には、大勢の同輩が集まっていた。

藩からも、家中の者二十名以上が、詰めかけている。

尤も、それらの人数は凡て、物蔭にかくれているので、表面上は、長屋の明窓に、いつものように

薄暗い行灯の光がちらついているだけである。

そして、部屋の中には、おびえ切っているきくを中心に修右衛門その他数名の者が、声をひそめて、話合っていた。

「内にも外にも、これだけの人数が手配されているのだ。心配しなくてもいい」

「だが、きゃつ、来るだろうか」

「今夜——でなければ明日——でなければ明後日、必らず来る。思いつめた狂人の一念、決して諦めはせん」

「気味の悪いことをいうな」

「きく殿も、大変な男に想い込まれてしまったものだな」

夜半になっても何事もないので、どうやら一同が気をゆるめて、

「半分ずつ交代で、休むとしよう。今夜ばかりの事ではない。明日もある」

「うむ、それがよい」

と、半ばは、隣家へ引揚げて行った。

そして、半刻ほど経った頃、

長屋の外で、

——ぎゃッ、

と、踏みつぶされるような悲鳴が聞こえた。つづいて、十数名の人々が走り廻わる様子であったが、

「長屋の方へ廻ったぞッ」

「松崎の処を固めろ」

と、罵り合うのは、長屋の外に待機していた一隊に違いない。

松崎修右衛門が、ぱっと飛び上って、

「きく！　奴が出たぞ」

「兄さま——怖い」

と、きくが夢中でしがみつく。

「大丈夫か、松崎」

隣室からも、隣の家からも、人が馳せつけてきて、修右衛門ときくとを取り巻いた。が——その時、既に半蔵は、長屋の前まで迫っていたのである。

剣の切尖を、斜右前の地面に殆んど着けるかのような下段の構えで、まるで何かを突き破るかのように、つッ、と進んでくる。

立ち向った藩士が、三人まで斬られていた。

初めて、横川を斬った時に比べれば、半蔵の方は、格段に落着いている。それが、まるで狂人の、恐れを知らぬ無暴な挙動のように見えるので、待機していた家中の侍たちの方が余っ程、怖れ慌てているのだ。

「退け」

半蔵は、抑揚のない調子でいう。

「きくに会えば、いいのだ。邪魔をすると、片端しから斬るぞ」

四人目が斬られると、もう半蔵の前に立ちふさがる者がなかった。

松崎の長屋に、躍り込んで、

「きく――」

あっ――と、振向いた連中の中に立つと、きくの胸に刃先を突きつけた。

「立て――おれと一緒に来てくれ」

「半蔵、何をするのだ。半蔵」

修右衛門が、必死になってとめようとしたが、半蔵は冷やかにいい放つ。

「修右衛門、邪魔立てすると、お主とて用捨はせぬ、斬るぞ」

きくの背に刃を擬しながら、長屋の門外に現われた半蔵を見て、新たに馳せつけてきた連中も手の下しようがない。

茫然としている中を、きくの肩を掴んで歩き出した半蔵が、

「あっ——おのれは」

と、初めて、狼狽の声をあげた。

眼前に、兵庫が、らんらんと眼を燃やして立っているのを認めたからだ。

「おのれは、卑劣な奴——よくも、この私をだましたな」

兵庫が、一語一語、対手の耳に叩き込むようにいった。

二人がこの日の昏れ方別れたのは、塩名田の西外れ、千曲川の渡船場である。

「おれは、川に沿って、北へゆく。小諸に出て——それから、どこへ行くか。その時の事にしよう」

半蔵がいった。

「路銀はあるのか」

「ない」

「とりあえず、これだけ持ってゆけ」

兵庫はいくらかの路用を握らせて、半蔵と別れ、舟に乗った。

半蔵の姿が川に沿って、河原を歩いていたが、草叢の間に、ふっと消えた。

「小諸へは、川に沿って、どれ程のみちのりだ」

兵庫が、船頭に質ねた。

「小諸？　ほんの一里半ほどでございますが、河原沿いにゃ行かれません。駒形のお社の西に街道がこぜえます」

そうかとうなずいた兵庫が、対岸についた舟から降りずそのまま引返えした。

河岸に立って、しばらく考えていたが、塩名田を通り抜けて、岩村田に引返えした。夜に入ってから、陣屋の布告で全く人通りのなくなった町を、ゆっくりと歩いて廻っていた。

悲鳴と剣の音と、人の走る音とを聞いて一散に走り、半蔵がきくを脅かしつつ長屋から出てきたのを見つけたのだ。

「当地を立去ると誓約した故、見逃したのが、おのれの不覚」

兵庫が、まわりに詰めかけている家中の侍たちを見廻わして、

「この半蔵という痴れ者、斬ってもよいのだろうな」

「斬ってくれ、頼む」

「手強いぞ、気をつけてくれよ」

「女を人質にとっている。生捕りにせよといわれてはむずかしいが、斬れとあれば」

兵庫が、腰を落として、差料の柄に右手をかけた。

「寄るなッ、女を刺すぞ」

半蔵が、狂った如く叫んだ。

「刺せ！」

兵庫が凛然と、一喝した。

「うぬッ」

自棄になった半蔵が、きくをぐいと前に衝いて、その背中に剣先をつき差そうとした瞬間、

「とう――」

と響いた兵庫の気合い、見事に極まった上段霞切りが、半蔵の首を、真一文字に斬り放っていた。

森の中の男

一

長久保から二里、中仙道で最も旅人の難渋した個所の一つといわれる和田峠にかかる手前の宿が、和田である。

諸国道中細見記によれば、

——ここは日本一高き宿駅

であるという。

幕府直轄の天領。

宿駅の長さ七町五十八間（八七五メートル）。

中央部に本陣、脇本陣、問屋、名主などの家が並んでいますが、二階建平入り切妻造りの、前びさしを深く出したものや、両階格子造りの京風の家、格子上の二本けやきの欄間など、山間には珍らしい小綺麗な宿駅だ。

昏方、この宿に向かってやってきた兵庫が、町外れの土橋の手前で、妙なものを見た。

といっても、それ程不思議なことではない。

小犬を小脇にかかえて、土橋の彼方をふいと右手の林の方に消えてゆく若い侍姿の男を認めて、小首をかしげた迄のことである。

不審を感じたのは、その男の背に、一種の殺気を感じたからだ。

人を斬りにゆくのならば、犬を抱えてゆくのは、おかしい。

然し、確かに、そこには血を思わせる荒々しいものがあったのだ。

土橋を渡って、その男が右へ曲った地点まできて、兵庫は足をとめた。

生来、至って好奇心の強い方である。そのために、従来も何度となく、つまらぬ事件に捲き込まれて、時には随分ひどい目にも遭っているのだが、持って生まれた性分はどうしても癒らぬものらしい。

足音を消して、林の方に近づいてみた。

林の向うに、小さな空地があった。

若い男は、そこに立っていた。

背を向けているから、顔はよく見えないが、がっしりした立派な体格である。

小犬を抱えた儘、じっと停止している姿を見て、

——出来るな、この男

と、感じた。

その男が妙な事をやってのけたのは、ちょうどその時である。

左腋に抱えていた小犬の首を、右手でつまんで、高く空中に抛り上げた。

きゃん——と悲鳴を挙げて、小犬は空中で一回転して落下した。

が、それが、地上に墜ちる前に、もう一度、鋭い悲鳴を挙げた。

地に墜ちたのは、胴体を真二つに斬り放たれた小犬の死骸である。

男は、その無惨な犬の死体には一瞥も与えず、己れの血に染った刀を、じっと見詰めている。

しばらくしてから、懐紙を出して、軽く拭った。刃の血汐を拭い去るには、当然、もっと強く拭うべきだろう。殆んど撫でるように軽く、一拭いしただけだ。

そして、刃を鞘に収めた。

そこで始めて、犬の死体に眼を落としたが、手近かの枯枝をとって、土の柔らかそうなところを少し掘って、そこに死体を蹴り込み、ほんの申訳ばかりに土をかぶせた。

——新味の刃を試めしたのであろうか。腕は確かだが、何か非情な酷い感じの男だ。

と、兵庫は、少し不愉快な気持になった。しかし、別に人を斬った訳ではない。差出た口を利くべき場合でもないので、気付かれぬように、そっと、後戻りをした。

街道に出た。

和田の宿駅に入る前に、何となく振向いてみたが、その男の姿は見えない。

どこか横道に外れたのであろう。

竹屋徳左衛門という宿に、草鞋を脱いだ。

夕食をとりながら、給仕をしている女に訊ねた。

「何か面白いことはないか、この宿に」

これは、いつも聞いてみる言葉だ。大した期待は持っていない。ただの習慣みたいなものである。

「別に、これといって——こんな山奥の宿でございますし、江戸の方にお聞かせするような事は」

と、話の種のないのが自分の罪でもあるかのように、恥かしそうに笑った女が、急に思いついたのか、

「そう、そういえば、この頃、お代官様のお屋敷の裏の森の中に、化物が出るという噂がございます」

「ほ、う、化物が」

真面目くさって答えたのは、善良な女の話の腰を折らないためだった。

「はい、何でも、真夜中になると鬼火のような小さな火が、森の中に時々ちらついて、ひそひそと泣声がして、誰かが近付いてゆくと、泣声も鬼火も、すっと消えてしまうとか、お代官さまが、この頃、からだのお具合が悪くて、ひどくいらいらしておいでなのは、その物の怪の祟りだと噂しているものもあります」

——何だ、下らぬ、ばかばかしい、

と腹の中で笑ったが、この時もまた、例の好奇心が、むくむくと頭を擡げた。

夜半になると、そっと床を脱け出し、庭から木戸を排して、外に出た。

女から聞いておいた代官屋敷の方に向う。

背後に大きな森を背負った建物だ。

町のものは代官屋敷とか代官とかいっているが、正式には、郡代か代官の派出支所なのであろう。大した建物ではない。

森の方に廻ってみた。

何事もない。

しばらく立って、何となくそこらを歩き廻っていると、森の奥の茂みの中に、ぽつりと赤い火が見

えた。

小さな、小さな火の玉である。

あたりが、それほど暗くなければ、とても眼に入らなかったであろう。

それが、時々、薄く、更に小さくなり、消えそうになって、又、少し大きくなる。

——誰かが、煙管を吸っているのだ。

兵庫は、その火の玉の正体を容易に判定した。

——田舎の連中というものは、つまらぬことを、騒ぎ立てるものだ。ひそひそと泣声がするというからには、大方、男女が密会でもしているのだろう。

耳をすましたが、泣声は聞こえない。

そのまま宿に戻ろうと考えたが、折角来たのだから、もう少し、つきとめてやろうという気になった。

無足忍び——足音を全く消した横歩きで、樹かげを伝って近づいてみた。

予想した通り、石に腰を下ろし煙管を吸っている黒い人影があった。

二

すっと一息吸った拍子に、火が少し大きくなって、その男の顔を照らした。
面長の、なかなか好男子だ。
刀を二本差している。侍に違いない。
憂鬱な表情が、ちらっと、火の影に映し出されて、また、暗い蔭になった。
逢曳に来て、女を待っているような楽しそうな表情ではない。
ひどく思い屈した風である。
痩せぎすのからだを前屈みにして、溜息をついている。
かなり永い間、そんな状態がつづいた。
——妙な奴だ。犬を斬った男といい、こいつといい、和田という所には、妙な奴が多いな。
兵庫は、そう思った。
男が立ち上った。
森を出て、代官屋敷の横を廻って、うつむき加減に歩いてゆく。
兵庫は、もうそれ以上、その男の後をつけてゆく興味も失って、屋敷の表の方へ戻って行こうとし

た。

突然、屋敷の内庭の方で、

——わあっ、

と、叫ぶ声がした。

ただの叫声ではない。刃物で斬られた時にのみ出る声だ。

兵庫は、生垣に沿って走った。

声のしたあたりまできて、生垣越しに庭の中を覗き込んだ。

「あ、旦那様が——誰か、誰か」

女が、庭先に倒れている男を抱きかかえるようにして呼んでいるのが、雨戸の一枚開かれた縁に置かれた灯火の中に見られた。

兵庫が、生垣を躍り越えようとした時、座敷の方から、若い男が走り出て、はだしのまま、庭に飛び下りた。

「兄上、兄上」

と、叫ぶ。

つづいて、庭つづきの隣家からも誰かが走ってきた。

——もう自分の出る幕ではない。

兵庫が、足早にそこを離れて行こうとした時、

「曲者！」

という声が、その背後に叩きつけられた。

——ほい、おれが疑われては堪らん。

兵庫が、地を蹴った。

十剣無統流独特の速歩——常人の走るより早く、そのくせ、呼吸さえ乱さず、さっさと宿に戻ると、寝床にもぐり込んだ。

朝まで、ぐっすり、眠った。

朝食を持ってきたゆうべの女が、双の眼に恐怖の色を浮かべて、

「お客様、お聞きになりましたでしょう」

「何を」

「御代官様が、ゆうべ、真夜中に、誰かに斬られました」

それは知っている。

「死んだのか」

「いいえ、でも、随分手ひどい傷を負われたとの事、お命のあったのが不思議なくらいだということです」

噂は、もう、宿全体に拡がっていた。

この宿としては、未曽有の大事件だったに違いない。

妙に昂奮している宿の亭主から、兵庫は、事情の概略を聞きとった。

夜半、小用に立った代官の鈴木太兵衛が、雨戸を一枚繰って、手水鉢の水で手を洗っていた時、横合いから、突然、斬りつけられたのだ。

曲者は、雨戸の下にしゃがんでいたらしい。躍り上って、右肩に深く一刀斬り込んでいた。

その位置からは、余程の腕がなければ斬れぬ。

太兵衛も、かなり腕は利く。

咄嗟に左手に持っていた柄杓を、曲者の眉間に叩きつけた。

が、そのまま前のめりに縁から庭に転がり落ちた。

曲者は、慌てて逃げ去る。

太兵衛の叫び声を聞いて、幼児と添寝していた妻のよしが走り出た。

その叫び立てる声に、玄関傍の三畳に寝ていた太兵衛の弟友二郎がはね起きて走ってきた。

隣家の妻見甚兵衛も、馳せつけた。

その時、曲者らしい姿を、生垣の彼方に見つけた友二郎が、

「曲者！」

と叫ぶって、横の木戸から飛び出して追いかけたが、忽ち見失ってしまった——というのである。

凡て、兵庫の見た処と一致している。

「鈴木太兵衛という男、平素から、人に恨まれるような所業があったのかな」

と聞くと、亭主は強く否定した。

「とんでもない、見かけは少々陰気な感じの方ですが、下々の者に優しい、どちらかといえばお人好しとでも申しましょうか。宿の者で、お代官様を悪く思っている者など、恐らく一人もおりますまい」

「それは、近頃、珍らしい役人だ」

「はい、全くでございます。それに奥様のおよしさまというのが、評判の器量よしで、何一つ不足のないお身の上」

「友二郎という弟は」

「これは太兵衛様と違って、お若いだけに多少乱暴なところもありますが、陽気なお人柄で、それに大変な兄思いの方、今度のことでも、必らず仇は討つと、いきり立っておられます」

「隣家の妻見というのは」
「太兵衛様のすぐ下役の方で、きびしい気性ですが、太兵衛様を助けて、実直に仕事をしておられます」
「鈴木の家には、他に誰がいるのかね」
「樋口という老人の用人と、周平という若党と、下働きのなかという女、いずれも昨夜は、何も知らずに眠り込んでいて、友二郎さまに叩き起こされたのだそうです」
怪しいものは、一人もいない様だ。
——妙だな。
朝食を済ませたら、すぐにも出発するつもりでいたのだが何だか、事件が気になって愚図愚図していたのは、多少とも昨夜の事件に、自分が首をつっ込んでしまっているような気がしたからである。
昼頃になって、
「お客さま、下手人らしい人がつかまりました」
と、小女が報らせてくれた。
「それはよかった、何者だ」
「それが、お代官様の一番仲の良いお友達で、三好義之助という郷士なのです」

「白状したのか」
「いいえ、絶対に自分ではないと、大層憤ったそうです」
「まあ、捕ってすぐ白状する犯人は、余りないだろう」
と答えたが、これでどうやら片がつきそうに思われた。
「出発する。勘定を頼む」

三

帳場に去っていった小女が、間もなく、慌しく馳け戻ってきた。
「お客様！」
といって、息を弾ませている。
「どうしたのだ」
「お役人衆が」
「役人がどうしたというのだ」
「お客様を呼べとおっしゃるのです」
「私を？」

不審に問い返えした時、早くも、三四人の役人が、廊下を足早にやってきた。
「月影氏といわるるのは、そこ許か」
「左様」
「役所まで、同道願いたい」
「何用で」
「来て頂ければ分る」
そういいながら、兵庫の周囲を取り巻くような形になった。
「用件が分らねば、出頭は出来ぬ」
「恍けるな、覚えがあろう」
「なんの事だ」
「鈴木太兵衛殿、傷害犯人の疑いだ」
「これは愕いた。三好とかいう男が犯人ではなかったのか」
「犯人は、一人とは限らぬ」
「それも、そうだな」
兵庫は、他人事のように、呑気なことをいったが、

「それにしても、何故この私を犯人の一人だと疑うのだ」
「夜廻りの男が、昨夜半、この竹屋の裏木戸から中に走り込むお主の姿を見たのだ」
「それだけの事か」
「背恰好も、友二郎どのが申立てた曲者とぴったり一致する」
「それだけか」
「それで充分だ。何故、宿の裏木戸から逃げ込んだのだ」
「夜歩きが、癖なのだ」
「ふざけるのもいい加減にせい。神妙に同道すればよし、さもなくば――」
「さもなくば、引っくくるとでもいうのか。そんな手数をかけるのも気の毒だ、神妙に出頭しよう」
これは少々面倒なことになった。ありのままに供述しても、容易に信じて貰えそうもないと思ったが、もともと身に覚えのない事、気負いこんだ役人たちに連れられて、代官屋敷にやってきた。
「両刀を検めさせて貰う」
「御自由に」
検べられたが、勿論、一点の曇りもない。
「疑念は晴れたか」

「いや、まだだ、昨夜の行動を詳細に話して頂きたい」
自分の見たことをその儘、話した。
「信じて呉れねば、それ迄のことだ。しかし、事実は、この通りなのだ」
「単なる旅人が、小女の話にそれ程興味を持って、深夜に出歩くなど、容易に信じ難いことだ。しかし、一つ確めておきたい事がある」
「何かな」
「森の中で、煙管を吸っていたとかいう男の人相だ」
「さっきもいった通り、小さな煙草の火で、ちらっと見ただけだ。よくは分らぬ。面長の、美しい男だった」
「見れば分るか」
「分ると思う」
「よし、見て貰いたい」
役宅の一隅にある仮牢みたいなところに連れてゆかれた。
「この窓から見てくれ」
中を覗くと、三十前後の男が、うなだれて坐っている。

「あの男らしい」
兵庫が、即座に答えた。
「らしい？」
「そうだ、明言は出来ぬ。あれが三好という男か」
「そうだ、彼が森の中に坐っていたとすれば、彼の嫌疑は、ずっと深くなる」
「他の点については知らないが、森の中に坐っていたという点で、彼の男に嫌疑をかけるのは、間違いだな」
「何故だ」
「さっき話しただろう。あの男——いや、森の中に坐っていた男は、森を出てから代官屋敷の東を廻って北の方に姿を消したのだ。すぐその直後に、代官の斬られた叫び声がしたのは正反対の南側だった。どんなに早く走ってもあの男に、代官の襲撃ができた筈はない」
「直後というが、その証拠はないではないか」
「私の言葉が証拠だ」
「共犯者かも知れぬ男の言葉を証拠にしろというのか」
「愕いたな、まだ、私を疑っているのか」

「無論だ」
「あの男が嫌疑をかけられたのは、どういう点だ」
「三好の家から、新しい血曇りのある刀が発見されたのだ」
「あの男に、代官を斬らねばならぬ理由があるのか、代官の最も親しくしている男だというではないか」
「旅人のくせによく知っているな」
「宿のものに聞いたのだ」
「斬らねばならぬ理由は、今のところ、我々に分らぬ、それを探がし出すのが、これからの仕事だ」
「御尤も」
兵庫は、くすりと笑った。
「で、私は、もう帰して貰えるのだろうな」
「飛んでもない事だ、嫌疑の晴れるまで、ここに止まって貰う」
「やれやれ、面倒なことになったな」
「むろん、第一の嫌疑は三好だ。そこ許は、多分、嫌疑が晴れるだろう、だが、とに角、しばらく、ここにいて貰う」

「已むを得ん」

と答えた兵庫が、意外な事を付け加えた。

「では、私も、あの仮牢に入れてくれ」

役人の方が目を丸くした。

「いや牢に入らぬともよい」

「是非とも、入れてくれ。同じ嫌疑を受けているのだ。三好と同じ待遇にして貰わねば義理が悪い」

——妙な奴だ。

と、役人たちが、顔を見合わせた。

四

自発的に入牢した兵庫は、至極のんびりした顔をしている。

明日になれば、郡代が出張ってきて、正式に取調べが行われるだろう。

「三好氏とかいったな」

牢にはいってきた兵庫をちらっと一瞥しただけで、再び深い物思いに沈んでいるらしい三好義之助に、兵庫が、声を掛けた。

三好義之助は、顔を上げて、うなずいた。
「心配しなくてもいい。お主の無罪は、私が知っている」
えっ——と、義之助が、視線を兵庫の顔に据えた。
「では——お主が、やったのか」
「違う」
「どうして、私が無罪だというのです」
「お主が森から出て、屋敷の北へ廻わるのを、私は見た。鈴木太兵衛が斬られたのは、その直後で、しかも反対側だ」
「あなたは、私が森の中にいたのを知っているのですか」
「知っている。しょんぼりとして、煙管を吸っていたな」
「何の為に、私を尾けたのです」
「森に鬼火が現われるとか、化物が囁く声がするとか、聞いたから見に行ったのだ、お主は、いつも、あそこで、あんな風にして、煙草を吸っていたのか」
義之助の頬に少し血が上った。
「何の為だ」

「それは――言えぬ」
「囁き声というのは――いつも、誰と話していたのだ」
「それも――言えぬ」
「それが言えなければ、お主の疑いは晴れぬぞ」
「私は血のりのついた刃で、充分の嫌疑を受けている。森の中でどうしていようと、大した事ではない」
「それは違う。刃の血のりは、何とでも弁解がつく。例えば、犬を斬ったとかね」
「犬？」
「そうだ。しかし、始終、代官屋敷の裏手の森の中で、しかも深夜、坐り込んでいたり、誰かと囁いていたりした、というのは、はっきり理由の述べぬ限り、どう疑われても仕方がないな」
「已むを得ん」
「私は、勿論、お主が犯人でない事を極力、言い立てるつもりだ。しかし信じては貰えないだろう」
「多分」
「犯人にされても、いいのか」
「いや、私は、断じて犯人ではない」
「それなら、何故、森の中に坐っていたか、その理由を述べるがいい」

『それは、いえぬ。どうしても、いえぬ』

何度いっても、同じことだった。

——余っぽど深い理由があるのだな。

兵庫は、諦めた。

本人にそれをいう意思がない以上、如何ともし難い。

粗末な夕食を終えてたが、義之助は相変らず、沈んだ顔付で、兵庫が話しかけても、捗々しい答えさえしなくなった。

面倒くさくなって、

『私は、先に失礼して、寝る事にする』

一方の板壁に向かって、ごろりと、転がった。

忽ち、豪快な鼾声を立て始める。

かなり時間が経った。

牢の外から、

『義之助さま』

と、呼ぶ女の声がした。

義之助が、びくっとしてからだを起こした。兵庫の方を眺めたが、鼾声が規則的につづいているのを見て、ほっとしたように、明かり窓の方へ、寄っていった。

「およしどの」

「義之助さま、どうして、あのような早まった事をしてしまわれたのです」

「えっ、およしどの、あなたまで、私を疑っているのですか」

「義之助さま、私はあなたをお恨みしてはおりませぬ。でも、でも、何故、あんな手荒なことを――」

「違う違う、およしどの、私ではない。断じて私ではない。余人はとに角、あなたに疑われては、私の立つ瀬がない」

「本当に、あなたではなかったのですか、よかった」

「本当です」

「でも、義之助さま、あなたに掛った疑いは」

「大丈夫です。あなたとの事は、決して口外しません」

「でも、それでは、嫌疑が晴れないでしょう」

「しかし、もし二人の仲が暴露すれば、今度のことの疑いは晴れても、所詮二人とも生きてはいられなくなります」

「そう、そうでしたわねえ。義之助さま。といって、あなたが、太兵衛傷害の犯人にされてしまっては……。義之助さま、太兵衛はとても助からないのです。明日一日持てばよい方だと、医師も申しました。太兵衛も死ねば、その殺害者として、あなたも処刑されるでしょう」

「もう、覚悟は決めました。あなたとの間が暴露して、二人が死ぬよりも、私一人が死んだ方がいいでしょう」

「いけません、そんなこと」

「でも、あなたまで、密通の名で処刑されるよりはいい」

「いけません。義之助さま」

「およしどの、私は必死になって、身の証しを立ててみます。十に一つも、郡代は私の無実を信じてくれるかも知れません」

「ええ、義之助さま、それを神仏に祈っています。万一、あなたが処刑されるような事があったら、私も、生きてはおりません」

「およしどの」

「義之助さま——あ、誰か」

女が、慌てて走り去って行った。

義之助は、もとの座に戻ったが、薄暗い灯心の影になっているその顔が、想う女に思いがけず会えた悦びに、上気していた。

突然、兵庫がいった。

「そうか、それで分ったよ」

えっと、愕いて振向いた義之助は、ぱっちりと両眼を開いている兵庫に、呆気にとられた。

「あなたは——聞いていたのですか」

「うむ、残らずね。お主、太兵衛の妻女と逢曳していたのか。昨夜はうまく会えなかったのだな。そして、たまたま、太兵衛が斬られた——成程、これは、少々むつかしいな」

五

腕を組んでじっと考え込んでいた兵庫が、

「もしかしたら——」

と、声に出して呟いた。

何の事かと、義之助は眼を上げる。

「私は、脱牢する」

「えっ、脱牢？」
「そうだ、お主も一緒に来ないか」
「だめです、どうせ捕まります」
「気の弱い男だな。しかし、心配するな。脱牢しても、多分また帰ってくる」
「何のために牢を出るのです」
「真犯人を探す為だ」
「探がせる当があるのですか」
「今、気のついた事がある」
「どうやって、牢を出るのです」
「何でもない事だ」
兵庫が、声を挙げて、人を呼んだ。
牢番の下役人がやってくると、格子の間から腕を出して、
「ちょっと、ここを見て貰いたい。毒蛇に咬まれたらしい」
「毒蛇？　そんなものはおらん筈だが」
近づいた奴を引きずり寄せて、脾胆を当てた。

腰にぶら下げた鍵をとって、外側から鍵を外すと、
「さあ、出よう。この男は少し代りにはいっていて貰う」
縛り上げて、猿ぐつわをかませた。
「一体、どうするのです」
「およし殿だったかな、太兵衛の妻女は。あの人を呼び出してくれ」
義之助が窓の下にいって、およしを呼ぶ。
「あ、あなた、どうして、牢を」
と愕くのを口に指を当てて黙らせ、庭へ誘い出した。
兵庫が、自からしゃあしゃあとして容疑者の一人と名乗った上、
「私たちは二人とも容疑者だが、真犯人ではない。これから真犯人をつきとめるから御助力頂きたい」
「はい、私に出来ますことなら、何でも……」
「あなたの御主人と、ここにいる三好氏と二人を同時に殺してしまいたいと思うているような男がいる筈だ」
「まさか、そんな恐ろしいことを――」

「いや、よく考えてみて下さい。太兵衛どのだけを殺そうとした男を考えるから分らなくなる。三好氏をその犯人として、二人同時に片附けてしまおうと考える男なら、見当がつく筈だ」

およしの顔に、何かふっと思い当るようなものが現われたが、慌ててそれを自から打ち消した。

「そんな、私には——思い当りませぬ」

「では、少々おしつけになるが、露骨に聞く。あなたに恋慕している男が、あなたと三好氏との内密の関係を知ったとしたらどうだろう。その男は、御主人と三好氏とを片づけてしまえば、あなたを手に入れられると考えはしないだろうかな」

「あっ」

「あなたに横恋慕し、あなたを口説いた男がいる筈だ。或いは、口に出してそれをしなくても、態度でそれを示した男がいる筈だ」

「それは——」

「そうでしょう。その男は、この屋敷内にいるのではないかと思うのだが」

「はい」

「案内して下さい」

およしが、先に立って兵庫と義之助とを案内した。

玄関の方に廻っていった。

指で、そっと三畳の間を指す。

兵庫が、うなずいて、

「友二郎という御主人の弟だな」

「はい——でも、まさか、友二郎さんが、主人を傷つけたりなど——あんなに兄思いの方が」

「それは分らぬ、狡猾な男はどんな仮面でもかむるし、人間という奴、何かの欲望にとりつかれるとどんな事でもする」

そうした話声を聞きつけたらしい。窓が開いて、

「何者かッ」

友二郎が、呶鳴った。

「来て下さい。この二人の人が牢を逃げ出そうとしているのです」

およしが、兵庫に囁かれた通りのことを、叫んだ。

「何！　脱牢？」

一刀をひっつかんで、ぱっと窓から飛び出た。

「おれのおる限り、それは許さぬ」

と、身構えたのを見て、兵庫が、
「田舎には、惜しい腕らしい」
「何を、とぼけた事をいう、牢に戻れ」
「戻るつもりだ。その前に、代官を斬った真犯人を捕える」
「うぬらの他に、どこにいるというのだ」
「そこにいる、お前だ」
「何！」
「お前の刀をみせろ、血曇りがある筈だ」
「これは——斬味を試めすために、小犬を斬ったあとだ。小犬は、町外れの林の中の空地に埋めている」
「なかなか、手の込んだことをしたものだ。たしかにそうだな。おれは、お前が小犬を斬る処を見たのだ。いい腕だった。だが、あの時にお前が、小犬を斬った刀は、その刀ではない。おれははっきり覚えている」
「ばかをいえ、この刀だ」
「断じて違う。小犬を斬った刀を、どこへやった」

友二郎の顔が怖ろしく歪んだ。

「どうしようと、うぬの指図は受けぬ」

「三好の家に忍び込んで、納戸に入れておいたろう」

「なにっ」

「お前は、およし殿に横恋慕した。およし殿とこの三好義之助との逢曳をかぎつけ、義之助の森にきている頃を見計らって、太兵衛を斬り、庭から表に走って、己れの部屋に戻っていたのだろう。およし殿の声を聞いて始めて知ったようなふりをして、走り出てきたのだ。そうすれば、嫌疑は、義之助にかかって、太兵衛と義之助が一度に片がつくと考えたのだろう」

「素浪人、くたばれっ」

友二郎が、抜討ちに斬りつけてきた一刀は、大抵の男ならばとても受けきれない、峻烈なものであった。

だが兵庫は、もとより、その抜討ちを覚悟していたのだ。

あわやとみえた転瞬の間、越前助広が斜上に白く鞘走って、いつもながら豪快に決った霞切りの秘技。

友二郎が喉首から血を噴いて、どうと斃れた。

義兄の正体

一

諏訪湖の西岸、諏訪明神の下宮のある下諏訪の町は、甲州街道が中山道にぶつかる地点、民家一千余軒、商家と旅宿とが多い。

街道筋に面して格子作りの低い二階建の旅籠の中で、大きく「中川」と看板をかかげている家がある。

入口正面の土間に面して広い板敷があり、その奥に定紋づきの横長の提灯箱があり、傍らに三尺に余る大きな招き猫が置いてある。

そいつを左眼に睨んで、とんとんと二階に上ると、天井のつかえるような部屋が並んでいる。

その一と間で、激しい言い争いの言葉が交わされていた。

と言って、大声で叫んだり罵ったりしている訳ではない。争いの双方とも、他人に聞かれたくないらしい。低い声でやり合っているのだが、語勢は鋭かった。

もつとも、鋭い語勢で罵っているのは一方で、他は必死になって、何やら弁解したり、説き伏せようとしたりしているのだ。

「吾市、手前は自分の店を潰したばかりじゃ気が済まなくて、このおれの身代まで潰すつもりか、おい、どこ迄このおれを甘くみていやがるんだ」

煙管で、ぽーんと吐月峯を叩き割るほど強く叩いたのは、三十四五の、額の狭い、顎の出張った、唇の厚い男だ。

余っ程憤っているらしい。出来れば、自分の前にいる男を、絞め殺してやりたいと思っているに違いない。

憤怒と憎悪とが、最も露骨に現われている。

「兄さん、そんな——そんな積りはない。兄さんの身代を潰すなんて——ただ、私は、兄さんに、まともな仕事をして貰いたいだけなんだ」

「べら棒め、まともな仕事だと？　利いた風な事を吐すな、手前はそのまともな仕事で、一体、どれだけの事をしたのだ。店を潰して明日の飯が喰えねえから、何とかしてくれと泣き込んで来たのは、どこのどいつだ。ええ、おい」

「そりゃ、その通りだ。でも、おれは、まさか兄さんが、こんな仕事をやってるとは夢にも思ってい

なかった」

「おれのやってる事のどこが悪いと言うんだ。本人たちも納得、親も悦んで、お願いしますと両手を合わせたんだ」

「親も本人たちも、本当の事を知らないからだ、本当の事を言ったら、承知しやしない。兄さんは、あの娘たちや親たちを、瞞したのじゃないか」

「馬鹿野郎、口じゃ言わなくても、その位の事は分っている筈だ。考えてもみろ、普通の女中奉公で、五両もの金を先取り出来ると思うか」

「だから、皆、有難がって、両手を合わせたのだろう」

「それなら、文句を言うことはねえ」

「違う、本当の事を知ったら、たとえ五両が十両貰ったって承知する筈はない。現に私が本当の事を知らせたら、娘たちは皆、震え上って泣き出したのだ」

「へん、娘っ子なんてものは、何にでもすぐに泣き出すものだ。少し慣れりゃ、じきに故郷の事など忘れて、面白おかしく楽しく暮らす様になるんだ」

「私は、そうは思わない。どんなに苦しくったって、親の許で、真面目に暮らしている方が、仕合わせと言うものだろう」

「手前の意見など聞いちゃいねえ。間抜けめ。第一、このおれの受けた損をどうしてくれるのだ。一人について三十両ずつ、三人で九十両、十五両差し引いても七十五両は儲けられる筈だったのだ」
「三人の親許に渡した十五両は、私が何としてでも兄さんに払う。七十五両の儲けと言うけれど、そんな——他人の娘の生血を啜るような金は、忘れてしまってくれ。兄さん、頼む」
「手前が何もかもぶちまけて、娘たちを怖がらしてしまった以上、頼まれなくても諦めるより仕方がねえ。その代り、十五両はとり戻してくる」
「十五両は、私が返すと言っているじゃないか」
「飯が喰えねえで泣きついてきた手前に、十五両の金がどうして出来るんだ」
「すぐには無理だ。しばらく待って呉れれば、きっと返す」
「ふざけるな、ばか野郎。金と言うものは一日一日利息がつくものだ。当てのない手前の返すのを待っていられるか。あいつらにやった十五両は、あいつらから取り戻す。手前はおれに七十五両損をさせた償いに、十五両こしらえてこい。一と月待ってやろう」
「そんな無茶な——」
「何が無茶だ」
「兄さんのしている事は、お上に知れたら手が後に廻ることなのだ。十五両戻って損にならなけれ

ば、それでいいじゃないか」

「何をっ！　手前、このおれのことを訴え出るつもりか」

きらっと光った瞳の底に、凶暴なものが閃いた。

「とんでもない、兄さんを訴えるなんて、そんな事はしない。誰にも言わない。この事は、だから、私が十五両返すだけで我慢してくれ、なあ、兄さん」

公けにされては——と言う懸念が、さすがに大きく影響したのだろう。兄さんと呼ばれている眉の迫った男が、忌々し気に言った。

「よし、じゃ、手前の言う通りにしてやろう。その代り、十五両、三日の中に拵えてこい、分ったか」

「とても駄目だ、三日の中になど、そんな事、半歳待ってくれ」

「この野郎、どこ迄つけ上るのか」

ぱっと手を伸して、対手を引きずり寄せると、膝の下に首ねっ子を押えて、煙管でぴしぴしと、ひっぱたく。

「痛いッ、勘弁してくれ、兄さん」

と言うのも構わず、煙管を抛り出すと、腕を捻じ上げて、俯伏せにし、背中を膝でごりごり押しつ

ける。

「苦しい、兄さん、勘弁してくれ」

呻き声が、悲鳴に変った時、廊下に面した障子が、がらっと開いた。

「兄弟喧嘩に余計な口出しをするようだが、どうだい、いい加減にして許してやれ」

浴室からの戻りらしい、手拭いを片手に持った若い武士が、微笑しながら立っていた。

「お武家、言わっしゃる通り、余計な口出しだ。抛っておいて貰おう」

「そっちの苦しそうな顔をみては、抛っておく訳にはゆかんな」

つかつかと這入ってきて、乗馬りになっている兄の方の腕をちょいととらえた。

「あっ、痛え」

「痛いか。痛いのは誰しも同じことだ、よせと言った理由が、分るだろう」

二

眠っていた兵庫が、ふいと目を醒ました。

暗闇の中で、半眼を開いて、隣の寝床を見た。

確かに、もそもそと動いている。

兄と言う男に苛められているのを可哀そうに思って仲にはいり、同じ部屋に泊めておいては危いと思って、自分の部屋に連れてきて寝かせたのだ。

その吾市と名乗った細面の気の弱そうな男が、寝つかれないらしくて、もぞもぞしているとしても不思議はないが、そっと窺っていると、床の上に起き上ったらしい。

それから、兵庫の方を眺めた。

暗いから、顔は見えないのだろう。兵庫が半眼を開いたまま、呼吸だけは眠っている時と同じように、すやすやと続けているのを見済ますと、そろそろと床の間の方へ、這ってゆく様子である。

床の間の傍の乱れ箱の中の包の中に、兵庫の胴巻がはいっている。

大抵いつも、そうしているのだ。酒に酔っていると自覚している時だけは、枕の下に入れておくのだが。

吾市が、金を狙っている事は疑いない。

——何だ、大人しそうな顔をして、こいつの方が悪党だったのか。

兵庫は、ちょっと当てが外れた。

兄弟の争いを始めから聞いていた訳ではない。偶然に通りがかって、苦しそうな悲鳴を聞いたから、啄を容れただけなのだ。

——こいつ、何か悪い事をして、兄貴に折檻されていたのかも知れぬ。とすれば、全く余計な口出しだったな。

そう考えながら、吾市の挙動を見詰めていると、吾市は、乱れ箱に近づいて、その中に手をさし込んだ。

胴巻を引っぱり出した。

——仕様のない奴だ。

一喝しようとした兵庫が、

——おや。

と、声を喉許で押しつぶした。

よくは見えないが、吾市は、胴巻を目の前に捧げて、拝むようにしているらしい。

——どうする気かな、妙な男だ。

かなり長い間、吾市は、じっとそうした形をつづけていたが、やがて胴巻を元の場処に戻した。

そろりそろりと寝床に戻って、俯向けになった。

くすん——と、泣きながら鼻を啜っている気配がする。

小半刻も、兵庫は、吾市がこの次に何をするかと、やや好奇心を起こして待っていたが、何事もな

いので、眠り込んでしまった。

翌日は、快晴。

衣裳を着換える時、ちょっと当ってみたが、胴巻の中の金は安全である。

「吾市――どうするのだ、今日は」

「本山へ、帰ります」

しょんぼりと、答える。

「兄貴は、構わないのか」

「さっき、階下で聞きました。今朝早く発ったそうです。本山へ戻ったのでしょう」

「そうか、私も、本山へ行く。よければ、一緒にこい」

「はい」

下諏訪の町を外れると、次の宿場塩尻までの間に、上下二里の塩尻峠がある。

峠の頂上は、標高一千六十メートル、諏訪筑摩両郡の境である。

――眼下に諏訪の湖、衣崎も見え渡り、富士の高根数峰の間より分け出で、湖面に映る、絶景いと面白し。

と「千曲真砂」に載っている。

そこの茶店に腰を下ろした兵庫が、吾市に向って、屈託のない笑顔をみせた。

「まあ、休め、土地の者なら、大して珍しくもないだろうが、私には珍しい。胸のさらりと晴れわたるような景色だ」

「へえ」

吾市は、口の中で呟いて、腰を下ろした。

ここへ上って来る途でも、兵庫が色々話しかけたが、ただ、へえとか、いいえとか言うだけ、ひどくおどおどしていた。

茶店の亭主が置いていった茶を喫しながら、兵庫があたりの景色に見とれていると、突然、吾市が、土下座した。

「お武家さま、お許し下さいまし」

「どうしたのだ。まあ、まともに坐れ」

「へえ」

手をとって、長床几に腰を落ちつかせてやると、

「済みませぬ、お武家さま」

と、目に涙を浮かべている。

「申し訳ありませぬ。昨夜、私は、あなたさまの胴巻を盗もうと致しました」
「ふーむ」
兵庫は残りの茶を飲み乾してから、ゆっくりと反問した。
「どうして、盗むのを止めたのだ」
「胴巻に手を掛け、額に捧げて、お許し下されませとお詫びしながら、盗んで逃げようとしました時、女房のさとが、いけません、そんな事をしては——と叫ぶ声が聞こえました。私が、ぎくりとして、耳を澄ますと、さとが必死になって、いけない、いけないと止める声が致します。悪い事をしたと、私も恐ろしくなって、胴巻を元に戻しましたが、恥かしくて、一夜中、眠れませんでした。全くの出来心、どうぞ、お許し下さいませ」
「黙っていれば分らぬことを、そうして口に出して詫びただけで、お前の罪は消えている。心配するな」
「お、お許し下さいまするか」
「許すと言って欲しければ、そう言おう。だが、どうして、私の金を盗もうと言う気を起こしたのだね」
「十五両、どうしても欲しかったのでございます」

「十五両――それは、昨夜のお前の兄との争いと何か関係があるのか」
「はい、義兄に返さねばならないのでございます」
「肉親の兄に金を返す為に、他人のものに手をつけると言うのは変だな」
「肉親の兄ではありませぬ。家内の姉のつれあい――義理の兄でございます」
「それにしても、同じことだ」
「はい、おっしゃる通りでございます。私が悪いのでございます」
「どうして、そんなに迄して兄に十五両返さねばならんのだ」
「それは、申し上げ兼ねます。御勘弁下されませ」
「強いては、聞かぬ」

三

峠を下って、塩尻の宿。
昼間の陽の下では嘔吐の出そうな醜悪な化粧をしただらしのない女たちが、うろうろしている怪し気なはたごの並ぶ道を抜けて、宿を外れると、一里塚がある。
峠の茶屋で告白をしてから、なおのことしょんぼりと、消え入りそうな風情で、後からついてくる

吾市を振り向いた兵庫が、何を思いついたものか、急に言い出した。
「吾市、お前が十五両返さぬと、どう言うことになるのだ」
へえ、と吃驚したように顔を上げた吾市が、しばらく逡巡っていたが、
「三人の娘が、又、身売りしなければならなくなりましょう」
「三人の娘――お前の娘か」
「いいえ、見も知らぬ人の娘たちでございます」
「見も知らぬ者の為に、お前が十五両調達しなければならぬとはどう言う訳だ」
「へえ――それは、お武家さま、お聞きにならないで下さいまし。義兄の恥になりまする故」
「うむ、強いては聞くまいと思うていたのだが、気が変った。事情によっては、その十五両、私が用立ててもよい。事情を話してみるがいい」
「えっ、お武家様が――何のゆかりもない私の為に十五両を――」
「お前も、見も知らぬ人の娘の為に――と言ったではないか。同じことだろう」
「はい」
それから、小半町も、まだ口を開く決心をつけ兼ねていたが、到頭思い切って、吾市が言い出した。

「恥を申さねば分りませんが、義兄は農家の娘を、江戸のお邸奉公さすと言うて連れ出しては、売り飛ばしていたのでございます。この度も、三人の娘の親に五両ずつやって、娘を江戸に連れてゆき、三十両ずつで売り飛ばすつもりでした。いつも娘たちを見張る為に番頭の助三を連れてゆくのですが、今度は助三が他の仕事で出られませんので、私がついてゆくことになりました。私は、そんな事情とは知らず、江戸まで来いと言われて従いてきたのですが、昨日、下諏訪で義兄から事実を告げられ、驚いて止めましたが、聞き入れませぬ。義兄が用事で他出した間に、三人の娘に訳を話すと皆、泣き出しました。可哀そうになって、三人をそっとその場から逃がしてやったのでございます。夕方になって義兄が戻ってきて、ひどく憤り、三日の間に十五両返さねば、娘たちの親許に行ってとり戻すと申します。親たちはもう五両宛の金は、とうに手をつけてしまっておりましょう。強いて返そうとすれば、娘を再び売るより他はありますまい。で、私は、何としてでも十五両拵えて、義兄に返したかったのでございます」

——そうだったのか。やはり、こいつは良い男だったのだ。いや、人が良過ぎる位の奴だな。

兵庫は、感心した。

「なぜ、お上へ訴え出ぬ」

「仮りにも義兄、悪いと知っても、そうは出来ませぬ」

「成程――よし、その十五両、出してやろう」
「有難うございます。それでは、一先ず、本山の私の処においで下さいまし。女房のさとにもお礼を言わせとうございますし、十五両拝借の証文も書きまする」
「いつ又、会えるか分らないのだ、そんなものはいらん」
「いえ、それでは私の気がすみませぬ、それにまだお名前も存じ上げておりませぬ。どうぞ、お立寄り下さいませ」
「月影兵庫と言う、天下の風来坊だ。お前の気の済むなら、寄らして貰おう。どうせ、道筋のことだ」
急に元気になった吾市と連れ立って、塩尻から約三里、本山の宿についたのは、昏方である。
ここは松本藩預りの幕府領と、木曽福島代官所預りの尾張藩領との境に当り、松本藩の国留番所が置かれている処だ。
五町廿間の町筋を外れた処にある小さな平家の近くまで来て、
「あ、あれは――どうしたのか」
吾市が、妙な声を出したが、その吾市の姿を見つけた男が、吾市の家の前から走ってきた。
「吾市さん、大変だ――おさとさんが」

「なにっ」

血相を変えて走り、家の中に飛び込んだ。

「あ、吾市さん、江戸へ早飛脚を出そうかと話していた処だ。よく帰ってきてくれた」

「おさと——おさと」

「吾市さん、気を慥かに、おさとさんは」

「おさと——」

説明される迄もない。

白布を顔の上まで被されて寝かされている女房の死体の上に、躍りかかるようにして、

「おさと——一体、どうしたのだ」

狂ったように叫んで、あたりに集っていた人たちを、睨み廻した。

「おさとさんはな、今日昼過ぎ、本通りの角万から戻ってきて、気分が悪いと言うて横になったまま、つい先程、ひどく嘔吐て、苦しがっていたが、常庵先生に来て貰った時には、もう手遅れじゃった」

「おさと——おさと、どうして、死んだのだ、おさと」

人の言葉も耳にはいらず、吾市は叫びつづけた。

四

吾市が漸く落付いたのは、通夜の客も帰って、葬式の手続きなど、近所の者が親切に打合わせを済ませてくれた後である。

おさとの亡骸の前に、吾市と、兵庫と二人だけが残った。

暁方の光が、妙に侘びしく狭い部屋の中に射し込んできている。

「月影さま、とんでもない処に、お連れして申訳けございませんでした」

詫びを言うだけの余裕がやっと出来たらしい。だが、その時、兵庫が思い掛けぬことを言い出した。

「吾市、お前の内儀は、何か筆をつかう内職でも、していたのか」

「えっ——いえ、そんなことは致しておりませぬが」

「右手の人さし指に、墨がついておる」

あ——と、気がついて、あたりを見廻して、それ迄人ごみに混れて気のつかなかった硯箱が、小机の下にあるのを見つけ出した。

「筆が、まだ濡れておる。死ぬ間際に何か書き遺したのではないか」

それらしいものは、見当らない。

「床の下を調べてみるがよい」

と兵庫に注意されて、亡骸の敷蒲団の下に手をさし入れた吾市が、

「あ、ありました」

と、巻紙の押し潰れたのを引き出した。その紙上に眼をさらしていた吾市の形相が、この男には不可思議と思われるほど凄まじいものに急変し、

「畜生――」

と、下唇を噛んだ。

いや、下唇を噛み切ったのだ。血がたらたらと下顎に流れ落ちた。

「畜生、権蔵の奴――叩き殺してやる」

上ずった声で叫んで、立ち上るのを、兵庫が押し止めた。

「気を鎮めるのだ。吾市」

「おさとは――殺されたのだ。畜生、権蔵の奴」

「権蔵――と言うのは」

「義兄――と呼んでいた、あの畜生です」

「あの男が、おさとを殺した？　そんな筈はないではないか。あの男がこの町へ戻ったのは、せいぜ

い私たちより一刻（二時間位）前のことだろう。おさとは、それより前にここへ帰っていたと、皆が言ったではないか」

「権蔵が、やらせた事だ。あいつは、おさとばかりではない、おさとの姉も、父親も、殺ったのです」

「血迷うてはいかん。どう言う事情なのだ、話してみてくれ」

興奮して、ぶるぶる震えている吾市をなだめすかせて、兵庫が漸く聞きとったのは次のような事情である。

おさととその姉おきわの父親、角万の主人庄兵衛は、本山の町で、ささやかな織物問屋を経営していた。

姉のおきわは、器量が良くない上に、頭も少し鈍い方なので、婿に来るものがあるかと、早く女房を亡くした庄兵衛は、それ許り心配していた。

だから、同業の丸定に勤めている権蔵からおきわを欲しいと言われた時には、飛びつくようにして話に乗り、権蔵に頼むようにして婿に来て貰ったのである。

権蔵はいわゆる流れもの、数年前この町にやってきて、いつとはなしに丸定の店に入り込み、目はしが利くので調法がられたが、身許のはっきりした男ではなし、庄兵衛の親類の中には、危ぶむもの

もいたが、

——あんな男を逃がしては、二度とおきわの婿は見つからぬ。

と、庄兵衛が、押し切ったのである。入婿になった権蔵は、始めの中は、よく働いたが、間もなく本性を現わして、店の金を持ち出しては、遊びに出るようになった。

妹のおさとは、同じ機織業者の職人をしていた吾市と惚れ合って夫婦になったが、吾市の方は真面目一方、おさとを大切にするので、庄兵衛も、家業は何とかして吾市夫婦に譲りたいと考え出したらしい。

それとなく、その意図を、親類の者などに打明けたこともあったが、それをはっきり口に出さない中に、近くの奈良井の町に用達しに行った帰り、中畑あたりの人通りの少い処で、何者かに殺された。

売上金がすっかり奪われていたので、物盗りの仕業とみられたが、犯人は不明。権蔵が角万の後を嗣いだ。

男がいなくなってからは、公然と放蕩をし、店の仕事はほったらかし、それを苦に病んで、おきわが、病気になった。

下諏訪の温泉に療養に行っている中に、気が変になって、湖に入水して死んだ。打ちつづく悲しみ

に、おさとは見る眼も哀れなほど打沈んでいたが、吾市は一心にこれを励まして、働いた。だが、いつ迄も職人でいては仕方がない、何とかして一本立ちになりたいと考え、義兄の権蔵に相談すると、

——いい仕事があるから一口乗れ。

と言う。

材木の投機をやって、大当てに当てた実例をいくらも話され、人の良い吾市がうっかりこれに釣られて、貯め込んだ金を全部つぎ込んだが、見事に外れて一文なしになった上、勤め先からは、堅気の職人にあるまじきこととして、暇を切られた。義兄が悪いのだとは決して思わず、自分に運がなかったのだと思い込んでいた吾市が、再び、身のふり方を相談にゆくと、

——少し用があって江戸に行く、一緒に来れば、何とか仕事をみつけてやろう。

と言われて、連立って町を離れたが、次の宿の洗馬で三人の娘が待っていた。

その娘を江戸に連れて行って売り飛ばすのだと聞いて、吾市は仰天した。

今迄にも何度かそうした事がある、機問屋などでろくな儲けもあるものか——と言われても、どうしても娘たちが可哀そうで堪らず、三人を逃がしてやったのは、既に兵庫も知っている通りだ。

戻ってくると、おさとが死んでいた。そしておさとの遺書には、愕くべき事が書かれてあったので

ある。

——今日、角万に立寄ったら、番頭の助三が奥の仏間までついてきて、手籠めにしようとした。必死になって抵抗していると、助三が、自分の言う事を聞かなければ、権蔵も吾市も命がないぞと脅かした。おさとの父庄兵衛を殺して金を奪ったのも、おきわを殺して湖水に投込んだのも、皆、権蔵の仕業、吾市もそれを内々に知って、手助けしている。二人が逆磔になるもならぬも、お前の心一つと脅した。権蔵は知らぬこと、良人の吾市に限ってそんな悪事をする人ではないと、助三の腕に噛みついて、逃げてきたが、考えれば考えるほど怖くて、世の中が魔ものに満ち満ちているような気がして、とてもこのまま生きてゆく気がしない。毒を嚥んで死にます。

と言うのである。

妊娠中の、神経の亢ぶっていた際のこと、かっと思いつめた女心が、哀しく乱れた筆の上に現れていた。

五

すっかり夜が明けた頃、権蔵がさも慌し気にやってきて、

「ゆうべ遅く、聞いた。おさとが、何やら急にいけなかったらしいな」

と、門口から声をかけて上ろうとする前に吾市がつき立った。
「上っちゃいけねえ」
「なにっ」
「おさとは、お前には会いたがるまい」
「何を言うのだ、吾市」
「いずれ挨拶にゆく、帰ってくれ」
いつにない吾市の権幕に愕いた権蔵が、
「気でも狂うたか、ばかめ。よし、帰れと言うなら、帰ろう。うむ、十五両の件は忘れるなよ」
と捨ぜりふを残して去ってゆく。
兵庫に何と言い含められたものか、吾市は集まってきた近所の者には何も言わず、葬式の手続きを急いだ。
夕方、棺桶に入れられたおさとの亡骸をかついでささやかな行列が、吾市の家を出た。
「おれの後についてきてくれ」
吾市は、真っすぐに、本通りの角万の店に向ってゆく。
——どうする気だろう、といぶかりながら行列は、その後に続く。

店先まできた吾市が、大声をあげて、
「権蔵――いるか」
と、怒鳴った。愕いて飛び出してきた権蔵が、皆の手前、
「おう、吾市、葬式か。おれも行こう」
と土間に降りようとする。
吾市が、そいつを睨みつけたまま、
「おい、皆、おさとの棺桶をこの家の仏壇の前にかつぎ込んでくれ。おさとに成仏して貰う為には、どうしても、そうして貰わなきゃならねえ」
「な、何をするんだ。吾市、縁起でもねえ、棺桶なんぞかつぎ込まれてたまるか。手前、女房に死なれて気が触れたな」
「うるさい、皆、頼む」
棺桶をかついだ一行は、呆気にとられて、どうしてよいやら戸惑っていたが、背後にいた兵庫が、
「構わぬ、吾市の言う通りにやれ」
と、けしかけたので、どやどやと座敷に上って、棺桶を仏壇の前に据えた。
権蔵が、真っ赤になって憤り出し、

「おい、助三、助三――こいつらを追い出せ」

とわめいたが、多勢に無勢、押しまくられてしまった。

棺桶と仏壇を背にした吾市が、

「やい、権蔵――」

「なにい、権蔵、権蔵と、手前、さんざん世話になった義理の兄のおれを呼び捨てにしやがって、一体、どう言う量見だ。いくら仏の前だと言っても、容赦はしねえぞ」

「ふん、どの面さげて、図々しく義理の兄だなどと言えるのだ。権蔵、親殺しに女房殺しの、人非人め」

「吾市、言ってよい事と言ってならぬ事とある。何を証拠にそんな出鱈目を言うのだ。気狂いめ！」

「証拠はそこの助三だ。助三が、おさとにはっきりそう言ったのだ。やい、助三、手前は、おさとを手籠めにしようとして、権蔵の悪事をぶちまけたばかりでなく、このおれがそれを蔭ながら手伝ったなどと、あらぬ濡衣着せやがったな」

「知らねえ、知らねえ、おれは何も言った覚えはない」

「ごまかすな、これを見ろ。おさとが死ぬ間際に書き残した遺書だ。嘘とは言わせねえぞ。権蔵の悪事を全部知っている以上、手前こそ、権蔵の片棒かついで、権蔵と一緒に、庄兵衛父っつぁんと、お

きわさんを殺したのだろう」

「違う、違う、やったのは皆、権蔵の旦那だ。おれは、むりやりに手伝わされて――」

助三が、思わず口走った一言に、権蔵がはっと、後に退った。

「助三、手前――よくも曝らしやがったな。今更、手前だけ綺麗事にして逃げようったってそうはいかねえ。地獄へ行くなら、手前も道連れだ」

「おれは知らねえ、おれは知らねえ」

蒼白になって逃げ出そうとした奴を、兵庫がひょいと利腕を把えて、背にねじ上げた。

ポキリと音がして、助三が悲鳴を上げ、額に油汗を滲ませる。

「騒ぐな、いずれお前は、役人の手で処罰されるだろうが、大事な証人だ、しばらく大人しくしていて貰おう。おい、こいつを縛り上げておいてくれ」

ぽんと突き放しておいて、

「おい、権蔵とか、悪党なら悪党らしく観念して、白状したらどうだ」

と権蔵に向って言った時、権蔵が、さっと背後の部屋に走り込んだ。

「逃げるか、権蔵！」

後を追って飛び込んで行った吾市が、わっ、と叫んで、左肩を手で押えながら、よろめいて出てく

る。

血に染んだ刃が、権蔵の手中に躍って、第二撃が打ちおろされたかと見えた刹那、今度は、権蔵の方が、叫び声をあげて二三歩、後によろめいた。

兵庫の手から、権蔵の肩に隙かさず、小柄が飛んだのだ。

「吾市、やれッ」

と励まされて、

「おう、権蔵、庭に出ろ、父っつぁんと、おきわさんとおさとの仇、おさとの見ている前で討ち果してやる」

「ふん、しゃらくせえ事を、手前なんぞにやられるおれと思っているか、よし、庭に出ろ」

はだしのまま、庭へ飛び出して、道中脇差を構えた。

双方共、肩に傷を負っている点は五分五分だが、体格はまるで違う。その上、人を何人も害めている権蔵の方に、分があることは言う迄もない。

「危いッ！」

見ていたものの口から、同じ叫びが二つ三つ同時に発せられた。

権蔵の突き込んで行った脇差が、吾市の横っ腹に突き刺さったかと思われたのだ。

が——その瞬間、

「あ、何をしやがるッ」

権蔵が顔を仰向けて、たじたじと後に退いた。眉間の間に、兵庫の突き出した大刀の鞘の鐺が、つきつけられていたのだ。

何度か、同じことが繰り返された。

憤り猛った権蔵が、

「三一！　邪魔しやがるか」

と、半ば自棄になって兵庫に向って叩きつけてきたが、小手をしたたかにたたかれて、脇差をとり落した時、その脇腹に、吾市の刃が深く突き刺さった。

「吾市、でかした。仇を討ったぞ」

兵庫が血刀をひき抜いて茫然としている吾市に向って言った時、

「仇は討っても——おさとは生き返らない」

吾市は、血を吐く様な声で言って泣き崩れた。

火を噴く隻腕剣

川越小町

花火と燈籠流しがそろそろ始まる時刻になったので、急に喜多町や南町の方から、赤間川の方にやってくる人の数がふえてきた。

その代り、これから始まりそうな物凄い雑踏に怖れをなして、引揚げてゆく人々もあった。

「おい、もう戻ろうではないか。酔払いの喧嘩のとばっちりでも食ってはつまらない」

倉光京吾が、いつもの家和な口調で、そう言って、連れの二人の方を向いた。

深井忠一郎は、

「ええ」

と、答えたが、石川源之丞は、少し不満そうな顔をしてみせた。

「これから面白くなるのだがな」

そう言ったものの、強いて反対するほどのこともなく、京吾の後について、見立寺の前を通りかけ

て、急に、ふいと足をとめた。

「あれは、横田の――ではないか」

尋ねるように聞いたが、本当のところは、聞くまでもない、その横顔を遠くからみただけで、自分でも胸がドキドキと急に高く打ち出したのに気がついていた。

「うむ、小町娘だ。さよ――と言ったかな。なかなか美しい、家中の若い連中が、わいわい云うのも無理はないな、忠一郎、どうだな」

十六歳になったばかりの忠一郎は、源之丞より先に、その娘を見つけていたのだが、京吾にひやかされると、少し頬をそめて、照れくさそうに視線を外らせた。

「どうした、源之丞、ばかに熱心に見とれているな」

「うむ」

京吾のひやかしの調子には気づかないかのように、こちらは、立ち止ったまま、にこりともせず、娘の方を見つづけている。

「あ――」

その源之丞が、二三歩、足をふみ出した。

「おい、よせ、かかりあうな」

京吾が、右手を出して、源之丞の袖をとらえようとしたが、源之丞は、もう走り出していた。

横田屋の娘さよの左手首をしっかり握って何か云っている侍がいた。他の一人は、さよの背に手をかけ、そむけている顔を覗き込もうとしていた。さよの傍にいた女中に正面から抱きつこうとしているのもいた。

走りよった源之丞が、さよの手首をにぎっていた男の腕を、びしりと打ち、背に手をかけていた男の肩を、突きとばした。

「何だ、おのれ！」

「ふ、ふれい者！」

かなり酒が入っているらしい、てらてらした顔を、ふり向けて、呶鳴った。

名前ははっきり覚えていないが、家中の者に違いない。何度か、みたことのある顔である。相手も同じように感じたのであろう。少したじろぐようにみえたが、さよを背後にかばって胸をそらせ、昂然と立った源之丞の姿をみると、そのままには引っ込めなくなった。

「のけ！　何を出しゃばったことをする」

「ばか！　いい加減にしろ、家中の恥だぞ」

鋭い声であり、きびしい眼だった。

「なに！　なにが恥だ。かねて顔見知りの横田屋の娘、ここで会うたから、一杯進ぜようと話していたのが、何がわるい」
「この者、御存知か？」
源之丞は、肩越しに、さよに尋ねた。娘が、否定のしるしに強く頭をふると、
「みっともない、早々引取る方がいいだろう」
「引取ろうと、どうしようと、おれたちの勝手だ、人の指図は受けぬ、のけ！」
「のかぬ、と言ったらどうする」
源之丞の瞳の中に、ちょっと、愉快そうな、不敵な色がちらついた。
「ぬかしたな」
半ばの心配と、半ばの好奇心とで、とりまいていた人たちが、
「あッ」
「危い！」
と、二三間、どどっと、後にひいた。
男が、刀を抜いたのである。
「のかしてやろう、青二才！」

他の二人も刀を抜いた。
「ふふ」
源之丞は、冷笑を洩らした。
「うしろへ、下っておいでなさい」
さよに向って、静かにそう言ったが、そのまま、刀の柄に手もかけず、三本の刀を前にして、つっ立っている。
「斬れるか、その鈍刀で」
「な、なに、備前忠吉だ、ふ、ふった斬るぞ」
「ほ、忠吉か、これは失礼。では言い直そう。斬れるか、その腕で」
「くそっ！」
白い刃の先が、たそがれの空気の中に、大きく閃いた刹那、源之丞のからだが、ツと低く沈んで、
「ばか！」
刀が左へすっ飛んだのと、男が、うわっ！　と叫び、右手首を左手で押え、顔をしかめて、二三歩よろめいたのと同時であった。
「こやつ！」

右側から他の一人が斬り下ろした時には、源之丞のからだは、その手許に飛びこみ、肘が、相手の胸をしたたかに突いていた。相手は、たわいなく、よろめき、刀を手にしたまま、尻もちをついた。

第三の男が、ギョッとして、眼を大きくし、息をつめた時、地におちていた最初の男の白刃をひろいとった源之丞が、スパッと、肩先に一刀浴びせた。

「うーむ」

と、のけぞったのをみて、

「わあーッ」

まわりの人々が一斉に声をあげた。

文字通り、一瞬の間の、眼にもとまらぬ早業である。

「このぐらいでどうだな」

源之丞は刀を抛りだし、少しゆるんだ襟許をなおして、片頬に笑いを浮かべた。

最初の男は、まだ手首を押えたまま、第二の男は、尻もちをついたまま、茫然として、源之丞の顔を見、斬り倒された男をみた。

「心配するな、この男、斬りはせん。峰打ちだ。自分で驚いて、気を喪っているだけだ。ははは、その手首、二三日は痛むかも知れん。胸の方は、からしでもはっておいた方がいいな。何をぼんやりし

ている。早くこの倒れているのを連れてかえって、水でもあびせてやるがいいだろう」

「凄いぞ、凄いぞ！」

「千両役者！」

騒ぎたてる人々に、源之丞は、にこりと笑ってみせたが、すぐうしろに来ていた京吾と忠一郎を眼にすると、ちょっと、きまりわるそうな顔をした。

「はは、戻ろう、つまらんところを見せてしもうた」

そう言って、二人を促して立去ろうとするところに、

「あの、石川さま、有難うございました」

さよが、追いかけて来て、頭を下げた。女中も寄ってきて、くどくど礼を言う。

「わたしが、石川と、どうして知っているのです」

源之丞は、びっくりして尋ねた。

「いつぞや、賄方の御用で、清水町の下屋敷の方に、小島さまと――」

「あ、そうでしたか」

そこに行った記憶はあったが、さよは、その席には出てこなかったはずである。蔭ながら見て、それで、覚えていてくれたのかと、源之丞は、嬉しくなった。

札の辻まで来て、
「では――」
と、源之丞が挨拶すると、京吾は眼を笑わせて言った。
「源之丞、さよ殿を送ってあげろよ。ここで抛りだしては、仏つくって魂入れずだ、ははは」
源之丞は、赤い顔をしたが、悪い気持はしなかった。
「ほんとに、失礼でございますが、ちょっとお立寄り下さいませ」
さよの女中も、しきりにすすめる。
「はは、源之丞、すっかり照れていたな、存外可愛いところがある」
二人の女を送ってゆく源之丞の後姿をみて、京吾は、忠一郎に、そう言った。
「でも、源之丞どのの、先程の手並には、私はほんとうに驚きました。素晴らしいものですね」
忠一郎は、少年らしい感激の色を、面にあらわしている。
「うむ、思ったより出来る。あれほどとは思わなかった。だが、相手は酔っているのだ。あれほど手厳しくやらなくてもいい、軽くたしなめる程度でいいのだ。あの気合では、悪くすると、相手を不具にしてしまう。源之丞、少し、血気にはやりすぎるな」
忠一郎は、それには答えなかったが、腹の底では、京吾の分別くさい言葉よりも、源之丞の腕を讃

嘆する心の方が、はるかに強かった。

「尤も、川越小町の眼の前だ、多少、はでにやったのも仕方がなかったかも知れん、はは」

京吾は、何を思ったのか、この男には珍らしい陽気な顔付になって、くすりと笑いを洩らした。

重臣銭を愛す

生来長い顔なのだが、縦のしわが無数によっているので、ますます長くみえる。その長い顎を左手で撫でながら、多賀谷右近は、脂切って二重の猪首になっている三浦荏左衛門の顔を上眼づかいにちらとみて、

「横田へ御用金、どうしても無理かな」

「まあ、無理でしょう、何しろ、当地での出金が三万二千両、江戸藩邸へ二万一千両、合せて五万三千両では、いくら横田屋でも、こたえるでしょう」

「そうかな、まだ一万両ぐらいは、何とかなると思ったが」

「昨年、三井組の手を経て借り入れた上野御門跡の名目金の利息が払えずに困り切っていると聞いています、横田屋もこの頃は、大分つまっているようですよ、これを御覧なさい」

関八州田舎分限角力番付と書かれた紙をひろげた。

「東の関脇に、横田屋次郎吉が出ています。五年前の番付では東の横綱だったのですがね」
「ふむ、城下の商人で、他に番付にでているのはないのかな」
「西の四十六番目に小間物屋の間坂吉兵衛、東の六十一番目に呉服屋の近江屋半右衛門が出ていますが、衰えたりとはいえ、まだ横田の方がずっといいくらいでしょう」
「困ったな、困ったな」
「やはり、年貢米を余分にとりたてるより他はありませんよ。横田屋はしばらくいじめない方がいい」
「大分、横田屋の肩をもつな。ふふ、聞いているぞ。あそこの娘は、随分、別嬪だそうな。闇さびしさに、ひどく御執心だということだね」
「冗談でしょう。そんな。あの娘のことは、その、なに、全く別のことです。私は公私を混同するようなことはしません」
何をいうか、公けの仕事にかこつけて、私腹をこやすのが、何より得意なくせに、とおかしくなったが、考えてみれば、それは自分も同様だった。
「大丈夫かな、百姓ども、昨年でさえ、大分不服があったのだが」
「なに、この頃では、五公五民と言うのは、よそに比べて、それ程ひどいものじゃない、六公四民の

ところさえあるのですよ。五割を五分増したとて、納めきれぬはずはないでしょう」
「それも、そうだな、じゃ、そう決めよう、名目は、江戸藩邸増築と――」
「城下広小路の取拡げ――でいいでしょう。こちらは三沢組にやらせれば、うまくやりますよ」
「ふん、それはよいが、わしの方へ、大丈夫、その――回ってくるだろうな」
「それは勿論です」
「どうもね、いつも、お主にうまい汁を吸われて、わしは残りかすばかり食わされているのじゃないかという気がする」
「とんでもない、御家老、わしはただ御家老のために犬馬の労をとって、憎まれ役を買っているのです。手に入るものは、ほんのおこぼれですよ」
「ふふ、たまには、本当にそう言うことにしてもらいたいものだ」
「――それは」
「冗談、冗談こわい顔するな。ところで、早速、勘定奉行に話しておかねばならんが、格別支障はないだろうな。百姓共より、家中の者に異議が出ては困る。あのいつもよく理屈をのべる若い男、それ、あの、どうも年のせいで胴忘れしてこまる」
「石川源之丞ですか」

「それ、それ、あれは、お主の縁つづきじゃなかったか」
「死んだ源之丞の父が、私の従兄弟にあたります。あいつ、まことに困った奴で、生意気に理屈ばかりこねるものですから、私の甥の忠一郎まで、この頃は、やつに感化され、小生意気なことばかり言いおって」
「先日、祭の日に鉄砲組の若い連中と何かごたごたを起したというではないか」
「いや、あれは早速、とり調べてみましたが、鉄砲組の連中が泥酔して、町家の娘にいたずらをしたのを、源之丞が止めたとかいうことで——勿論、源之丞にも、少し手荒すぎると叱ってはおきましたが」
「はは、その町家の娘が、それ、横田屋の小町娘とあっては、助けた源之丞をあまり叱る訳にもゆくまい」
くそ爺、とぼけたつらして何でも知ってやがる、と甚左衛門は、いまいましくなったが、話を外らせて、
「源之丞が異議を申立てるようなら、私が押えますから、御心配なく、いずれにしても、こうしたことは、なるべく取急いで一気に決定してしまった方がいいでしょう」
甚左衛門は事もなげに、言ってのけたが、事実はそう簡単にはゆかなかった。

年貢米増徴の議が謀られると勘定奉行の小島兵庫も始めから反対したが、最も猛烈に反対し、甚左衛門に食ってかかったのは、ほかならぬ勘定吟味役の石川源之丞だったのである。

「一体、重役方は、百姓をどこまでも搾れるものと思っておられるのですか、手拭いでも搾りすぎれば糸が切れる。藩内の百姓は、この数年来の重税に、息を切らしてあえいでいる。この上、増徴ということになれば、無事では納まりませぬぞ」

「穏かならぬことを言う、無事で納まらぬとはどういう意味だ」

甚左衛門は、眼をいからして睨みつけた。

「一揆が起るというのです」

「ばかな！」

「ばかなことではない。百姓たちには命にかかわることなのです」

「藩内の百姓が、殿様の緊急の御用のために死力をつくして働くのは当然のことだ」

「広小路の取拡げは、結構なことですが両三年おくらせても差支えないものです、緊急の必要はありません」

「江戸藩邸の――」

「藩邸の増築も、待って待てぬことはありますまい、江戸の重役方納得されぬなら、私が江戸へ参っ

て、藩内百姓困窮のさまをとくとお話して、くりのべをお願いして参りましょう」

ふだんから気性のはげしい青年が、興奮して、遠慮会釈もなく、上役であり、縁つづきの年長者である甚左衛門につっかかってゆくのを、一座の人々は、はらはらして聞いていた。

京吾が、源之丞の袖を引いた。

「少し、言葉が過ぎるぞ」

軽くたしなめてから、甚左衛門の方に向って、

「年貢増徴のことは、大分異論が多い様子、われわれの間でも、も少し話し合ってみたいと思いますし、重役方においても、今一度とくと御勘考ありたく、今日は、この辺りで打切ってはいかがでしょう」

よいしお時とみて、甚左衛門もうなずいた。議論のすじ道は、明らかに、源之丞の方が正しい、言い込められて、危く肝癪玉を破裂させそうになっていたのである。

「なぜ止めたのだ、もっと徹底的に言ってやりたかったのだ」

城を下る途で、源之丞は、京吾に言った。

「いや、皆の前であまり手きびしく叱まされると、自分が悪いと思っても、後にひかれなくなるものだ。よい加減のところでやめて、相手に考え直す時間を与える方が利口だよ」

「手加減するというのは、私の性に合わないんだ」
「うむ、それは分っている。だが、危いな、いつか手ひどいしっぺい返しをうけるぞ」
「覚悟している」
「無用の摩擦は、できるだけ避けた方がいい、最後の決裂は、いつでも出来るのだ」
源之丞は承服しなかった。
いつも、妙に分別くさい口を利く京吾に、不満なのだが、今日は、自分の方が完全に正しいと思っているから、なおのことだった。
「まあ、ゆっくり話し合おう、今夜、晩めしを食べに来ないかね、久しぶりだ、千里も悦ぶだろう」
「うむ」
源之丞はしぶしぶ答えた。
京吾の妻千里は、源之丞の妹である。
だから、年は同じでも、源之丞の方が、義理の兄ということになる。ところが、二人一緒にいると、誰がみても、京吾の方が兄に見えた。
よく言えば、落着いているというか、思慮深いということになるのだろう。見方によっては、消極的で、意気地がないとも言える。

源之丞の父左源太は、妙にこの京吾が気に入って、生前、よく言ったものである。

「少し京吾をまねろ、お前は向うみずで、思慮が足らん。あれは、よく出来た男だ」

子供の頃からの親友のことだから、いくら京吾をだしにしてたしなめられても、別に腹は立たなかったが、京吾の消極的な生活態度は、いつも不満なのだ。

父の亡くなるすぐ前に、その希望で、京吾の妻となった千里は、容貌も気質も、兄の源之丞にそっくりだった。

明朗で淡泊ではあったが、女にしては、少々きつすぎるところもあって、良人に対しては、充分愛情をもちながら、時には、兄と同じような不満を抱くことがあるようにみえた。

「今夜は、源之丞がくるよ、うんと御馳走してやってくれ」

用人、若党など、男ばかりの味気ない男世帯の源之丞である。京吾の千里に言った言葉には、充分の思いやりがあふれていた。

千里も、嬉しそうな顔をした。

「先月から一度も見えないので、どうなさったかと思っていたのです。よかった」

「ところが、今夜は、私が叱られそうなのだ、千里はどうせ兄貴に加勢するから、二人にいじめられるかな」

京吾は、格別苦にもならぬ口調で、そう云って優しく笑った。

市兵衛の訴え

菊が、盛りで、高く匂っていた。

連日、よく晴れて、空気が清く澄んでいるせいもある。

が——若い二人は、その花の美しさよりも、匂いの高さよりも、自分たちの心に満ちている幸福感にうっとりし、お互に相手の瞳の中をみ入っているばかりである。

「おさよさん」

「源之丞さま」

いとしい名をよびあってみるが、さて、格別話さねばならぬこともないのだ。

あの祭の日、さよを送っていった源之丞は、むりやりに座敷にあげられ、主人の次郎吉以下総出の歓待を受けた。

さよの危急を救ってくれた恩人——という意味よりも、源之丞を藩の勘定方での、利け者と知っていた主人の、指図のためである。

「死んだ父の墓参に、つい近くの連馨寺へ毎月詣ります」

と、源之丞が別れ際に洩らした一言を、さよは、はっきり胸の底に納めた。

何気ない風にして、「偶然に」二人が出会ったことは勿論である。

前々から、さよの美貌にあこがれていた源之丞は、激しい性格をむきだしに、火のように燃えていった。その源之丞は家中でも評判の美青年である。赤間川の川開きの日にみせた源之丞の腕は、そのために、十倍にも凛々しく、さよの眼に映っていた。

美しい二人の、人目をしのんでより添っている姿が、妙養寺のあたりや、栄林寺のあたりに、通りがかりの人を驚かすことがあったが、だれも、その絵に描いたような美しさに、はっと胸をつかれ、あとになって、ゆっくり、羨望の念をもやすのだった。

源之丞は城下第一の富商の家に育つ、美しい娘として、最も仕合せに暮らしているものと思っていたさよが、必ずしも、そうではないと知って、哀恋の情をますます強くかき立てられた。

さよは横田屋次郎吉の実の娘ではなく、その妹の遺した子であった。次郎吉の実の娘は二人いた。二人とも年頃であったが、義理にもあまり美しいとは言えず、まだ婿も決っていない。

さよが、美しすぎることが却って彼女を不幸にしていたのだ。二人の従姉妹の嫉妬をひそめた意地悪な態度に、いつも泣かされていた。

伯父の次郎吉が、さよを一応大事にしたのは、彼女の美貌を、自分の商売上の利益を確保するた

め、いつか充分に利用するつもりでいるからである。

「だれも、本当に、心を打ちあけて話しをする人がありません。母が死んでからは、たった一人なのです」

長い睫毛を伏せて言うさよを、源之丞は、骨のくだける程、抱きしめてやりたいと思った。

「おさよさん、もうひとりではない、私がいる。私はあなたを仕合せにするためなら、どんなことでもしよう」

「源之丞さま、私うれしい」

源之丞はもう三四ヵ月して父の喪があけたら、すぐ誰か仲に入って貰って、横田屋に申し入れるつもりでいる。

武士と町人という身分のへだたりは、大した故障にならない。横田屋は町人ながら苗字帯刀を許されていたし、藩の財政上の功績はよく認められていたから、必要とあれば、相当な家中の武士を仮親にすることぐらいは何でもないことだった。

「もう少しの辛抱だ、おさよさん、年が改まったら、すぐに、あなたを貰い受けます」

「え、早く、おそばにいられるように、毎日、祈って――」

二人の話の内容は、この頃、もう、つきつめれば、それだけのことになっている。

数ヵ月後には間違いなく来るだろうと思われる幸福の生活を、待ちのぞんで、夢のように、心を躍らし、つかの間の逢う瀬を楽しんでいるだけである。

「あ、もう六つの鐘が――」

多賀町の屋並をぐっと突き抜けて聳えている「時の鐘」が、響いてきたのだ。

鐘の音は、商家に働く人々には、そろそろ、一日の労働が終ったことを、遊楽の業に従う人々にはそろそろ一夜の忙しない喧噪の時が始まることを知らせて、家並の上をひびく。

だが、二人の恋し合うものには、別れの時のきたことを、多少の哀愁の思いをひそめて、しらせるのだ。

「源之丞さま、戻らねばなりませぬ」

「おさよさん、じゃあ、十二日のいつもの時刻に」

袖をひるがえして、しなやかな姿は、たそがれの中に遠くなっていったが、角を曲る時、こちらを向いて、小腰をかがめ、視界から消えた。

楽しい夢の途中で、ふっと目がさめたような、名残惜しさが、源之丞の若い胸を一杯にした。

その思いを振りすてるように首を一つふって、源之丞は歩きだした。

御厩下の屋敷に戻ってくる。

この辺りは、侍屋敷がつづき、御納戸、物頭、御使者、目付など、百石から二百五十石位の禄高をもつ連中が住んでいた。

屋敷は何れも二三百坪程度である。

その一つに、近づいた源之丞が、

「あれは？」

と足をはやめた。自分の屋敷の前で、中間たちが三人、何か声高に罵っているのだ。

「どうしたのだ、騒々しい」

「あ、旦那さま、お戻りなさいませ」

「おお、市兵衛ではないか」

中間たちにかこまれるようにして、六十位の男が腰をかがめていた。

「石川さま、有難い、お目にかかれて——お願いでございます、——五カ村の百姓一同に代って」

おろおろ声でそういって低く頭を下げた。その両眼に必死の思いがこめられている。

「中へ入るがよい」

言いすてて、源之丞は先に立った。

市兵衛は南畑村の名主である。源之丞も役目の上で、数回会ってよく知っている。義侠心の強い、

まっ直ぐな性格の男とみていた。

五カ村一同に代ってという言葉に、源之丞は容易ならぬものを感じたが、果して、市兵衛の話したことは、これは、と胸を重くするものであった。

今年の収穫は、虫害と旱ばつのために惨澹たるものである。数年来の重税に弱り切っていた百姓たちにとって、泣きっ面に蜂であった。

にも拘らず、年貢は例年通り、きびしく督促された上、代官所から、

「近々に、江戸藩邸御増築と、城下広小路取拡げのため、年貢の追加が課せられるらしいから、その心積りでいるように」

という内意を伝えられたのである。

百姓たちは騒ぎだした。家老の多賀谷が、増税の度に私腹をこやしていることは、百姓たちにも知れているのである。

「江戸へ行って、殿様に直訴しよう」

そういきり立つ人々を市兵衛が押えた。

「待て待て、直訴となれば犠牲も出る。わし一人で済むことなら、いつでもするが、お咎めは多くの村人に及ぶだろう。殿さまに直訴する前に、わしが石川源之丞さまにぶつかってみよう。昨年のごた

ごたの時のことでも分っている。あの方は、年は若いが、まっとうな人だ。よく事情を話したら、何とかして貰えるかも知れない」

百姓の現在の苦境を詳しく書いたものを懐中にして、市兵衛は、源之丞を訪れ、理由を言わずに、ただ会わせてくれと言い張って、中間どもに、どなられていたのである。

自分たちの猛烈な反対を押し切って、年貢増徴を、重役連中は強行してしまうつもりらしい。腹心の代官たちに、もう、その内意を伝えているのだ。

源之丞の胸には、勃然として憤りが湧き上ってきた。

「よし、重役連中に、かけあってやろう」

その夜の中に、同志の連中に話した。

翌日から、多賀谷以下の重役に向って、痛烈な弾劾運動を開始した。

具体的な数字を挙げて、ぐいぐいと重役連中を、せめたてた。

どこから、それだけの資料を得てきたのかと驚きながら、多賀谷たちは、もうこうなれば、権威的に圧服する以外に途はないと腹をきめた。

「既に決定したことだ、今更変改はならぬ、よい加減にせい」

「決定とは怪しからぬ、われわれは一度も賛成してはおりません」

「お前たちが賛成しなくても仕方がない。一応、皆の意見はきくが、決定するのは、われわれなのだ。出すぎことを言うまいぞ」

「しかし、われわれは役目柄、こんな無茶なことは黙視できません」

「黙れッ、分をわきまえぬ奴、下れッ、強いていいつのれば、引き込み申しつけるぞ」

重役連中は、最後の高圧手段に出た。

「卑怯な――」

歯がみしながら、源之丞は、城を下った。京吾の屋敷に寄って、夜分遅くまで、憤慨し、議論した。帰ろうとすると、京吾は、刀を手にし立上った。

「送ってゆこう」

「送る？　何故だ」

「気をつけた方がいいのだ。随分、にくまれているからな」

隻腕断つ

大丈夫、と笑って京吾を押し戻し、若党の佐吉をしたがえて、門を出た。

空は高く、風が冷たく、月が清い。提灯は不要だった。

道の両側に寺があって、長い白い土塀がつづいた。一方の塀は暗く蔭をおとし、他方の塀は、月影に青白く透き通るように見える。

ところどころの土塀の中側から突き出ている大きな樹が、道を横切って、黒く枝の形をおとしていた。

寺の白塀がぷつりと切れて、ちょっとした木立ちの中へ入った時、源之丞は、突然、

「おっ」

身をとび退さらせて、刀の柄に手をかけた。

その胸先二三寸のところを、槍の穂尖が電光のように流れたのである。

「何者だッ」

叫んだ時には、右手に白刃がひらめき、目の前に、たたッと前のめりに倒れた男があった。

「石川源之丞だ。人違いするなッ」

答えはなかった。明らかに、源之丞と知って待ち受けていたものである。

鋭く眼をくばると、木立の蔭に、三人五人、七人まで、抜身を構えた黒装束の影を数えることが出来た。

まだ他にもいるかも知れないのである。

右に飛び交いざま、一人の胴を薙ぎ、大木を背に、足場を固めた。

「佐吉、うしろを固めろ」

勿論、大した腕はない若党だが、主の感化で、一通りは心得ている。うしろから狙う敵を防ぐ楯には、充分である。

主従は、松の大木を間に、背を向き合せた。しかし、相手は、ただ、源之丞だけを、一気に打ちとめようとかかっているらしい。

依然無言のまま、じりじりと包囲をせばめてきた黒装束の一人が、腕に覚えのある男か。真向からだっと斬りかけてくるのに、われからふつかるように一足ふみ込んで、見事に喉首をつき刺した。相手は、

「ぐえっ——ううっ」

と、怪鳥のような声をあげ、ふりかぶった刀を、拝むように立てると、どっと首すじに血をふき上らせて、仰向けに倒れた。

それから、どの位の時間、闘ったのか、たしかに、六人までは斬り伏せたにも拘らず、源之丞をとりまいている白刃の数は、少しも減っていない

どこかに隠れていたのであろう。

このままでは、気力が尽きる——源之丞は、それを怖れた。既に、数カ所に、手傷を負っているのである。

包囲の一角を破って、人家のある方へ逃れるよりほかはない。

「佐吉、すきをみて走れ！　人に知らせるのだ」

と言いすてると、包囲陣の真只中に、ぐわーんと、身をぶっつけ、袈裟がけにその一人を斬り倒して走り抜けた。

走りながら、右に、左に、斬った。

立ち止っては刀を交えた。

佐吉が脱兎のように、敵の間をぬって、町並の方へ奔ってゆくのをみた。その時、左手の上腕から肘にかけて、激しい痛みが、突き走って、左手が動かせなくなった。

槍で、突き貫かれたのである。

辛うじて、その槍をもった男の小手を薙ぎ、よろめくところを腰に一太刀あびせたが、右側に隙があったか、太股にきりつけてきた男の刃を避けそこねた。

左手と右股の深傷には、さすがの源之丞も、戦闘力を著しく、減殺されざるを得ない。

——もう、これまでか。

森は尽き、人家が目の前に見えたが、そこまで斬り抜けてゆく力がありそうにもなかった。斬り死、——と覚悟した時、意外にも、相手方に奇妙な混乱が現われたのである。

源之丞の背後で、

「うう」

「あっ」

と、悲鳴が聞え、源之丞を追いつめようとしていた相手に、狼狽の様子がみえた。

——何人か、助勢だな。

と直感すると、源之丞は、最後の勇気を揮いおこした。身近の男に向って、刀を力一杯叩きつけると、相手は、蛙のようにはいつくばった。

「旦那さまア——」

前方から、大きく声がして、佐吉を先頭に、七八人が走ってくるのが見えた。

敵方が、

「退け！」

と、合図して、背後に引返えしてゆくのを、よろめきつつ木にすがって、源之丞はみた。森の向うの外れでは、半ば逃足の敵方を相手に白頭巾をすっぽり被った男が一人、飛鳥のように、木の間を飛

びかい、斬りまわっていた。

あの男が——助けてくれたのだ。

そう感じながら、源之丞は、どたりと地にくずれ落ちた。

屋敷につれ戻されて、意識をとり戻した時、源之丞は、自分がすっかり着換えされているのに気づいた。

「懐中に入れた書類は？」

「は、懐中に？　別に何もございませんでしたが」

「しまった」

市兵衛の書き記した書類を、乱闘の間に落してしまったらしい。おそらく、襲撃者の手に渡ったであろう。

「市兵衛をよんでくれ」

三四日前から邸内の一室を与えられていた市兵衛が、枕許ににじりよると、

「市兵衛すまぬことをした。お前の書いた書類を奪われた、相手は何者とも知れぬが、十中八九、家老の手のものと思う」

書類には市兵衛の名が、はっきりと記されているのである。

「はい、私は覚悟致しております」
「いや、江戸へ逃げてくれ、今すぐ立て」
「江戸へ？」
「そうだ、後のことはとにかく、とりあえず江戸へ走れ、捕えられては、お前ばかりでなく、村の連中にも面倒なことが起る」
むりやりに支度をさせ、その場から市兵衛を江戸のしかるべきよすがの家に向かわせた。
急をききつけて、馳せつけた京吾が、その時、慌ただしく入ってきて、
「源之丞、傷は大丈夫か」
「うむ、これしきの傷――ただ、奴らの卑怯なやり方が、腹立たしい」
「気を鎮めた方がよい、や、これはずいぶん、手ひどくやられたな」
「思いがけぬ助勢がなければ、斬死するほかはなかった。白頭巾の男が目ざましい闘いぶりだったが、誰と見定める間もなく、気を喪ってしまったのだ」
「何者か知らぬが、間にあってよかった」
「残念ながら、おれも、このからだでは、当分動けぬ、年貢増徴の件、何とか、皆でくいとめられぬか、いっそ、江戸へ出て、幕府の大目付に訴えでたらどうだろう」

「いかん、それでは松平の家名に疵がつく、悪くすれば、つぶれる、それはいよいよ最後の手段だ」
「うーむ」
「公儀の手をかりずに、藩内だけでおさめねばならぬことだ」
「しかし、われわれ一同、口をふさがれてしまった上、こんな卑劣な手段までとられては」
「まあ、落着け、何とか考えてみる」
明方になると、親しい連中が、続々と見舞いにつめかけてきた。
気丈な源之丞は、それらの人々に対して、
「なあに、大したことはない」
と、笑って応対していたが、傷は存外重く、右股のはどうやら癒ったが、左肘の傷が骨を貫いており、しかも傷口から膿んで、原始的な医術では手のつけようもない始末になってしまった。
左腕は斬りおとすより他はない——と、医者の玄朴に宣言された時、源之丞はさすがに、ずしりと胸の底に、黒い鉄の塊りを投げこまれたような衝撃を受けたが、即座に、
「斬って下さい」
と言い切った。
左腕が切り落されている時の、言語に絶する苦痛を、源之丞は、両歯をくだけるほどかみしめて堪

え切った。

しかし手術が終った時、

「とうとう、おれも、片輪になったな」

と、洩らした一言には、深い絶望のひびきが、ひそめられていた。

不具——という自覚が、こうなっては、さよを貰うわけにはゆかぬ、という思いを改めてはっきり意識させたからである。

しかも、ちょうどその時、藩庁から、命令がきた。

「ほしいままに私闘して、手傷を負ったことは不屈至極、まして不具の身となったとあれば、お役目も充分にはつとまるまい、役目取り上げの上、閉門仰せつける」

百姓一揆

「御用金を仰せつけられることに、殆どきまっていたのだ、御家老はいまだ一万両位なら、何とかなるはずだと言っていた」

三浦甚左衛門は、下を向き、煙草を強く二三度パッパッと吸って、吐月峰を叩いた。下を向くと、この男の猪首は、なおのこと太くなって、三重のしわが首筋によった。

横田屋次郎吉は、狐のような眼で、その甚左衛門の、もくもく動く首筋を眺め、

——ふん、また恩に着せやがる、何をねだるつもりかな、この強つくばりめ。

と考えたが、さあらぬていに視線を、庭に移した。

広い庭の、池の傍に植えられた紅葉の葉が少し紅るんでみえる。池の中ほどで、ポシャリと、鯉のはねる音がした。

「——が、わしは極力とめた。多少無理かと思うたが、年貢米増徴という方に、強引に説き伏せたのだ」

「いつもながら、三浦さまにはいろいろと、御心配頂きまして」

横田屋は、尤もらしく頭を下げた。いくら出さなければならないかなと、心の中では計算している。

「はは、改まって、礼を言われては、少々照れくさいが、頼みたいことがある」

「はあ——」

「知っての通り、先年、家内を亡くして以来、やもめ暮らし。うじは湧かぬが何につけても不便だ。あんたの姪御とか聞いたあの娘御、どうだな、後添いに貰えぬかな」

「さよを？」

「親と子ほどの年の違い、不満もあろうが、世間にためしのないことでもない。来て貰えれば、あんたとは縁つづきになるわけだ、今後とも、親身になって横田屋のためを計らってあげるつもりだ」

「はあ――」

特別器量のよいさよを、家においては、実の娘たちの縁談のさわりになる、もうそろそろ、損のないところに片づけてしまおうと、娘にそそのかされて考えていたことだ。この助平たらしい猪首の五十男には、少々勿体ないと思うが、将来の利害を考えれば、秤にかけて、必ずしも損とは言えない。

即座に承諾の腹は決ったが、少しは相手をじらせてやった方が効果的だと頭を働かせ、いずれ、本人の心を聞きましてから、と一応、筋の通った答えをした。が、勿論、本人の意志なぞは、始めから問題にしていない。

その横田屋の心を、すっかり読みとっているのか、甚左衛門、くどく念を押すこともなく、機嫌よく、横田屋を送り出された。

と、入れちがいに、家老の多賀谷から、

「即時、登城されたい」

と、人が来た。

折角、非番で、のんびりとくつろいでいるところをと、少々不平に思いながら、出かけていった甚

左衛門の顔をみるなり、多賀谷は、言ったのである。

「困ったことになったぞ、困ったことに」

「どうしたのです」

「百姓共が騒ぎを起こしおった。貴公は大したことはないと言っていたが、百姓共、思いのほか、性根を据えて暴れだしおった」

「どこの村です」

「南畑村だ」

「あ、市兵衛とかいう名主の――」

「そうだ、石黒らが、源之丞から奪ってきた書類をもとに、市兵衛始め組頭、百姓代らを捕えにゆかせたところ、市兵衛は素早く逃亡して村におらん。他の奴らを、引ったてようとすると、百姓ども、すき、くわ、かま、竹槍ひっかついで手むかいおった」

「たかがそれだけのことなら」

「いや、まて、百姓ども、役人を追い払うと、所詮、あとの咎めは脱れられぬと覚悟しおったか、火の見櫓の鐘つきならして、南畑、鶴瀬、大井、高階、福岡、五カ村の人数をかりあつめ、代官屋敷を襲って乱暴しおったのだ、他の村々も、騒ぎだしている」

これは容易ならぬことだと、甚左衛門も少々狼狽した。自分が強く主張した年貢増徴が惹起した騒動だけに、責任は重い。

「強力な兵力をさしむけて、ひと思いに弾圧してしまう方がよいでしょう」

「そうかな、下手をすると、火に油をそそぐような結果になりはしないかな、増徴とりやめを布告して、なだめた方が得策ではないか」

「いや、この際、弱味をみせてはいけません。烏合の百姓ばら、少しきびしく攻めたてれば、追い崩すのは何でもありますまい」

困ったことになったと慌てている自分の心の弱味をおしつぶすように、勢いこんで甚左衛門は、強硬な弾圧方針を主張した。

だが、——派遣された相当兵力の藩兵が、烏合の百姓の一揆勢に、さんざんに打破られ、もろくも撃退されたという驚くべきしらせが、次々ときた。

「腑抜けめ、どうしたのだ、だらしがない」

と、いきりたつ重役たちに、報せの者が告げたのは、次のような事実である。

討手の勢が、一揆勢とぶつかったのは砂新田から藤久保に通じる街道の中途であった。

蔗旗を押し立て、何の秩序もなく、ただひた押しにすすんでくる百姓勢をみると、藩兵を率いてい

た家老の腹心井川常之介、馬上につっ立ち上り、

「一押しにもみつぶせ――」

と、勇ましい命令を下した。

鉄砲で、真先にすすんできた百姓を二人討ち倒し、一揆勢が、さっとたじろくのをめがけて、討手は、ばらばらと散開し、三方からとりかこむように攻めよせた。

槍をもった侍がまっ先に突っこんだ。

一揆勢の隊列が乱れると、刀をふりかざしたものが、そのすきに乱入した。

無統制の一揆勢は、忽ち大混乱を来たし、多くの者は早くも、戦列を脱れて逃げようとする。一部のものが浮足立った時には、全体の戦闘力は半減するものである。

機を外さず討手の士卒は、斬りまくり、追いまくった。

もはや一揆勢は総崩れ――とみえた時、東手にあった森の中から、馬を飛ばして忽然と現われた白頭巾をかぶった覆面の一騎、寄手の中に割って入るや、右に左に、大刀をふるって薙ぎ立てたのである。

馬のひづめに跳ねとばされるもの、大刀に槍先を斬り落されるもの、刀をふっ飛ばされるもの、数を知らず――

「あっ――」
「おのれ」
「何者！」
と、わめき立てながら、どっと崩れ立つ討手の中を、まっしぐらに、井川常之介の馬の傍にのりつけた白覆面、底気味の悪い低い声で、ただ一言、
「奸賊の片われ、覚悟！」
剣が、井川の顔前に、ひゅーっと、白光を引いて走った。
と――馬が首を斜に裂かれて棒立ちとなり、危うく鞍壺にとりつかまった井川は、右肩から七八寸、斜に斬り下げられて、どうと地上に転落した。
主将が討たれては、おしまいである。
討手の勢が急に怖気づいて、退却の態勢にうつると、一揆勢は逆に、勢いづいて、
「わあーッ、大将をやっつけたぞ」
「ぶっ殺せ、ぶっ殺せ」
と、押し返えしてくる。
馬上の白覆面は、その一揆勢の先頭に立って、落兵を追いまくった。

半刻足らずの中に、討手はさんざんに敗北し、鳥ヶ岡近辺から本街道を、あえぎあえぎ退いていった。

唯一騎、その敗退する軍勢を、あくまで追いつめるかの如く馬をとばしていった白覆面は、不思議や、城下に入るすぐ前あたりで、ふっと森の中に姿を消してしまったのである。

「ありゃ、だれ様じゃろ」

「まるで鬼神のような働きだったのう」

「八幡さまのお使いじゃなかろうか」

百姓たちは、そう言いかわしながらも、元気十倍し、勢にのって途を転じ、上神岡に押しよせ、代官屋敷を占領し、備え付けの鉄砲その他の武器を奪い、夜に入ると、かがり火をたいて、落兵の来襲にそなえて、気勢をあげた。

翌日、入間川のほとりで、入間、堀兼、大東各村の一揆勢に遭遇した討手も、殆ど同じような経過を辿った。

一揆勢が正に敗れようとした時、川上の方から、疾風の如く馬をとばせてきた白覆面の武者が、討手の勢の中に馳せ入って、縦横無尽に暴れまわって、形勢を逆転させてしまったのである。

しかも、それ程すさまじい活躍をしながら、白覆面が斬り殺したのは、討手を率いていた松井軍之

進、——悪代官として年来憎まれていた男——ただ一人であった。

そして、白覆面が忽然と姿を消したことも前日と全く同じであった。

「八幡さまのお使いだ」

「八幡さまが、おらたちを助けて下さるぞ」

百姓たちは、今や異常な闘争心を湧かし、官兵の来襲を待ちうけている——報告は、大体、このようなものであった。

「何者かな、そやつ」

「不埒な、お上を怖れぬ外道め」

多賀谷と三浦甚左衛門とは、互に顔を見合わせ、憤怒をぶちまけ合ったが、対策は緊急に立てなければならない。

「もっと大規模に兵を動かす他はあるまい、鉄砲組を総動員しよう」

多賀谷が、思案に余った様子で、そう言いだすと、逆に三浦が押えた。

「いや、鉄砲組総出動となれば内乱ということになる、公儀への聞えもまずいでしょう。それより、市兵衛を捕えて、百姓どもの気勢をくじくのが良策」

源之丞江戸へ

起きられるようになった源之丞は、縁の柱にもたれて、眺めるともなく庭を眺めていたが、頭の中に浮んでいるのは、さよのことであった。

もう半月以上も会わないし、連絡の方法もないのである。自分の遭難のことは聞いたであろうか。何も知らずにこの前の約束の日、妙養寺の椎の木の下で、待ちくたびれて、しょんぼり帰っていったのではなかろうか。

不具の身となった今は、あの美しいさよをめとる資格は失われたものと、自分で自分に、はっきり言いきかせたつもりが、やはり思い切れず、一度会いたい——と思いつづけているのである。

「こんなからだになった私だ、ない縁と思って下さい」

そう言う自分に、さよが身を投げかけて、

「源之丞さま、何をつれないことを。さよの心は変りませぬ」

と、熱っぽい瞳で、答えてくれる場面を想像すると、胸がどきどきした。

——それでも、自分は、身を退くのだ。あのおさよさんには、片輪の身はふさわしくない。悲愴な、しかし、どこか甘酸っぱい気持で、源之丞は、胸の中に呟いてみる。

「源之丞どの、今日は、御気分はどうです?」

うしろから呼びかけられて、びくりと夢想からさめると、年少の友人深井忠一郎が庭木戸の処に立っていた。

閉門中であるから公の交通はとめられていたが、裏木戸から、そっと訪ねてくる分には、黙認されている。

「有難う、大分いい」

と答えた時、ふっと、この少年に頼んで、さよとの連絡をつけて貰おうか、という考えが浮んだ。それを、口に出そうとした、ちょうどその時、忠一郎が言いだしたのである。

「横田屋の——川越小町、いつかのあの祭りの日のひとです、覚えておいでですか」

忠一郎は、あの日の後、急速に進んでいった源之丞とさよとの関係を知らないのである。源之丞は、やや曖昧にうなずいた。

「あのひとが、三浦の伯父のうちに来るのです」

「え、おさよさんが——どんな用件で、くるのだ」

うちに来る、という言葉の意味が、急には理解できなかった。

「伯父の、後添いとしてです」

「なに！」

ぐわんと、頭部を鉄棒でなぐられたような衝撃だった。まさか！　と打消しながら、

「本当か、忠一郎」

「本当です。昨夜、横田屋から正式の返答があったそうです。あの美しいひとが、伯父の、あの伯父の——と思うと、なんだか、切ない、苦しい気がしてならない」

伯父をよく知っているが故に、伯父を軽蔑している少年であった。

「およしさんが——」

文字通り愕然とした思いをこめて吐き出したその一言を、忠一郎は、自分と同じ、若く美しいさよに対する、ほのかな憧憬のあらわれと聞いて、哀しげな瞳で答えた。

忠一郎が帰っていってから、永い間、源之丞は、茫然と畔を据えていた。ドス黒い、冷たい、奇妙な感覚が、全身を次第にしびれあがらせてゆくような具合だった。

「畜生！」

甚左衛門は三千石の大身だ、藩の重役だ、横田屋とは切っても切れぬ悪縁がある、だからとて、あの好色の五十爺のところへ——そんな女だったのか。

自分に誓ったあの数々の愛の言葉も、なよやかに身をなげかけてきたあの身ぶりも、みんな、偽り

だったのか。

諦めたはずの、女に対する激しい嫉妬が、突然、全身にむらむらとわき上って、源之丞の眼が血走ってきた。

何をするつもりか自分でもはっきり分らず、ただ、じっとしていられなくなって、すっくり立ち上った時、用人の樫村が、姿をみせた。

「ただ今、御城代さまから、お城にお召しでございます」

閉門の身に突然の呼び出しは、どうせ、ろくなことはあるまいと思ったが、どうでもなれという、すてばちの気が強くなっていた。

城中に上ってみると、紅葉の間には、家老以下、重役連中が、居並んでいた。

「源之丞、市兵衛の居所を知っているであろう、正直に述べろ」

「市兵衛とは？」

「南畑村の名主だ、とぼけるな、去る十日夕刻、その方の屋敷を訪ねたことは調べがついている」

「あ、南畑村の名主ですか、それならば存じておりますが、その男が、今どこにいるやら、私の知るはずはありません」

「白々しいことを言う、市兵衛の書き記したもの、その方が所持致しておったのは、何故だ」

「市兵衛の書いたもの？」
「これだ」
どさりと眼の前に抛り出されたのは、たしかに、市兵衛から預かったものである。
「これは――全く見覚えがありませんが」
源之丞は、ふてぶてしい態度で、しらを切った。甚左衛門、たちまち、肝癪筋を額に立てて、
「し、しぶとい奴め、おのれが懐中から落しおったものを、あくまで知らぬと、偽り通す気か、たわごと申すと許さぬぞ」
「私が懐中から落したものだと――ふうむ、これは驚き入った。しからば申上げましょう、いかにもその通り、――してみれば、先夜この源之丞を襲うた曲者どもは、重役方歴々のさしむけたものか」
片膝立てて、きっと睨んだ。
思いがけぬ逆襲に、多賀谷始め一同、しまったと顔を見合せたが、こうなれば、遮二無二、上役の威光で、抑えつけてしまうほかはない。
「ば、ばかめ、盗人たけだけしいとは、その方のことだ、虚言ばれたとみて、居直るとは不埒な奴。あくまで、市兵衛の居所知らぬとあれば、拷問にかけても口を割らすぞ」
「面白い、出来るものなら、やってみるがよいでしょう」

さよを喪ったという絶望感から来た自暴自棄、殊にさよを奪った当の相手甚左衛門を眼の前にして、源之丞、われながら、口に出してからハッとした程、乱暴なすてぜりふをはいたのである。

「無礼者！　召捕れ！」

声に応じて、縁側の方に控えていたものが三四人、ばらばらとかけよって背後から押しよせようとするのを、素早く向き直った源之丞の顔に、すさまじい殺気が流れたとみるや、

「ばか！」

二人が、どこをどう打たれたか、左右に、どうと倒れた中間をぬって、さっと、源之丞のからだは広縁に逃れていた。

「来い、うぬら」

その右手に、脇差が、抜かれている。

「相手は片輪じゃ、押しつつんで召捕れ」

庭に飛び降りた源之丞をとりかこんで、十数本の白刃が迫った。

まだ本当でない病み上りのからだの、つづく限り、必死に暴れた。十人近くの相手を傷つけたが、自分も数ヶ所手傷を負った。

相手の大刀に対して、脇差一本で闘う不利も大きかったが、何よりも、慣れない隻腕の働きに、疲

労が激しかった。

じりじりと押され、泉水の傍の樹の根につまずいてよろけたところを、前後から飛びかかられて、ついに縛り上げられた。

「追って手ひどい仕置きをくらわしてやろう、しかと監禁しておけ」

即座に、牢に抛げこまれた。

からだは綿の如く疲れ、傷口は骨を貫くほど痛んだが、神経だけは異常に鋭くたかぶっている。

——畜生、拷問すると言いおったな。誰がくそっ、武士たるものが、拷問の辱かしめなぞをおめおめ受けて堪るか。明日は、奴らの前で、いいたいだけのことをぶちまけて、いざとなったら、舌を噛み切ってでも死んでやる！

最後の腹を決めると、少し落着いたのか、疲労が限度を越えたためか、暁方近くになって、とろとろとまどろみかけた。

が——

「あっ」

と叫ぶ牢番の声に、はっと眼を開いて、外をうかがうと、薄暗い灯の前に長い影をおとして、立っている男の姿があった。

白覆面――をしていた。

抜身を牢番につきつけ、身ぶりで、鍵を開けと命じている。

「御身は――」

開かれた格子口から、にじり出て、問いかける源之丞に、指を一本立てて、黙っていろという意味を示し、ふるえている牢番に当身をくらわせて、気絶させた。

そのまま、暗い通路を先に立って、外へ導き出すと、道端に用意してあった馬を指し、源之丞の懐中に、金包みらしいものを押し込み、一言も言わず、さっと闇の中に姿を消してしまったのである。

さよ江戸へ

午後九時近いであろう。その日の三時頃、川越の内川の新河岸を出た早舟が、志木から宮戸のあたりにかかっていた。

乗客は二十五六人、胴の間に集まっている。

真中につるした二尺回りの大提灯には百目蠟燭が一挺ともされているだけなので、薄暗く、隅の方にいる人の顔は、さだかに見えぬ。

数人のものは、手のすいている船頭も交えて、大提灯の下の半畳をかこんで、退屈しのぎに賭博を

やっている。

そのにぎやかな騒ぎをよそに、町家のものらしいのが三四人、ともに近いところで、話していた。見知らぬ同士だったのが、先刻の夜食頃から、どうやら、打ち解けてきたらしい。

「一揆も収まってよかったですね」

「本当によかった、今にも御城下まで押しよせてくるのじゃないかと思っていましたがね」

「大きな声じゃ言えないが、お役人衆弱ったらしいですね、とうとう年貢引上をとりやめたのだから」

「いや、それは全く八幡さまのお使いとかいう白覆面のおかげですよ」

「でも、一揆の主謀者たちは、きついお仕置になるらしいじゃありませんか」

「それがね、皆、うまく逃げてしまったらしい、何でも南畑の名主の市兵衛というのが、江戸から糸を引いて、江戸へ逃げさせたとか言いますよ」

「市兵衛と言えば、そら石川源之丞とかいうお侍が、逃がしたと言うじゃありませんか」

「それそれ、私はね、白覆面というのは、本当はその源之丞って人じゃないかと思いますよ」

「いや、源之丞って人は、何でも片腕をなくしたって言いますが、白覆面は、両腕揃っている」

「私は聞きましたがね、源之丞っていう人は、牢を破って江戸へ逃げたそうな」

「いや、市兵衛が、牢番に金をやって助け出したんだって噂ですよ」
「本当に江戸へ逃げたんですか、途中で捕まって殺されたとか聞きましたがね」
「なあに、もうちゃんと、江戸の市兵衛のところに隠れているそうですよ」
口々にいい加減な当推量で話している時、ふなべりに近く身をよせて、しょんぼり俯向いていたお高祖頭巾の女が、ふいにからだを起した。
「もし、あの――」
よびかけられた町人は、自分の方に向いたお高祖頭巾の中の白い顔が、薄暗い中に、異常に美しいのに吃驚した。
「は、え、あの、私ですかい」
「え、あの、只今の、その市兵衛さんとかおっしゃる方、江戸のどこにいらっしゃるのでしょう」
「さ、それは、どちらと言って、私や知りませんよ、ただ噂に聞いたばかりで」
「御存知よりの方ですかい」
「おっ、何なら、江戸に行って、一緒に探して上げましょうか」
おっちょこちょいらしいのが、美しい女とみて、すぐに口を容れた。
「いえ、あの」

噂話をしていた相手に聞いたのが無理だったと気がついたのか、女はそのまま背をみせてしまった。

男たちが、心残りになって、何度か話しかけてみたが、もう、相手になろうとしない。ただひどく、心細げに、思案している。

棹をさしている船頭の船唄が哀調をおびて、水の上を流れている。

女は、そのまま一睡もせず明る朝八時頃、船が千住大橋につくと、他の乗客たちと共に、岸に降り立ったが、さてどうしようかという風に、ぼんやり立ちすくんだ。

その背をちょっと指でついた六十余りの老爺があった。前夜、隅の方で、一言も言わず、むっつりねころんでいた老人である。

「もし、お前さま、市兵衛どんを探してなさるので?」

「は、あの市兵衛さんに会えば分る人を、尋ねているのですが」

「市兵衛どんのとこにお連れしやしょう」

老爺は、あたりの人の去ったのを見すまして、言った。

「御心配には及びませんや、あたしは、入間村の組頭の太郎衛門てもの、市兵衛どんを頼って行くところですよ」

「私は、御城下の横田屋のみうちでさよと申します」

「あ、川越小町と噂に聞いていた娘さんですかい、道理で、滅法美しいと思うた」

さよは勿論、一面識もない市兵衛に会いたいのではない。船の中で耳にした一言で、もしかしたら、市兵衛という男に会えば、源之丞の消息が知れるかも知れぬと、思いついたのである。

横田屋の伯父から、三浦甚左衛門へとつぐように言われ、のけぞる程、驚いたが、必死の勇気をふるい起して、断った。

が、勿論、それを聞入れる伯父ではない。取急いですすめられてゆく輿入れの準備をみるにつけても、どうしてよいやら、思い余って、何とでもして源之丞に一目会いたいと思いつめていたが、その源之丞が重傷の身を牢に入れられ、脱出して江戸に奔ったらしいと聞いて、矢も楯も堪らず、横田屋の家を逃げだしてきたのである。

「そうでしたか、お嬢さま、残念ながら、源之丞さまの行方は、私は知りませぬ。江戸へ出られたと聞いて、心当りは出来るだけ探しておりますが」

尋ねあてた市兵衛に、そう言われて、さよは、

「ああ、どうしましょう」

と、途方に暮れた。

「ご案じなさいますな、きっと探し出します。それに源之丞さまの方では、私の居処を知っていなさる。その中、何かのたよりがあるかも知れません。しばらく、ここにお居でなさいまし」

さよは、力なく、うなずいた。

同じ頃、川越の堅久保町の屋敷で、京吾と妻の千里が珍らしく激しいいさかいをしていた。——と言っても、ぷんぷん怒っているのは千里の方で、京吾は、にやにやしているばかり、それが余計に千里の気にさわるらしい。兄に似て、細面の、きめの細かい、美しい顔を、あられもなく険しくして、良人に食ってかかっているのである。

「御用、御用と、いったい何の御用でございます。この頃は、ひるはもとより、夜分さえ、満足に家にいらしたことがないではありませんか」

「そうでもない、先頃少し忙しかっただけだ」

「お上の御用があると言われた日、小仙波の辺りを歩いていらしたのを見た者があります。あそこは喜多院に近く、遊廓のあるところだと言うではありませぬか」

「そうか」

「そうかではありません、ゆうべも夜分おそくまで、小島様のところにいたというのも、どこまで本当やら、お上の御用とはどんな御用でございます」

「女の知らぬことだ」
「いいえ、倉光京吾の妻として、万一の場合、承わっておきたいと存じます」
「まあ、そう四角張るな」
「いいえ、ごまかそうとなさってもだめです、お仕事の内容を承わりましょう」
「実は、お上の仕事ではない」
「それ、ごらん遊ばせ」
「ま、待て、お上の御用ではなく、お上の仕事をやめさせようという仕事だ」
「は?」
「この頃、藩札発行の話が出ているのを聞いているだろう」
「はい」
「あれをやめさせようとして同志の人たちと走りまわっているのだ。先般の年貢引上が、よい塩梅に中止となったと思うたら、重役連中、性こりもなく、新しい計画を立てて、私服をこやすことを考えているのだ。藩札が濫発されれば、忽ち物価は暴騰し、庶民何れも苦しまねばならぬ」
言われてみれば、千里も、反駁する理由はなかった。だが、ここでやめておけばよいのに、京吾つい口を辷らせた。

「そんなことになっては、命をかけて、年貢引上をやめさせた源之丞にも済まぬ」
「その源之丞のことでございます」
千里は、陣容を立て直した。
「源之丞、重傷の身で江戸へ逃れてから、どう致していることやら、あなたにも義理の兄、少しは、心配してやって下さい」
「心配している」
「一向に、そのようには見えません」
「心配しても、江戸のどこにいるか分らないのだ」
「だから心配なのです、何とでもして探して下さい」
「源之丞のことだ、死にはせん」
「まあ、あなたは――」
「その内、何とか言ってくるだろう、こちらは向うの居処を知らないのだが、向うはこちらを知っているのだから」
「あなたは、何という冷酷な方です」
「別に冷酷とは思わないがな」

千里は、良人を睨みつけ荒々しく座を立ってしまった。

「それみろ、知らせてきたではないか」

その翌日、源之丞から、内密のたよりがきた。

京吾は、にやにや笑っている。

「私は江戸へ行ってきます。兄がどんなにしているか、気がかりですから」

「それは、ちょうどいい」

「え?」

「私もゆくつもりだったのだ」

「え!」

この人は、訳の分らない人だ——と言うように、千里は、いつもの通り柔和な眼で自分をみつめている良人を見返えした。

京吾の秘略

芝は神明町の相当な商家の立ちならぶあたりも、ちょっと横に入れば、左右に割長屋の入口が並んで、間口一間半、奥行二間、一カ月の家賃、八文から十文という侘びしい住居。

その一軒の門口に、時ならぬ容姿のととのった侍夫婦が立寄って、中をうかがっていたが、

「源之丞、源之丞」

と、声をかけた。中で、人の立つ気配がして、隻腕の武士が顔を出し、

「お、京吾、おや、千里も一緒か、どうしたことだ」

「うむ、ちょっと江戸の滞邸にどうしても談じ込まねばならぬ用があって出てきた。ゆっくり話す」

「それにしても、千里は」

「はは、これは、私の目付役だ。川越で、私が喜多院裏あたりをうろつくという評判が立ったので、奥方逆鱗――」

「まあ、あなた――」

「いや、本当のことだ、江戸へ独りで出しては何をするかも知れぬという訳で――」

「何をおっしゃるやら、私は兄さまのことが心配だったので、出てきたのです」

「門口で夫婦喧嘩されてはかなわん、まず上ってくれ」

たった一間の、中に通った京吾は、

「からだはどうだ」

「もう大丈夫だ、手紙でも頼んだが、命の恩人白覆面の正体は解ったか」

「解らん、一揆の時の男と同じ人物だろうとは思うが、――一揆の時のは、源之丞だという噂もある」
「冗談じゃない、私は片輪になっていた間のことだ、――そう言えば、一揆はどうやら片づいたらしいね」
「うむ、実はそれについて、問題が起ったのだ」
京吾は改めて藩札発行計画がはじめられていることを詳しく話した。
「国許では畢竟、埒があかぬと見極めた。止むを得ぬ江戸の重役諸公によく話し、場合によっては、殿にも申上げるつもりだ」
「よく、出府を許したな」
「なに、勝手に出てきたのだ」
「えっ」
「お咎めは覚悟している」
いつも、慎重で消極的な京吾が、無断出府をあえてしたことだけでも異例であるのに、処罰を覚悟していると、平然と言ってのけるのである。源之丞は、吃驚して、相手を見返したが、
「それじゃ、藩邸にも、すぐ、国許から報せが来ているのだろう。うまく重役連中が話を聞いてくれるかどうか」

「抜目のない多賀谷や、三浦甚左衛門のことだ。江戸家老の堀中美濃や好田筑後あたりにも、充分手を打っているかも知れない」

「それでは、折角出てきても、無駄ではないか」

「無駄かも知れんが、やってみる。いよいよ駄目なら、別の手を考える。何れにしても、これは取りやめさせねば、川越領十四万の町人百姓おしなべて、塗炭の苦しみをうけることだ」

翌朝、身なりをととのえて、上赤坂溜池台の藩邸に出かけていった京吾が、午過ぎに戻ってきた。

源之丞が、待ちかねて、

「どうだった」

「だめだ」

顔色も動かさず、あっさりそう言ってのけると、千里の方を向いて、

「今から浪人だよ、貧乏を覚悟してくれ」

「えっ」

川越藩邸に出向くと、無理やりに江戸家老堀中美濃に面会し、国許の政道の乱脈ぶりをつぶさに話し、先般の百姓一揆の実情などもくわしく語って、藩札発行が、領内の経済を全く攪乱するに違いないことを、口を極めて説いたのである。

だが、凡て、無駄であった。

多賀谷右近と、完全に気脈を通じている堀中は、頭から受けつけないのである。その上、

「ほしいままに出府してきたことは不埒千万、早々国許へ戻って逼塞しておれ、追って厳重に処罰する」

と、叱りつけられた。

「お聞き入れなくば、国へ戻りません」

「なに?」

「江戸において、藩札の発行、あくまで中止させてみせます」

「ばかめ、勝手なことは許さん」

「お許しをうけずともよい」

「ふ、不礼者め、それが上役に向って言える言葉か」

「上役には失礼でしょう、だが、私が禄を返上し、天下の浪人となって申す分には勝手でしょう」

「なに、なに、禄を返上?」

「はい、今日、只今、倉光京吾、川越藩を脱します」

呆然としている堀中を尻眼に、京吾は、そう言いすてて、戻ってきたと、いうのである、

「思い切ったことをしたなあ、いつもの京吾に似合わぬ」
「あっはっは、きっと源之丞に感化されたのだろう」
平気で笑った。急に真顔になって、
「源之丞、今、江戸で一番繁昌している武芸の道場はどこだ」
「小野派一刀流、浅利道場だろう。実は、私も、数日前から、そこに通っている」
「もう、竹刀など揮っていいのか」
「片手しか利かぬための不覚は身にしみてこたえた。この片手を両手以上に使いこなせるよう、必死の修練を励んでいる。今の私には、もう、これ以外には、生きる道はないのだ」
さよを喪って、絶望の中に源之丞が見出した唯一つの支柱——それは、剣の道以外にはなかったのである。
「源之丞の腕で、それほどの熱意ならば素晴らしいものだ。隻腕ということなど問題になるまい」
「そうなりたいと思っている」
「ところで、私も、その浅利先生の道場に紹介してくれないかね」
「えっ、本当か?」
源之丞は嬉しそうな顔をした。

もともと、源之丞と京吾は、川越藩で並び称された使い手である。それが、数年前、何と思ったか、京吾が突然、

「私はもう、剣の修業はやめる」

と言いだしたのである。理由をきいても言わないし、いかにすすめても、二度と道場に姿をみせようとはしなかったのだ。

それが、急に、浅利の道場に通いたいと言う。

源之丞は、直ちに、浅利道場に紹介した。

「どうしたのだ、京吾、ちっとも稽古をしないではないか」

その日の帰り途に、源之丞が聞いた。京吾は、道場の片隅に坐って、じっと、人の稽古をみているだけだったのである。

「うむ、そのうち、やる。今日午どきに来ていた背の高い、眼の大きな男、大目付土屋紀伊守殿の家臣とか言ったな」

「吉住竜之介だ。あれは出来る」

その翌日、京吾は、吉住竜之介と、竹刀を交えていたように見えたが、帰りには、源之丞に断って、吉住と一緒にどこかへ出かけていった。

割長屋に戻ってきたのは、夜もかなり更けてからのことである。
珍らしく、酒の入ったらしい顔を、桜色にほてらせて、いたずらっぽい目付で千里を眺めて、
「怒るなよ、奥方、悪所通いではない。武道の話をしてきたのだ」
「どうだかわかりませぬ」
「これは怪しからん。全く以て、真実、偽りのないところ、武芸の話をしていたのだ」
「さようでございますか」
「これ、そんな眼付をするな、弱ったな、源之丞、何とか言え」
「何も言うことはない、吉住氏と、どんな話をしていたのだ」
「実はな、明日、土屋殿の邸に伺って、紀伊守の家中の方々と試合をする約束をした」
「ふうむ、土屋家へ仕官するつもりか」
存外、世故にたけた抜目のないことをすると、源之丞、少し呆れた顔をした。京吾はそれを別に否定もしない。
翌日、夕方になって帰ってくると、
「はは、うまくいった」
「仕官が決ったか」

「えっ？　誰が、仕官すると言った。ただ試合をしにいったのだ。中村勘十と立合った」
「中村勘十と言えば、甲源流の名うての腕利きだが――どうだった、結果は」
「相打ちだ」
「中村と相打ち？」
「うむ、勝てぬこともなかったな」
信じられぬ、という顔つきの源之丞をみて、にやにやした京吾は、
「はは、私のうぬぼれだよ。それは。とにかく、うまくいった、土屋殿と、じかに話をしてきたからね」
「あっ、京吾――そうだったのか」
「そうだ、一介の浪人が、天下の大目付役と話をするのは、こうした方法しかないのだ。二度三度話すうちには、必ず、よい機会をとらえて、土屋殿の手で、藩札発行を中止させるようにしてみせる」
「京吾！」
「或いは、川越藩松平大和守の家にとっては、多少傷つくことになるかも知れぬ。が、それもやむを得ぬ、と私は決心した。川越十四万の町人百姓のいのちにはかえられぬ」

道場からの帰り途、京吾が言った。

「今夜は、多分よそにとまる。千里に、そう言っておいてくれないか」

「土屋殿のお邸か」

「そうだ、きのう土屋殿に、何もかもぶちまけ、必死の嘆願をしてみた。幸いによく分ってくれた。大目付から、正式に、藩庁に話が出れば、松平大和守の家は無事では済まぬ、で、土屋殿の用人、倉鹿三衛門どのから、私にあてた個人的な私信の中で——川越藩の政治向著しく乱れ、百姓一揆につづいて、藩札発行の企てあり、庶民困窮しておる由、土屋殿が事の序でに洩らされ、ひどく心配しておられた——と書いてもらうことにして頂いた」

「うむ」

「その手紙を、殿にみせて、土屋殿が、正式に声をかけられる前に、手を打って政治向きを改めねば、御家がつぶれますぞと脅かすつもりだ」

「どうやって、その手紙を殿にみせる?」

「藩邸へ乗りこむさ」

「家老はじめ、邪魔するだろう」
「邪魔する者は斬るさ、——じゃ、千里に伝言たのむ」
淡々と言い切って別れていった京吾の後姿を見送って、源之丞は、妙な薄気味悪さを感じた。おとなしい引込み思案の男とばかり思っていたのが、とんでもない思い違いだったような気がする。少なくも江戸へ出てきてから京吾の行動は、源之丞の思いもよらなかった積極的なてきぱきしたものである。
「不思議な奴だな」
思わず口に出して、そう呟きながら歩きだしたとき、背後から、思いつめたような声が、
「もし——」
と、呼びとめた。
ふりかえった源之丞が、
「お、市兵衛ではないか」
こちらへ、転がるように走りよって、
「あ、やっぱり石川さまでございましたか。よかった、よかった、お会い出来て」
「市兵衛も、無事だったか。その内、お前のかくれ家にも行ってみようと思っていたが、一探の主謀

者の探索が、大分きびしいと聞いていたので、却って迷惑になってはと思って遠慮していたのだ」
「あのかくれ家は、もう、藩の方に見つかってしまいました」
「えッ、それでお前や、お前の処に逃げてきた者たちは――」
「それは運よく捕えられずにすみましたが、それよりも石川さま、大変でございます」
「どうしたのだ」
「おさよさま――が、捕えられました」
「なに、おさよ？　横田屋のか」
「はい」
「おさよが、どうして、捕えられたのだ、何の罪で誰が捕えたのだ」
「三浦甚左衛門さまが捕えて、連れてゆかれたのです」
「慌てるな、甚左衛門なら捕えたのではない。おさよさんは甚左の処へ嫁入ることになっているのだ」
「源之丞さま、何を落着いていられるのです。一体どなたのためだと思っておられます。源之丞さま、あなたをお慕いして、女の身一つで逃げてこられたのではありませんか」
「なに、おさよさんが、三浦の縁談を嫌って、江戸へ逃げてきていたのか」

パッと、明るい炎が、源之丞の頭の中に燃え上り、ずきんずきんと、血管が音をたて、活き活きした血潮が流れだした。

「ほんとか、それは」

「ほんとうにもなにも、私の処にずっといらしたのです」

「それが、甚左衛門に捕えられたというのは、一体どうしたのだ、慌てずに話せ」

「慌ててるのは、源之丞さま、あなたの方でございますよ。三浦さまが、落札発行のことで出府しておいでになり、どのようにしてか、私のかくれ家をつきとめたのです。そして、六七人の者を連れて私を捕えにいらしたのですが、ちょうど、私は留守、ひとりおられたおさよさまを捕えてゆかれたのです」

「い、いつのことだ、それは」

「一昨日の夜です。それから、何としてでも、源之丞さまにお知らせしなければと、足を棒にして、あちらこちら盛り場を走りまわっておりました」

さよの江戸へ来てから、その頼みを待つ迄もなく、力をつくして、探していたが、どうしても分らなかった源之丞に、こうしてひょっこり会えたのは、まるで夢のような話だと市兵衛は、くりかえし奇遇を悦んだ。

が、源之丞の胸の中には、さよが、三浦甚左衛門を嫌って、江戸へ逃げてきた、という唯一つのことが、大きな光の玉となって、くるくる回り回っているばかりである。

しかも、市兵衛は、

「源之丞さま、あなたを慕って」

と言ったのだ。どうせ自分は片輪になったのだという卑下の心も、三千石の三浦に見かえた薄情な女と憤った心も、煙のように消え失せてしまって、おさよに対するかつての、はげしい想いが、せきを切って奔騰し、空たかくふき上げるかとさえ思われた。

「市兵衛、よく知らせてくれた、有難う。おさよさんは、きっと、この源之丞が救いだす」

市兵衛に住所を教えて別れた源之丞は、宙を踏む心地で、神明町裏の、鬻長屋に戻ってきた。

「どうなさったのです。まるで、夢をみているような顔をして？」

千里が、吃驚して、尋ねた。

「うむ、夢をみているのかも知れない。失ったと思っていた私の若い命のもとが、もう一度、みつかったのだ」

何を言いだすのかと、いよいよ呆れている千里に、市兵衛から聞いたことを話してきかせた。

「まあ、あの川越小町と言われたおさよさんと、そんな仲になっていたのですか。本当に男の人は油

断がならない」

ああそうだ、おさよさんとのことはまだ千里も京吾も知らなかったのだった、と源之丞は、ちょっと眼のふちを紅くした。

「ともかく、今夜、藩邸へ忍び込んで、おさよさんを助けだしてくる」

「一人ですか」

千里は、ぎょっとしたような瞳になった。

「むろんだ」

「京吾に相談して下さい。あの人でも、何かの助けになるかも知れません」

「こんな危ないことに、京吾を引入れる訳にはゆかん。あれは、大事な仕事をもっている。おさよさんのことは、私一人のことだ」

「と言って、たった一人で忍び込んで、もし見つかったらどうするのです」

「男は、本当に、自分のしたいと思うことをする時には、命は棄ててかかっているものだ」

「いけません。そんな乱暴な。京吾に話してからにして下さい」

「京吾は、多分、今夜は帰れぬと言っていた」

「明日まで、のばせばいいではありませんか」

「のばす？　ばかなことを言うな」

あのさよが、人もあろうに、甚左衛門の許に捕えられているということが分った今、明日まで延ばすなど、どうして出来よう――源之丞は、とんでもないことをというようなきびしい顔で千里を睨んだ。

千里の、もしかしたら京吾が戻ってくるかも知れぬ、それまで待ってくれという嘆願も、ついには涙をこぼしての抗争も、無駄であった。

源之丞は、その夜、亥の刻（午後十時）、厳重に身支度をして、溜池台の川越藩邸に向ったのである。

片腕の悲しさ、塀をのり越えることは諦めるほかはない。少し冒険だったが、正面切って、門番に声をかけた。

「花川戸の藤屋から、火急の用でござります。門屋様のところへ通らせて頂きます」

藩の定宿から、内証用人の長屋への急使と聞いて、ぎいっと開かれたくぐり戸を、中へ一歩入るや否や、相手の脾腹をついた。

「どうしたのだ、拗八」

妙なうなり声に出てきた男も、素早く急所をついて気絶させ、塀に添って、東へ走った。少しゆけ

ば武器庫があり、その傍に年寄役の住居、それを越すと、小菜園がある。その右手にある屋敷が、国許から出府してくる相当な身分のものや、その部下の宿所にあてられている。

以前、二度ばかり、役向きで出府したことがあったので、この辺の事情は大体心得ていた。

源之丞は、誰にも見咎められることなく、甚左衛門の宿所と思われる建物に近づき、雨戸にひたと、身を寄せた。

火を噴く隻腕剣

「もういい加減で、強情張るのはやめたらどうだ。わしも辛抱強い方だが、いつまでも我儘はゆるさん」

「――」

「ふた夜、考える余裕を与えてやったのだ、もう納得が入ったと思う。わしの言う通りすれば、今度の不始末はなかったことにしてやろう。な、どうだ、さよ」

「――」

「横田屋もずい分心配しておる。あの店を生かすもつぶすも、わしの心一つなのだ、そこも考えてみるがよい」

だらしなく何時間でも、盃をはなさないのが、甚左衛門のくせである。そして、その間、ひっきりなしに責めたてるのだ。それも、もう三日目である。

さよは、心身ともに疲れ切った。どうにでもなるがよい。どうにでもするがよい、こんな男のものになって堪るものか——と、おとなしい娘が、初めて、はっきり口に出した。

「どう仰せられても、いやでございます。市兵衛さんの処へ帰して下さいまし」

「なにっ。ふーむ、これ程言うても分らんか、一揆の張本人市兵衛の処にかくれていたというだけでも、重罪に当るのだぞ」

「では、どのようなお仕置でもなすって下さい」

「こいつめ、居直りおって——それほどあの青二才の源之丞に惚れおったか」

嫉妬と憤怒とで、年齢も身分も忘れた甚左衛門は、酒やけのした顔に、目ばかり異様にギラギラ光らせたが、いきなり、さよの手をつかむと、ぐいと引寄せ、手首を逆にねじ上げた。

「あ、痛ッ」

「いたいか、ふん、もそっと痛い思いをさせてやろう、しぶとい奴め」

力任せに腕を背に折りまげる。さよのからだは横ざまに倒れ、裾が乱れた。

そのくずれた膝に走らせていた甚左衛門の眼に、突然、嫉妬と憤怒とは別の、狂暴な色が走り、

「こいつ！」

左手の盃をなげだし、全身でさよのからだを押し倒した。

「いけません、だれか！」

夢中で突き飛ばし、背後にころげ、かたんと障子にからだをぶっつけ、肩で息をしながら、再びつかみかかってこようとしている甚左衛門の、いやらしく歪んだ顔を睨んだ。

かんざしを引抜いて、逆手にもった。

敵わぬまでも、相手の眼を突いてやるつもりである。

「小娘の分際で、大それた奴」

甚左衛門は、傍においた脇差をひっつかみ、鞘を払った。

おどしのつもりか、本当に斬るつもりか、本人にも分らなかったろう。さよの肩先に斬り下ろそうとした刹那、障子が、がらりと開かれた。

「三浦甚左衛門、醜いぞ！」

開かれた障子一杯に立ちはだかった男が、低い、しかし鋭い声で、言った。

「源之丞さまっ」

さよが狂喜の声をあげて、その裾にまろび寄ったのと同時である。

「うぬ、源之丞」

一瞬の驚愕から立直った甚左衛門が、斬ってかかるかと思うと左にあらず、逆にたたっと下って、背後の襖に手をかけ、

「曲者だっ、出会え、出会えっ」

と叫んだ。

「おさよさん、私のあとを離れるな」

言いすてた源之丞が、たっと前に出て、その上半身が、ななめ前に傾いたと思うと、

「奸賊、覚悟っ」

「うわっ」

右から左へ、胴を深く薙がれた甚左衛門が、脇差をポロリと落とし、襖と共にどうと倒れたのである。

「おさよさん、庭へ」

さよをかばいつつ、庭へ降りた時には、十人余りの者が、四方から馳せつけていた。

「曲者ッ」

「石川源之丞だなッ、神妙にしろ」

白刃をぬきつれて、ひしひしと迫る。

「ええい、うぬら、三浦の尻について、よからぬことばかりしおった奴輩、松平家のためにも、片っ端から叩き切ってくれる、来いッ」

「相手は片輪だッ、召し捕れ、手に余らば斬りすててもよい」

指図しているのが、甚左衛門の腹心、早川修一郎とみてとった源之丞、

「おのれから、斬りすててくれるわ」

飛びこんで、打ち下ろした片手拝み打ちの一閃、かわす間もなく、早川が悲鳴を上げてのけぞった。

「来るかッ」

「おのれッ！」

「えいッ」

「うわッッう、う」

何人か、斬り倒し、傷つけた。

その中にも、さよを誘導しつつ、表門の方へ脱れ出てゆこうとするのだが、集まってくる邸内の侍の数はますます多く、逆に、奥へ、奥へと追いつめられてゆく。

「源之丞さま、私にかまわず、お逃げ下さいませッ」
おろおろして、おさよの叫ぶのに、
「ばかな、死なば諸共だ。ええいッ——おさよさん、この人数では脱れられぬかも知れぬ、覚悟して下さい——とうッ」
「源之丞さま、すみませぬ、御一緒に死ねれば、本望でございます」
返り血を浴びて、半身真赤になった源之丞の姿が、青白い月光の中に、阿修羅の如く暴れた。
「かっ！」
凄まじい叫びが源之丞の唇から炸裂することに、
「うおッ」
悲鳴が、直ちにつづいて、人影が、急回転し、どうと地に落ちた。
血が、刃を流れて、鍔に垂れ、さんばらに乱れた髪が、額に、血と汗とではりつく。疲労が、次第に、源之丞の息をせわしくしていった。
「のけ、おれが、やっつける」
腕に覚えの男らしいのが、ぐっと前に出て、すさまじい勢いで、真向から叩きつけてきたのを、発止と受けとめた源之丞の刀が、半ば辺からポキリと折れて、飛んだ。

「あッ」

危うく二三歩退って、脇差を引き抜いたが、もうだめだッと、源之丞も最後の決意を固めた。

「おさよさん、すまぬ、死んでくれ」

「はい、源之丞さま」

二人がひたとからだを寄せた時、とり囲んでいた侍たちの背後に、異常な驚きの声が上った。

「やっ何者っ」

「おお」

「白覆面だっ」

江戸邸の者も、一揆の際に現われて魔訶不思議な働きをしたという白覆面のことは聞いていた。その白覆面が、右手に大刀をふりかざして、息もつけぬすさまじい気魄で、躍りこんできたのである。くずれたつ人数を、右に左に、ぶった斬り、叩き伏せ、白覆面は、ぐんぐんと奥御殿の方へ進んでゆく。

不思議に、その白覆面も、片腕なのである。——だが、その不思議さに、だれも気づかぬほど、完全に圧倒されていた。

怪鳥の白鉄の嘴の如く舞う右手の一剣は、忽ちにして、左から狙う敵を一薙ぎして顔を斜に割り、

忽ちにして、右から斬りつける敵を一突きして脾腹を深く貫くのだ。

走りつつ、斬りなびけつつ、血飛沫と、悲鳴と、怒声の中を、悪鬼の如く妖魔の如く、白色の怪物は跳躍した。

「殿の御座所をめざしているぞ」

「打ちとれ、打ちとれ、不敵な奴」

口だけは達者にわめきながら、余りに冴えた白覆面の血を噴くばかりの烈々たる剣先に、もはや、誰一人立向おうとする者さえない。

ただ、津波にさらわれるように、奥へ白覆面を追ってゆく。

奥御殿の広庭に面した雨戸は三四枚開かれ、掲げられた灯の下に、藩主典則が、かけつけた江戸家老、御用人以下の武士に守られて姿をみせていた。

「殿の御前だぞ、曲者を、早く討ちとめい、曲者は片輪ではないか、不甲斐ない者ども」

堀中美濃の叫びに、必死になった二三人が、行手を遮るのを、無言のまま、目にもとまらぬ早業で左右に斬りすてた白覆面、飛鳥の如く縁に近づき、始めて一声、

「奸賊！」

堀中美濃に一刀浴びせて斬り伏せた。

あっとあわてふためく近侍のものには目もくれず、大和守典則の前に片腕つくと、白刃を背にまわし、その時までぶらりと下っていた左袖から、一通の書面を差し出した。

「殿、お家の浮沈、これをとくとごらん下さい。大目付土屋紀伊守殿の御意向の記された書面です」

パラリと顔を覆った白い布を取り払ったその男の顔をみて、

「あっ、京吾！」

遠くから、血だるまのようになって闘いつつ、白覆面の行動をみていた源之丞が、驚愕の声を洩らしたのである。

「よく晴れたなあ」

京吾は、割長屋の狭い路地からみえる空を仰いで、言った。

傍にいる千里と源之丞の顔色は、頗る微妙である。千里は、どうやら、身も世もあらぬほど気まりが悪いらしく、良人の横顔にちらちらと眼を走らせては、もじもじしている。

源之丞は、今朝から、もう何十遍目かに、呆れた男だ、この京吾という奴は——と、心の底でうなって、何か言いそうにしながら、また、改めて、呆れている。

さよだけが、ただもう嬉しくて、素直な悦びの色を一杯にあふらせて、源之丞にみとれ、何かして

上げることがないかと、そわそわしているだけである。

京吾がいつもの、静かに落着いた声で言った。

「ところで源之丞、これからどうする」

「私は、剣の道で立ちたいと思う」

今となっては、京吾に向って、少々面映ゆい言葉だったが、そう答えるより他はない。

「うむ、源之丞の腕なら、そこらの町道場なぞとは比較にならぬ立派な道場ができるだろう」

「京吾はどうする、藩に戻るか」

「はは、まかり違えば松平の家をつぶしてもと考えた男だ、今更、戻る気はない」

「私の仕事を助けてくれないかなあ」

「私は剣は嫌いだ、昔から言ってる通りにね。源之丞が道場を開いたら、その隣りで寺子屋でも開こうか。私はこれでも字は割合いに上手いのだよ。尤も、奥方の御意向を伺わなければ、勝手にきめると叱られる」

「あれッ、私は何も――あなたのおよろしいように――」

「ほ、ばかに素直だな、今夜が怖い」

「あれッ」

思わず噴き出した源之丞が、ふいと思いついたように聞いた。
「京吾、昨夜、何故片腕しか使わなかったのだ」
「えッ」
と見返えした京吾が、なんだつまらぬという風にやさしく笑った。
「源之丞のまねをしてみたのだよ、片手でどの位斬れるかと思ってね」

兵庫独り旅　¥290

著者無検印承認

昭和四十二年三月一日印刷
昭和四十二年三月五日発行

著作者　南條範夫
発行者　角谷奈良雄

発行所　株式会社東京文藝社
東京都新宿区払方町一
振替・東京二一七五七
電話・(三六〇)二五五〇

南條範夫残酷全集

1～3巻　320円
4～12巻　300円

1	古城物語	乱世に陥ち築かれた古城に伝わる生生しい挿話の全貌を描く凄惨の名作
2	剣士凡て斃る	空前絶後の悲惨をもつて終る駿河御前試合の真相、死臭あたりに満ちて
3	五代将軍	綱吉治世の元禄、絢爛の中に淫靡邪悪をはらむ…退廃の所産虚妄の残酷
4	右京介巡察記	悪計の罠におち切腹して果つ父の影像を脳裏に残虐の復讐に立つ右京介
5	武士道無惨	封建時代を醜悪な変態社会とみる南條残酷の真髄と、その血腥さい歴史
6	士魂魔道	炎上する大坂城をあとに青雲の夢を賭け、江戸へ雲集する数組の男女！
7	続 士魂魔道	或者は悲運落魄或者は剣技冴えを増し、無頼に堕ち自をひさぐ無惨の譜
8	廃城奇譚	残醜を晒す城趾、立つものをして幽冥の慟哭を感ぜしむ廃城の歎と戦慄
9	燈台鬼	生人間の燭台となる幽鬼慄然の直木賞受賞作燈台鬼他11編……
10	梟　首	三百数十の人命を一夕に断つた首塚由来を描く梟首他10編……
11	武魂絵巻	戦乱の気いまだ冷めぬ徳川幕府草創の期、秘めたる大望に剣を執る武魂
12	続 武魂絵巻	忍者、怪剣士、美女の中にありて豊家再興に命を賭す幸村の遺児…